NO. 45
SPRING
1974

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：オーラル・アプローチ再評価

安井　稔・伊藤健三・山家　保

（座談会）　隅部直光・下村勇三郎

井田米造・石川喜教・松下幸夫

ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL

英語展望

NO. 45
SPRING
1974

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima
The English Language Education Council, Inc., Tokyo

【国際展望】
国際交流と英語……小川芳男 2
理解すること・させること……田崎清忠 4
国際化時代と英語……広田孝太郎 6
On Leaving Japan ……Robert S. Ingersoll 8
【特集】 オーラル・アプローチ再評価
座談会 オーラル・アプローチ再評価
……隅部直光・下村勇三郎・井田米造・石川喜教・松下幸夫 12
オーラル・アプローチ論……安井 稔 17
Oral Approach の再評価……伊藤健三 21
オーラル・アプローチ……山家 保 25
前提(Presupposition) ……太田 朗 32
Mass Media and Youth: Audio Visual Media ……國弘正雄 35
「平均的アメリカ人」に対するイリノイ大学生の見解……長谷川 潔 42
和文英訳二題……國弘正雄 44
【連載】 英語になった日本語(2)……長谷川 潔 49
Silence Is Not Always Golden (6)…… David Hale 54
Crossword Puzzle……C. V. Harrington 56
【新刊書評】 *Studies in Honor of Albert H. Marckwardt* ……山家 保 57
Grammar and Meaning……原田信一 59
新刊紹介…… 61
新刊案内…… 63
展望通信…… 64

表紙デザイン・カット
太田英男

国際交流と英語

OGAWA YOSHIO
小 川 芳 男

国際交流の必要性が叫ばれている．日本が今後生きのびて行くためには国際交流以外にはない．このことは交通機関の発達した今日物理的な必然性でもある．今や世界のいかなる国も完全に孤立した形では生存ができないのが実情である．特に単一民族，単一言語をもって二千年来島国に居住してきた日本はその中に徳川三百年間の鎖国をはさんで内部的に深化し，充実した面もあるが国際的には孤児であり，温室の花である．民族も文化も同族結婚では健康で強靱なものは育たない．

交流というものはもともと reciprocal なもので一方通行ではない．換言すれば give and take である．外国の文化をとりいれると共に外国の文化に何等かの寄与貢献をしなければならぬ．今日のように時間的に狭小になった世界において相互依存度というものは従来みなかったほど高まっている．岡倉天心は Asia is one といったが今や The world is one である．かつて H.G. Wells の言った The United States of the World が今日では時間の問題となっている．世界のどのような片隅における些事も，次の瞬間世界の隅々にまで伝わり影響を与える．アメリカが風邪をひけば日本が咳をする（あるいはその反対）といわれたが，そのように国際関係は刻々密になっている．最初はベトナムの南北戦争の如く思われた局地戦が世界中を動かしたことはすでにわれわれが経験してきた通りである．つづいては中東戦争が世界を動かし，その結果としての石油問題が世界の経済に深刻な動揺を与えたことはまだ記憶に新らしい．一国のみの繁栄ということはもはや砂上の楼閣である．相手国の繁栄がなくては自国の繁栄もない．

このような国際化の時代に国際交流の手段としての言語のもつ使命は大きい．国際交流の手段としての言語は一切の理屈を抜きにして現在では英語であることは何人も否定し得ないところであろう．話しあいによる意志の疎通のないところに国際協力も共存共栄も世界平和もない．この国際語としての英語がわが国においては必ずしも means of communication となっていないのは残念である．ある者は英語を communication の means として使える人を（自分にその力のないことを棚にあげて）英語使いとか，通訳，通弁という言葉で軽侮しようとする．その反面英語が使えることを殊更他人に吹聴しみせびらかそうとする．何れも言語本来の目的を忘れた態度である．言語として英語を探求する人をのぞいては英語はそれ自身が目的でなくて道具である．従って言語はわれわれの servant であって決して master ではない．ただしこの国際的な使命を果す servant を最も効果的に使用するためには servant の身になり，servant の心を充分知っていなくてはならぬ．言語という servant を余り軽視すると思わぬしっぺ返しを食うであろう．

最近東南アジアをはじめとしていわゆる developing countries を訪問してみるとわが国から多くの指導員が派遣されている．そしてこの指導員の相手となって働く partner が一般に counterpart と呼ばれている．ところが日本の指導員とこの counterpart の意志が必ずしも疎通しないのは悲しい事実である．counterpart の多くは英語に通じているが，指導員の方の英語が通じないばあいが多い．発展途上国は nationalism の気運が強く国語 (national language) を確立しようと努力している．現地に指導に行く人間は少しでよいから現地の言葉を学習しようという意欲と努力が必要であろう．その国の言語に対して敬意を表わさなくてはその国の民意を掴むことはできない．ただ現実の問題として新らしく育ちつつある言語を習得することは容易ではない．また現地の counterpart としても日本語を充分習得することは困難であろう．その結果が英語が lingua franca の役目をするのであるが，多くのばあい counterpart の方が指導員よりも英語が上手なのは残念ながら事実である．

一般論として日本人は外国語に対する尊敬と理解が少ない．日本人が外国語に弱いといわれる一因であろう．日本国内にある外国の大使館員や領事館員の日本語の上手なのには舌を巻くことがある．その上館員のほとんどは公的に私的に日本語のレッスンをうけている．わが国の在外公館の人の中にはその国の言語を習得して何不自由なく使える人もあるが，中にはこれでも外交官かと思

われる人がいる．現地語ができるできないは別としても少なくとも現地語を学習しようという意欲がなくてはならぬ．任地におもむく前に言語の勉強をする人は多いが現地で現地語を学んでいる人のことは寡聞にして知らない．これは何も外交官に限ったことではない．現地に派遣される商社の代表や駐在員も大同小異であろう．もしそうだとすればそのような人々は現地の言語を軽侮しているのだと思われても仕方がない．このような人は自分の国の言葉なり，英仏独語などが優れた言語だという錯覚をもっている．世界のあらゆる言語に，上下の差はない．金持と貧乏の差はあっても人間として平等なのと同様である．文明国の言語も発展途上国の言語も言語としては等価値である．これは文化についても同様で，文化に上下があるわけではない．日本人は「違い」の前に「間」をつけて「違い」を「間違い」と見る習性がある．国際心の欠除を最もよく物語るものといえよう．

日本人に国際心がないとか欠けているのはこのような外国語に対する態度と，関係があるかも知れない．We think with words. We cannot think without them. で外国語を学ぶということは外国的な思考形成に接することである．Charles C. Fries は外国語の学習はその外国に対して sympathetic understanding を得ることだといっている．Sympathetic understanding というのは相手の立場に立って（相手の考え方を理解して）相手のことを考えることである．翻訳などによって得らるるものは単なる knowledge か information であって，正しい理解の素材にはなっても真の理解とは程遠い．このような意味で外国語を学習することと外国を理解することはほとんど同義語だといってよい．

それにもかかわらず日本人が外国語（ここでは特に英語）に弱いとか，外国語が下手だといわれるのは，日本人が communication の means がその主目的である英語を学問研究の態度と同じように考えているのが原因ではなかろうか．すなわち余りにも perfect なことを教えようとし perfect なことを期待するからこわくて英語が使えないのではないか．私は数年来 neutral English ということをとなえているが，それは communicable とか understandable，つまり英語学習の目的を intelligibility におくべきだという意味である．もちろん言語であるから intelligible でなければ問題にならないが intelligible であればおめずおくせず大胆に使うべきであろう．そして使っていれば trial and error で徐々に improve して行く．使わないで上手になろうなどということは水にはいらないで水泳の上達を願うようなものである．

最後に一言したいのはこのような英語教育で大切なことは学校では英語の基礎を教えるべきだということである．それはある意味において実業界などの一部の人々がいうように右から左へすぐに役に立つ英語ではない．千差万別の学生に対してすぐ役に立つ英語を教えることは不可能である．どのような立場においても短時間で役に立つようになる英語の基礎を教えるのが学校教育である．すぐ役に立つものは同時に役に立たないものでもある．その点いわゆる予備校とか英語塾などは最も役に立つ英語を教えるところであろう．予備校では直接入試の克服に役立つ英語力を身につけるし，多くの塾においては直接必要を感じている英会話の力を身につけてくれる．しかしこのように役立つ英語を身につけられるのはその基盤に英語の基礎があるからである．すなわち役に立たないと思われる英語の基礎があるから役に立つ英語が生まれてくるのである．

以上の意味において英語の教室では基礎的な知識と内容を盛った英語読本をできるだけ音読を中心として指導すべきであろう．知識とか内容は普遍的なものですべての学習者に理解が可能である．しかし英会話というような実際的な力は，英会話を習うにふさわしい context と situation がないと習得は困難である．要するに英語を母国語として日常話さない環境においては話す英語を習得することは労多くして得るところが少ない．しかし英語を話す環境においては話す英語の習得は最も容易である．それは容易というよりも知らず知らずのうちに身につくものである．読本が英語として比較的難かしくて英会話が比較的易しい単語を使用することは事実である．しかしだからといって英会話の習得が容易だとはいえない．要は learning situation の問題である．私はアメリカでサンドウィッチを注文して What kind of bread, sir？ といわれて面喰ったことがある．What kind of bread？ と聞く situation が分らなくてはこの英語は分らない．アイスクリームはアイスクリームだと簡単にきめてかかっている者にとっては What flavor？ と聞かれると慌てる．その意味で個々に役に立つ英語は motivation のはっきりした者に限るので学校教育はあくまで普遍的な基礎を教えるべきだと思うがどうであろう．

（東京外国語大学名誉教授）

☆　☆　☆　☆

理解すること・させること

TAZAKI KIYOTADA
田 崎 清 忠

1973年夏アメリカ取材．休暇をとって私に同行したのはSさんとNさんの両プログラムディレクター．日本のインテリのサンプルみたいなおふたりの「英語運用力」は平均的日本人の英語力を知る絶好の材料と思い，電話の会話を bug して資料にした．

〔例 1〕

ロサンゼルスのホテルでSさんがルーム・サービスに電話してウイスキー（「アメリカにきたんだから bourbon でも注文したら…. I. W. Harper はおいしいよ」と私が知恵をつけた）を持ってくるようにたのんだ．以下はその wiretapped telephone conversation の忠実な transcript.

Room Service: Good evening. Room Service.
Mr. S: My name's S.
Room Service: S?
Mr. S: Yes. Room Number is 414. Would you bring a bottle of I.W. Harper?
Room Service: I.W. Harper...
Mr. S: Yes.
Room Service: We don't have I.W. Harper.
Mr. S: (聞きとれなかったか) Yes.
Room Service: We don't have it.
Mr. S: You don't have it?
Room Service: No.
Mr. S: No? Er...
Room Service: Is it a scotch? (Room Service は I.W. Harper を知らないらしい)
Mr. S: Er ... what ... what do you have?
Room Service: You wanna scotch?
Mr. S: Scotch? Yes. (Bourbon はスコッチではないがS氏は妥協)
Room Service: We have Ballantine, Black and White, Chivas Regal, Cutty Sark, White Label, Johnny Walker Red anp Black Label and ... J & B.
Mr. S: I see ... (考える) Cutty ...
Room Service: Cutty Sark?
Mr. S: カイサイ? Cutty ...
Room Service: Cutty Sark.
Mr. S: カリサイ.
Room Service: Ah-hum.
Mr. S: Well, ... er ...we'd like カリサイ.
Room Service: Okay.
Mr. S: Please ... er ...
Room Service: Anything else?
Mr. S: No, nothing ... er ...
Room Service: Do you wanna fifth?
Mr. S: Pardon?
Room Service: A fifth?
Mr. S: ア，スィス?
Room Service: A fifth. You don't wanna a quart. You wanna fifth.
Mr. S: アイス?
Room Service: You ... no. The bottle ... what size bottle?
Mr. S: Ah... what size... er... smallest one, please.
Room Service: That's the fifth. The smallest we have is a fifth.
Mr. S: スィ...
Room Service: Fifth!
Mr. S: ティッ?
Room Service: A fifth!（ついに笑い出す．S氏も笑う.）
Mr. S: I'm sorry.
Room Service: You wanna ... okay. There's a quart and there's a fifth. The smallest one we have is a fifth.
Mr. S: Er ... Just a moment, please.
Room Service: Okay.

Cutty Sark が「カリサイ」に聞えるのはやむを得な

い．これがウイスキーの銘柄であることは前後関係から明らかなので，相手の英語が「カリサイ」にしか聞こえなくても，またこちらが聞こえたままのおうむがえしで「カリサイ」と発音しても，両者の意志が疎通すれば一向に問題にならない．むしろ後半の混乱の最大の要因はS氏の語彙に“fifth”が存在しなかったことにある．ウイスキーのボトルの大きさと「5分の1」(a fifth) とが結びつかなかったのである．ウイスキー・ボトルには，fifth, quart, pint などがあるが，fifth=「5番目の」という公式の範囲で理解しようとするとムリがおきる．S氏はきちょうめんな性格の人なので，「カリサイ」では妥協したが fifth では妥協しなかった．理解できないのに理解できたフリをしてごまかさなかったのである．

〔例 2〕

翌朝ホテルのレストランで朝食をとるとき，こんどはNさんがひっかかった．

Mr. N: I'd like ice cream, please.
Waitress: What kinda ice cream, sir?
Mr. N: What kind do you have?
Waitress: Vanilla and chocolate.
Mr. N: バニラ，please.
Waitress: I beg your pardon?
Mr. N: バニラ，please.
Waitress: Pardon me?
Mr. N: バニラ，…バニラ．
Waitress: What … what ice cream, sir?
Mr. N: バニラ！
Waitress: (気の毒そうな声で) I'm sorry, sir. We don't have banana ice cream.

これには一同大笑いしたが，N氏は不気嫌だった．そしてそれはもっともなことであった．

「バニラとチョコレートしかない，って自分で云っておきながら，ぼくが『バナナ』を注文するはずがないじゃありませんか．ね，センセイ！」

「聞きとり」の幅はその個人の教育の度合いや，言語生活の豊かさに関係する．教育程度が高く，ことばに対して鋭敏な人は，いろいろな表層表現に対する理解度が高い．よしんばウエイトレスの耳には「バナナ」としか聞こえなくても，もし彼女の言語理解度に幅があれば，相手が外国人であることをマイナスすれば，そしてN氏の言うとおりこの会話がおこなわれている状況を計算に入れれば，「バナナ・アイス・クリーム」という直線的理解にはならなかったはずである．

つい先日も，ワイオミング大学の先生がNHKに私を訪ねてきた．すぐ近くの駒場に住んでいるというので，話しが終わってから私が送ろうと申し出た．

「道はわかりますか」

と聞いたら，

「トーキョー・デパートのところまで行けばわかります」

と言う．渋谷に「東京デパート」などというデパートはないはず．私が思わず，

「トーキョー・デパート？」

と聞きかえしたら，さきほどのNさんがそばから，

「トーキューのことですよ，きっと」

と口添えした．Nさんは私よりも「許容量」が大きかったのであった．

〔例 3〕

もうひとつ．これはデンバー市で，ホテルの交換手とN氏とのやりとり．

Operator: Operator. May I help you?
Mr. N: I'd like to call Hilton Hotel in Denver.
Operator: What hotel?
Mr. N: Hilton Hotel … Hilton Hotel.
Operator: The what?
Mr. N: Hilton Hotel in Denver.
Operator: What hotel?
Mr. N: Hilton … HilTON … HILton …
Operator: (しばらく考えてから) I don't understand it, sir.
Mr. N: Hilton Hotel … HILton Hotel … Hi … H-I-L-T-O-N …
Operator: Oh! The ヒルン?
Mr. N: Yeah, Hilton … The Hilton …
Operator: All right. Thank You.

これはひどい．N氏は「ヒルトン」を12回絶叫している！この交換手にとって Hilton の発音は [híltn] しかなく，それ以外の発音（たとえばNさんの [hítɔn] [híltən] などいっさい）は受けつけない．彼女の聞きとり許容量は極端にせまく，とてもことばを扱う仕事に従事している専門職とは信じがたい．

日本にきている外国人は多かれ少なかれ日本人を意識している．とくに日本人との接触が多い外国人は余計そうである．1年も2年も日本に住んで，日本人に英語を教えている，とか日本語をべんきょうしている，などと

(p. 7へつづく)

国際化時代と英語

HIROTA KOTARO
広田孝太郎

ノールウェイのボレガード駅のプラットフォームで南下してスエーデンへ行く汽車を待っていましたのは，一面白皚々の1951年2月半ばの昼過ぎでした．到着まで未だ数分あったので傍の売店で土産物の木彫製品をあれこれと選んでいましたところ，ふと気がつくと後ろで音がします．振り返ると汽車が既に出て行くではありませんか．国際線のこと5分位は停車するものと油断していたのが間違いで，全く軽便鉄道の身軽さ，2時間程かかるハルデンの駅では出迎えてくれる手筈になっていて，然もこの汽車を逃すと次は午後遅くまで無いこと等が瞬時脳裡に去来しました．

後尾の車輛がもう短いフォームのはずれ近くまで行ってしまっています．走っても駄目なのは明らかです．携げていた鞄をほうり出し両手を高く挙げて，待ってくれえーと大声で叫んだのは次の瞬間でした．日本語でです．ノールウェイでは英語ででも同じ事だったでしょうがとにかく咄嗟のことです．車掌が私を認め右手を伸ばして太いひもを，ぐいーと引張ったのが今も眼に残っています．汽車はブレーキの音も激しく急停車しました．さっと何事かと電線上の雀の列のように乗客の顔が出たのに向って鞄を拾い買物を受取って一目散に駈けつけ，もうフォームを遠くはずれた車のデッキに車掌の差し出してくれた大きな手で引き上げられました．

次はデンマークのコペンハーゲンからスエーデンのマルモに行く2時間足らずの渡し船での失敗です．40才がらみのデンマーク人と無聊のまま雑談をしていましたところ，彼が着いてからの手数を省くため若し私が使い残りのデンマーク貨幣を持っていたら交換してあげようと言うので，それはありがたいと彼から幾らかを受け取り又話しを続けていました．港も近づく頃，彼は静かに私からデンマークのお金をと催促するので，先刻渡したがと答え念のためオーバーのポケットを捜しても見ました．彼はその時一寸ためらった様子をしましたが，直ぐまあいいやと言い，変わりなく愉快で暫くして別れました．ところがホテルに着いて着替えをしたところ思わぬポケットからそっくり出て来ました．私は所謂やらずぶったくりをしてしまったわけです．名前も住所も知らぬ人です．どうしようもありません．それからは自分の不覚を恥じながらもよく思い出すのはその時の彼の坦々としたふるまいです．金額はたかだか2,000円位でした．然し私が彼の立場だったらどうしていただろうかと考えるのです．

フィンランドの青年に案内されて首都ヘルシンキから東へロシア国境に近いカウカスのパルプ工場を訪れた旅の終わり頃，彼が感慨深そうに，あなたとこの2日間行を共にして随分話し合ったが，あなたがこうだと言うことは自分もそうだと思い，自分が斯々と考えればあなたの意見も同じであった．日本という国は地球の反対側遙か彼方と思っていたのに，初めて会うあなたと斯くも考え方が一致するとは全く驚く外はないと眼を輝して言ったのが忘れられません．当時彼は25才私は37才爾来クリスマスカードの交換だけで再会の機会はありません．

多くの未知の人に出会い，種々の異なる風習に接することが出来るのは旅の大きな楽しみのひとつです．そしてそこでは心と心の触れ合いに人種も国境も障害でないことを確めることが出来ました．私は北欧の人達が相手の身になって考える心のゆとりがあり，全てに鷹揚さと最近唱えられているユックリズムが伝統的に培かわれているのを自分の失敗を通じても知り得ました．我々が海外へ出て行ってその土地の人達と一緒に仕事をする場合人種習慣の違いに気を配ばることは勿論大切なことですが，常に双方の利害が一致するばかりでなく，又相手が弱く苦しい立場に立つこともありましょう．その時こそ相手の気持ちになって事を処するよう努力するかどうかが長い目で見て成否を決めるのではないかと思います．

日本人が語学に不得手なことは内外共認めるところのようです．然し私は海外に出てあるいは来日の各国の人人と商売上で交わって参りましたが，その間学校で受けた英語教育が全ての土台となって大体支障なく仕事をすることが出来ました．然し同時に感じますのは所謂国際人となるためには会話の能力もさることながら，先づ日本人としての礼儀作法，日本の歴史文化についての素養

を身に付けることが肝要であるということです．そして自己の専門とする分野の深い知識を持つことです．外国人が会話において望みあるいは興味を持つのは結局は話の内容であり話手の人間性だからです．

次に必要なのは勿論語学力ですが，これに付いても私は先ずは読む力が大事と思います．特に大学入試の関係から文法的にも内容的にも私等が日常必要とする限度を越えた複雑かつ高度な文章の解釈のために多くの時間と労力を費やし，ために英語は難しいもの，簡単には物にならぬと，多くの学生が英語で書かれたものを読む楽しみを感得する以前に，諦めてしまうのではないでしょうか．基礎さえ出来れば面白さにつられて次第に読書の習慣あるいは馴れが出来て参ります．世界の出版物で英語と日本語の数量は比較になりません．あらゆる国のホテルに Time や News week が売られています．そして原文の味は訳文ではなかなか得難いものです．'Today is tomorrow you worried about yesterday' という句を私は何かと仕事で苦しい折に思い浮べるのですが，これを日本語に直すと意味はとに角，原文の綾はなくなります．出来るだけ多くの人が社会に出てからも英語を通じ世界の新しい知識情報を得又教養や楽しみを増すことが望まれます．古人が返り点を考え出して漢文を読んだことは素晴しい知恵ですが私は若し当時の遣唐僧が帰国後漢文の本国同様の棒読みを伝えていたらその後の日本人の外国語習得に相当な好ましい影響を与えていただろうと素人の一人考えをしています．とに角面と向い合って受け答えをする会話は，機会，必要，の少なかったそして今なお地理的に離れた我国では他の国の人達と比較するのがそもそも無理であり，必要に応じ，機会さえ与えられれば我々も充分やって行く能力があることは海外へ派遣された若い社員の成長ぶりを見ても判ります．従って私は単に日本人が殊に会話において他国人に劣るといって卑下する要はないと思います．オランダのロッテルダム駅の売店の16才の娘さんが6か国語を話すと言っていました．その時は感心しましたが，左程でもとも思えます．寧ろ我々も，ちょうど，ロンドンへ来たのなら一寸パリー，ローマへという具合に気楽にフランス語なりドイツ語等を習得すれば面白いことで，英語に最初はいる時の何分の一かの努力で済みます．

本稿を書いております時新聞が詩人ブランデンさんが亡くなられたことを伝えました．上に述べました旅行中当時顧問をされていたロンドンタイムス社の先生の部屋で1時間余りお目にかかることが出来たことを哀悼の気持ちと共に思い出しています．ちょうど労働党が政権を握った時でしたが，この頃英国人も働かなくなったと淡淡と申されたのが印象的でした．お話しの途中でふと君の出身校はと尋ねられ彦根高商ですと答えますと，Good job と申されました．R の発音はし難く，日常の会話にも自分の能力の限界を知っていました私には先生の一言は非常な激励となりました．又同時に学生時代の恩師に対する感謝の気持ちがひとしおだったことを憶えています．

なお海外との接触という点から通訳に付いて最近仕事を通じて感じていることを申し添えたいと思います．それは同時通訳に関してです．

国際会議が我国でも愈々多く開催されその設備も整備されて来ておりますが，同時通訳の専門分野における要求が益々増えて参ります．例えば工作機械業会の会議には機械に付いての専門知識を持った人でなければ実際上通訳は出来ません．会議の内容が高い程度であればある程適当な人材を常備することに，今後の問題点があります．一般社交的な国際会議なら比較的容易でしょうが，技術関係において語学も出来専門分野に精通している人も，各々の企業には重要な地位を占めて活躍しているでしょうが，同時通訳の職業的専任者としての人材はなかなか得難いことです．国際会議は知識・情報交流の大きな窓口です．欧米諸国でも同じ必要はありましょうが，通訳の難易さは我国とは比較にならないでしょう．ここにも日本語の特異性から来る問題点があるわけです．英語学習と，一つの新しいかつ重要な知的職業としての技術関係の同時通訳進展の方向を，見守って行きたいと思います．

(HKS Japan 代表取締役)

(p. 5よりつづき)

いう人はもっともよくない．彼らの英語は，本人が意識せぬうちにいつの間にか「変質」し，日本人にとってわかり易い英語になり，おまけに日本人が話すあやしげな英語もすぐのみこんでくれるようになってしまっている．だから，こういう人達とだけ話し，お互いに理解した…と思い込んでいるのはとんでもない誤解．英語を通じて理解し，理解させねばならぬ大衆は実は海の向う側にあり，しかもこれらの例が示すように，日本や日本人に関心もなく，理解しようとする努力もせず，ことばも自己流からとび出さない…という人たちなのである．「理解」とはまことにやっかいな代物(しろもの)である．

(横浜国立大学助教授)

ON LEAVING JAPAN

Robert S. Ingersoll

以下に掲げる講演「日本を去るにのぞんで」は，駐日米国大使ロバート S. インガソル氏が，昨年11月2日東京の日米協会と在日アメリカ商工会議所の合同会で行なったものである．現在インガソル氏は米国国務省にあって，アジア・太平洋地域担当国務次官補の要職にあるが，この講演は一国の外交官が任国を去るに当って行なったものとして，きわめてすぐれたものと考えられる．同氏の日本に関する観察と日米関係についての所見には興味深いものがある．

Eighteen months ago, in one of my first public appearances as U.S. Ambassador to Japan I spoke before a joint meeting of the America-Japan Society and the American Chamber of Commerce in Japan. Today Mrs. Ingersoll and I feel deeply honored to be invited to meet with you again.

We had not expected that our stay in Japan would be so brief, nor that a valedictory, of sorts, would be required of me so soon. But I have found throughout my career that moves come at unanticipated moments. I do believe, however, that the time I have spent in Tokyo has given me an excellent background for my new responsibilities.

I heard the other day about a man whose father was hanged in the town square for stealing horses. Later he joined the State Department, and, according to the story, learned in time to explain his father's demise in the following manner: "The old man," he would say, "suffered a lamentable death as a consequence of injuries sustained in a fall from a public platform during a ceremony in which he played a central role."

The story is no doubt apocryphal. Certainly my associates in the U.S. Embassy rarely spare me blunt answers, even on these occasions when I would welcome a tactful circumlocution. But as I prepare to join the Washington bureaucracy, just in case there may be a grain of truth in the tale, let me on this occasion offer some observations on the state of communications between the U.S. and Japan.

Over the past several years we have heard a great deal about a "communications gap" between our two countries. The discussion was provoked by the unhappy textile episode, the so-called "Nixon Shocks" of 1971, and a growing awareness that the Japanese and American media and education systems both could do a better job of interpreting developments in the other society with accuracy and perspective.

Certainly one of our highest priority tasks has been to broaden and deepen the communications between our two governments. I feel that we have made important progress. Indeed I doubt that any two governments in the world have created any more elaborate arrangements for consulting on every conceivable subject. Through these consultative arrangements we have been working hard to reach a common appreciation of the problems we face. As a result we are also gradually reducing the "comprehension gap" which occurs when one catches the word yet misses the signal.

It takes constant effort to reduce the "comprehension gap." That should not surprise anyone. We Americans are a disparate people, forged from immigrant stock of many nationalities. We are forever seeking to redefine what we Americans have in common. We rely principally on the law as a means of preserving social peace. In our legal based society both private contracts and public charters inevitably become the objects of controversy and litigation. Endowed with ample resources, abundant land, and a hard-working and

ingenious people, we have developed a prosperous society in which many take affluence for granted. We have accumulated global responsibilities, but are in the process of redefining them in a more selective and discriminating fashion.

By comparison, Japan is an insular nation, inhabited by an exceptionally homogeneous people. Your language—and here I am addressing my Japanese friends—is rich in subtlety, but it defies ready mastery, not least by Americans. You have lived so long on these isles and experienced so much in common that you communicate among yourselves intuitively, frequently without the aid of words. Your unity is natural; ours is a product of conscious effort. You depend less on legal rules than on the warmth of human relationships and unstated patterns of obligation to maintain social harmony. Your prosperity is more recently acquired, and perhaps seems less secure in view of your dependence on overseas sources of energy and raw materials. You have long assumed a "low profile" in your foreign policy, but as your wealth and power increase, you face more insistent pressures to accept wider international responsibilities. Your diplomacy is acquiring new multilateral dimensions.

Obviously these differences in culture, language, experience, and national circumstances complicate communications between us. But they are not insurmountable obstacles to mutual understanding. On the contrary, these elements of diversity can make our association all the richer, providing, of course, that each of us makes a continuing effort to convey intentions with precision, to listen with an attentive ear, and to bear in mind the differences in cultural values and economic and political interests that explain what we have to say to each other.

Those who know me, know that I tend to be an optimist. A hard-headed optimist, but an optimist nonetheless. And I am sanguine about the future of mutual understanding between Americans and Japanese for the following reasons:

—Despite all our differences, we increasingly share the problems and opportunities of "post-industrial" societies, and this is providing us with a common vocabulary of experience.

—The problems we face at home are creating new possibilities and requirements for joint endeavors, and it is in working intimately together that we come to know one another best.

—We are beginning to create a wider and more inclusive international framework for harmonizing our national policies, and this offers an occasion to see more clearly where our national interests intersect.

I would like to take a minute to elaborate briefly on each of these themes.

Clearly we face a host of common problems. We are both groping for new ways to educate ourselves and our children for a world in which change is a constant. Each of us is seeking to balance the requirements of economic growth with the need to curb inflation and preserve the environment. We are each seeking to modify the relations between management, and labor and government in the light of the growing internationalization of our respective economies. Both our peoples face the new dilemmas as well as the opportunities presented by expanded leisure time. Japanese and American women are insisting on being taken seriously as leaders in all segments of our society as well as in the home. Young people on both sides of the Pacific are searching for values that will stand the test of time.

No country has a monopoly of wisdom on these questions. Neither of us can afford to neglect the experience of the other in grappling with them. Foreign scholars have often written of Japan's skill in assimilating foreign technology and institutions. What we are now discovering is that Japan has developed novel approaches to many of these problems from which all industrial nations can learn. Certainly I return to America convinced that few countries in history have ever managed over so prolonged a period of time to combine rapid economic growth, the maintenance of social stability, and the preservation of a dis-

tinctive cultural heritage more successfully than Japan.

There is a current tendency to dwell on the imperfections of American society. We are a self-critical people, and the world echoes our complaints. No one denies the imperfections in America. But I am bound to add that I know of no more resilient society and none with a greater capacity for reform. I suspect this is why there are few countries whose technical, social, economic, and educational innovations are so widely emulated.

What works in one country will not necessarily work in another. Institutions are not as readily exported as goods. But we obviously have much to learn from each other.

I have been impressed over this past eighteen months by the growing numbers of businessmen, labor leaders, educators, artists, and professional people of all kinds who are virtually commuting back and forth across the Pacific to see first hand how their counterparts are attempting to cope with problems that are familiar to all of us.

As we pay more heed to one another, we are also discovering new opportunities for cooperation throughout the world. Reshaping Japanese-American relations within a global context is not at all a task exclusively for governments. There is a very wide scope for private initiative—though many of the most ambitious projects will probably require an assist from governments. Let me illustrate with just one example from the field of our economic relations.

As the world's largest consumers of energy we share the greatest stake in promoting a diversification of oil and natural gas supplies and in developing new types of energy. Readily accessible sources of oil and other key industrial raw materials have been already claimed. Remaining reserves are technically difficult, extremely costly, and often politically risky to discover and extract. Major projects may be beyond the capabilities of individual companies. Through multinational joint ventures, encouraged by our governments, we can share the capital and technology required for such projects along with the political and commercial risks they inevitably entail.

Joint ventures of this kind represent an efficient means of meeting our economic needs. By promoting more intensive economic interdependence, they take on political significance as well. Remaining sensitive to each other's economic and commercial interests will become a natural instinct as those interests become more and more inextricably linked. Such joint ventures will also expand the opportunities for mutually beneficial human associations between our peoples.

At the governmental level President Nixon and Prime Minister Tanaka affirmed last August their intent to strengthen the multilateral dimension of U.S.-Japan relations. This is a healthy development. As long as the U.S.-Japanese relationship was defined principally against the backdrop of a bilateral security relationship and a bilateral trade deficit, strong emotional undercurrents tended to clog the channels of communication. As each of us diversifies our political and economic relationships, I believe that we are beginning to develop a fuller and more detached appreciation of the extraordinary range of mutual interests we share. This is reflected in the changing character of the dialogue between our two governments. Again let me cite but one example; Secretary Kissinger's proposal for a "Declaration of Principles" among the industrially advanced democracies.

This initiative was inspired by a proposition that is as simple as it is profound. The dividing line between domestic and foreign policy issues has become ever more elusive. And the issues that are most central to the livelihood and well-being of our families and our communities—the value of our currencies, the trading rules that determine the good available in the local supermarket and department store, the availability of fuel to drive our cars and heat our homes—can no longer be managed within a strictly domestic context. Nor can these problems of money, trade, energy, and the environment be treated within an essentially Atlantic framework. They are global problems.

But they engage the interests of the industrial democracies of Europe, North America, and Japan most immediately and most extensively. What we have sought to initiate, therefore, is not the creation of a rich man's club to confront the Third World or the Communist countries or the oil producing states, but a trans-Atlantic and trans-Pacific discussion of the concepts and procedures appropriate for dealing with these pressing problems. We are convinced that negotiations on monetary reform and trade liberalization and energy will proceed more smoothly if we begin by affirming those principles that unite us. But we are seeking the ideas of others, for we are as interested in the process as in the outcome of these deliberations. We are as anxious to stimulate the dialogue as to shape its conclusions. It is in this spirit as well that the Japanese Government is discussing such principles with us.

What I have been trying to suggest to you is that I think that we have learned something from our experiences in recent years. As we consult with our Japanese associates, I believe that we Americans are now more inclined to listen more carefully and to speak more modestly. The Japanese Government, for its part, speaks with a newly discovered and well justified self-confidence on a wide range of subjects of mutual interest. In this atmosphere our discussions promise to be both more balanced and more interesting. We will not always necessarily agree. But I expect that we will discern the basis for agreement or disagreement more clearly, and that, of course, is the essential task of diplomacy.

I need not tell you with what regret Mrs. Ingersoll and I leave Japan. My service as American Ambassador to Japan has been an immensely rewarding experience for me. I have had an opportunity to make many new friends and to learn much about a country I have always held in very high regard.

Looking back over what may have been accomplished since I came, I recognize that these were not *my* achievements. Whatever success we have had in improving the relationship between Japan and the United States has been the result of hard work and devoted efforts on the part of many experienced and intelligent men and women on both sides of the Pacific who have been perceptive in identifying the problems and untiring in chipping away at the solutions.

I am speaking of my own staff at the Embassy, of the Governments of Japan, and the United States, of Japanese and American businessmen, labor leaders, and scholars, and of people like yourselves who make it your personal responsibility to promote wider understanding and cooperation between us.

I wish to take special note of the contribution made by ACCJ. If the atmosphere of U.S.-Japan relations have been improved in the past year, this is due much to the progress we have made in developing a more balanced bilateral trade. As individuals and as an organization, you have worked with us, with the Government of Japan, and with Japanese businessmen to achieve on a practical level the goals we sought through official channels.

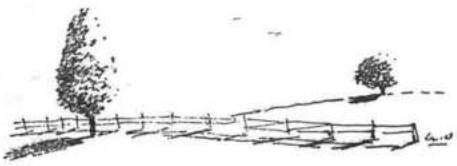
The America-Japan Society has played an equally significant role in according a forum for cultural and intellectual exchange.

When I first spoke with you a year and a half ago I solicited your support and your wise counsel. You offered me both and I shall never forget.

I have been nominated by my President to serve as Assistant Secretary of State for East Asia and Pacific Affairs. Should I be confirmed for that job, I will take your wise counsel with me. And I will most surely have need for it. My relationship with Japan is not coming to an end; it is merely finding a new expression.

As Mrs. Ingersoll and I depart we do so with the consolation that our new duties will bring us back to Tokyo from time to time. For now, to you and all who have offered us their wisdom and friendship and hospitality during our stay here, we extend our warmest appreciation and a fond farewell.

座談会 オーラル・アプローチ再評価



隅部直光 大妻女子大学教授
下村勇三郎 東京学芸大学付属竹早中学校教諭
井田米造 都立鷺宮高等学校教諭
石川喜教 横浜市浅野中・高等学校教諭
(司会) 松下幸夫 ELEC企画部長

オーラル・アプローチとの出合い

松下 本日は「オーラル・アプローチ再評価」というテーマでお話し合いをいただくわけですが，いきなり「再評価」といっても話しがしにくいと思いますので，まず最初に過去を振り返ってみることから始めたらどうでしょうか.

これ迄皆さんがそれぞれの立場で実践してこられておると思いますし，またいろいろな研究会なんかに参加されてほかの方々の意見を聞いたり，あるいは実践を見て批判されてきたと思うので，そういう意味で皆さんからお話しをいただいて進めていきたいと思うのです．下村先生は ELEC の第1回の講習会を受けられて，いままでずっと何らかの意味で実践してきておられる，そういうご感想をひとついかがですか.

下村 私は受講生として3年位，そのあとも technical advisor というような形で講習会に参加させていただいたのですが，最初一番強く感じたのは，英語を教えるということは，ただ英語そのものを日本語でわからせるだけでなくて，音声というものをもっと重視しなければならないということでした.

そのためには，もちろん，教師自身が音声の面での再訓練をする必要があることを身をもって体験したわけですが，生徒にもそのような作業，つまり音声を重視した指導が大切であるということに目を向けさせられた，これが一番大きな収穫だったと思いました.

松下 石川先生は研究協力校を引き受けられて，中学・高校と6年間実践されたわけですが，先生の場合はいかがでしたか.

石川 私が講習会に参加したそもそもの目的は，私共の学校が私立ということもありましてクラスの定員がたいへん多いので，これをどう教えたらいいかということがひとつ，もちろん，自分自身の英語の力を brush up しなければならないということもありました.

特に授業の進め方について言えば，ELEC の研修会で習得した技術をいきなり現場に持ちこむことは，ちょっと自分自身としても自信がないし，前後数回 ELEC に通いまして，校長とも相談の上 Oral Approach による指導を始めたわけです.

やり出してみると，どうも自分の不勉強ということもあって，なかなか思うようにはいきませんで，ちょうど1年生を受け持った10月でしたが，ELEC の研究協力校を引き受けまして，その後は山家先生にご指導をいただきまして，実践してきたというわけです.

下村 石川先生の学校で始められたのは，かなり経ってからではないかという感じがしますね．最初の頃は参加した大部分の先生方が自分自身の英語を brush up しようというのが大きな目的だったように思います.

隅部 私自身は戦時中に旧制中学で英語を習い始めたのですが，その時は典型的な Oral Method で教育されました.

その後私が大学院におりましたころは，丁度 Oral Approach と Oral Method というように，先生方の意見がまっ二つに割れて，ちょうちょうはっしと論戦をやっておりまして，私は非常におもしろい学生時代を過ごしたわけです．もちろん英語教育雑誌は大もめにもめていましたしね.

のちに私が一本立ちの教師になってから，たとえば現教育大学教授の池永勝雅氏の Oral Approach を取り入れた授業などを拝見いたしまして，私の教わった中学時代の授業とあまりにも違うのを見て驚き，それで大いに考えるところがありました．日本語もずい分お使いになるにもかかわらず，一方通行じゃない授業をなさるという点において私は非常に感心しました.

井田 私は実は旧制中学でしたが会話の時間があったので，そのこ

ろから音声と言語はくっつけて考えなければいけないと思っていたわけですが，中学校に勤めた時にELECのことを聞いて，やはり教師自身がうまく話せる，聞けるということが出来なければだめだろうと思って研修会に参加したわけです．

誤解と批判

松下　いまそれぞれの方々の回顧を通じていよいよ内容に入ってきたと思います．先ほど隅部先生がOral Approach と Oral Method のことに一寸触れておられましたが，先生そのへんのところをもう少しくわしくお願いします．

隅部　日本では特に Oral Method というものが，Palmer が一生懸命にやった関係で，この伝統は非常に長い力のあるものでしたから，Oral Approach を理解する場合，非常に理解しやすい反面，あまり似ているので混同して実際ほんとうの理解がしにくかったという点もあったと思います．

つまり片方は，何をいまさらOral Approach といったって，事新しくないじゃないか，もう何十年も前に私が教科教育法を受けたときにもいわれていたことである．新しい構造言語学に結びついているという点はあるにしても，それを実際に現場で教えていく方法に適用した場合にはそんなに違わないのではないかというわけなんです．つまり Oral Approach といっても，それが単なる新しい method としてしかとらえられなかったところに悲劇があるんじゃないでしょうか．

下村　今，隅部先生がおっしゃったように確かに method という考え方で Oral Approach に対する誤解があると思いますね．Oral Approach は method ではなくてそれこそよくいわれているようにかなり基礎的な事項——言語いわゆる音声を口頭で習熟する，どちらかというとそのゴールみたいなものであるというようなことがいわれているけれども，とにかくそういうことを抜きにして方法だけを先に考えてしまう．

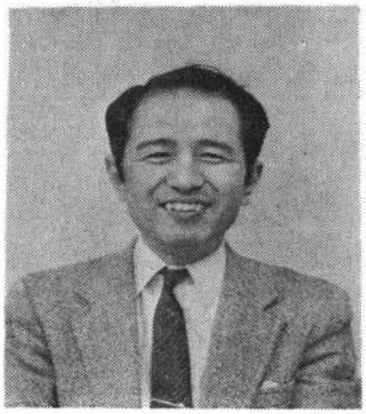
そして，ELECの講習会でやっているその教え方こそが Oral Approach なんだというふうにだんだんと固まってきて，それが誤解に誤解を呼んで，しかもその中核をなしているものが pattern practice であるものだから，それだけやっていれば Oral Approach の指導をやっているんだというようないき方をずっととってきたということも一応いえるのではないかと思います．

隅部　それは確かにいえますね．

松下　いまのお話しをまとめる意味で歴史的な展開を考えてみると，まず Grammar Translation Method というのがあって，それを革命的にひっくり返そうという Oral Method が出てきた．その Oral Method の音声を重視するという点では一致しているけれども，もっと教育的に，いわばその上に止揚された形として Oral Approach が出て来た．そこまでが1950年以後の日本における Oral Approach の広まった段階ではなかったかと思います．

最近では，ご承知のように言語観というものが非常に変わってきて，たとえば文法でも変形文法というようなことが，盛んにいわれているわけで，いまちょっとそういうことで反省というか，ことに Oral Approach の形式面に対する攻撃が相当出て来ている段階じゃないかと思います．

井田　私達が advisor で ELEC の講習会に参加したときでも，method と approach の考え方にどういう違いがあるのかということで理解するのにしばらく時間がかかったんです．Oral Approach の場合，pattern practice というのがどうしても一番前面に出されるものだから，一般には Oral Approach イコール pattern practice と考えて，非常に mechanical なやり方ではないかと批判するわけです．機械的であって，自分の体験，自分の考え方というものがその中に入ってこないならば，生徒はどうしても興味を示さないのです．



隅部直光

松下　いまのお話しは Oral Approach の demerit ですね．欠点として非難されているところは，単に機械的な反復だけではだめだということ，そのためには実際的な言語活動をもっと重視しなければいけないということですね．

オーラル・アプローチを実践して

松下　井田先生のお話しは非常に clear な問題を含んでいると思うのです．考え方の点でも，また方法の点でも，ここのところがこれからの一番考えなきゃならないポイントになるんじゃないかと思うのです．一つは言語観といいますか，考え方の問題ですね．考え方の問題で，一方では反復練習をすれば力がついていくのだという習慣形成の考え方．いやそうじゃない，反復練習というのはいわゆるあとの問題であって，そ

下 村 勇三郎

の前にほんとうの理解というものがないといけないのだ．ほんとうの理解ができていれば，それは必要に応じてだんだん熟達して，練習をすれば上手になってくる．どちらが大事かという考え方，行き方の態度，順序が全く逆になっているわけです．

下村 実践的な立場で申しますと，結局いままでOral Approachによる学習形態をとって授業をやってきている，その中核をなしているものは音声と文型ということで，それさえやればOral Approachによる英語の授業は終わりというような，Oral Approachに対する正しい理解からきたものではなく，どうも誤解から生まれた方法であり，中途はんぱなやり方であるという感じを持つのです．

これは去年から改定されて実際行なわれている「指導要領」なんかでいっているように，英語の技能を総合的に扱って運用にまでもっていく，そういうようなcommunicationということを考えた場合に果たしてそこまで，実際Oral Approachを取り入れた授業といいながらどれだけやってきたのかということは，充分反省されなければならないと思うのです．

松下 石川先生，先生は6年間にわたってOral Approachの実践研究をなさったわけですが，特に苦労されたところとか，あるいは予想以上の効果が上がってよかったこととか，努力が報いられたとかいうような点，生徒の反応なども踏まえてお聞かせいただきたいと思いますが．

石川 私がはじめてOral Approachを始めた頃のやり方と，現在私がやっているものとはだいぶ違って来ているといえると思います．

とにかく最初は音声中心，pattern practice中心で授業を進めたのですが，どうも工合いが悪いのです．そこでGrammar Translation Methodといった昔あったようなものの中からでも良いものはとり入れようという立場に立って，現在のOral Approachは行なわれるようになって来ています．

また，pattern practiceは非人間的で，非常にmechanicalにすぎるなどと，誤解しているむきもありますが，私はそういう機械的にものを言わせるということもやはり勉強のひとつだと思うのです．いま「指導要領」が改定され言語活動ということがいわれておりますが，その言語活動へいくためにもpattern practiceを十分にやっておく必要があるのではないか，というようなことを自分の実践の中で体験として感じています．

下村 これはまた実践的な立場で申し上げますと，私が最近教えた教材の中で，イギリスにおける一つの笑い話をテーマにしたものがありました．ここでねらっているstructureの面でのkey sentenceは受動態なんです．そこでもちろんpattern practiceをうんとやって，受動態についてあらゆる角度から練習をする．しかしそれが大部分を占めてしまったら，肝心な英語を読んで楽しむこと，ここにおもしろさがあるということをどの段階で教えたら良いだろうか．

もし私個人だったら，もちろん受動態は大切ですが，せっかく本文がそういう内容であるならば，その内容の面白さにうんと取り組んで，生徒に興味を持たせたい．で，その理解するための一つの手段として受動態なるものを彼らに習熟させたい．実際，実践の立場からみた場合はそういう考え方が出来るわけです．

石川 私は中学の方は根本的にはそれでいいと思うのです．けれども高等学校の場合，Oral Approachの精神をとり入れてどのように指導したら良いのか，多くの実践する方々が出て来てほしいと思います．

私は英語Bでリーダーをやったのですが，高校ではやはり応用練習が欠かせないと思うのです．生徒に英語を聞かせ，英語をしゃべらせること，今後はこれをやらなければいけないと私は思います．

井 田 米 造

松下 井田先生，いまのお話しに関連して先生のおやりになっている立場からお話しいただけたらありがたいと思いますが．

井田 Oral Approachのもっているprinciple，これは石川先生もおっしゃったように今後ももちろん続けていいのではないかと思います．それと，先ほど石川先生のおっしゃった実際の面でcommunicationの場

までもって行くにはどうするかということですが，私は授業の前に生徒を2人あてて，日曜日に何をしたか英語で speech をさせるのです．そのあとで生徒と私とで英語で問答をしたりするのですが非常に皆興味を持ちまして，授業に活気が出て来る．私は英語の授業といっても，日本の小学校あるいは中学校でやっている国語の授業にある面では近づける必要があるのではないかということを最近特に感じているのです．

今後の課題

隈部　今まで先生方のお話しをうかがってその通りだと思いますが，それに関連するものとして，教科書のことも考えたいと思うのです．いま日本では検定制度でもって「指導要領」に基づく教科書が出来て，それを使用しているわけですが，これがまた世界でもたぐいまれな，非常に condense した本文だけがぽんとあって，それをどう取り扱うかは各自でお考え下さいという形です．

しかも中核になるのは，ずっと以前からあった教科書の形態を足して割ったような文法・文型ががんじがらめにあって，実際の授業をうんと拘束するような，骸骨のような教科書が与えられている．

だから ELEC の講習会に参加して，こういうふうに教えていけばいいんじゃないかと思うのを，1時間ごとに自分で翻訳をしなければならない．このような状態にあるために非常に阻害されている向きがあるんじゃないかと思いますが，実際の検定が許される教科書との関連からみてその点どうですか．

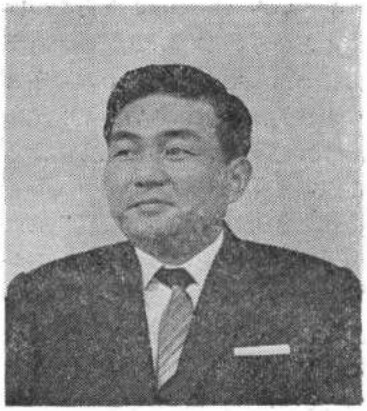
石川　現場では検定教科書を使うというようにきめられていますから，それ以外のものを使うということはあまり考えません．現実に，しかし，実際に授業をしていると，この程度のことなら当然生徒達はわかるはずだと思っても，何か教科書にしばられて出来ない感じがします．

松下　いま教科書問題でskelton—骸骨ということばが出ましたが，これを使用するときはどのようにして使っても良い，反面，どうしたら良いかわからないということもあるわけですね．そういうところに欠点があるので，本当からいえば，教科書はもうちょっと高くてもいいから立派なものが欲しいと思いますね．

隈部　教科書の問題を私が持ち出したのは，高校の文法の教科書には成生文法の方が曲がりなりにもはっきりそれを前面に押し出しているものが出て来ているわけですね．けれども，これが Oral Approach に基づいた教科書であるというのはないということを考えたのです．指導理論なり技術をせっかく身につけても一時間ごとに工夫して骸骨に肉づけをするのではたまらないから，そこでつぶれてしまう．やはり易きにつこうとするのは人間の常ですから，ついそっちについてしまうという欠点が非常にあると思います．

松下　Oral Approach で教材論というのは非常に大切なことなんですけれど実際には実現されていない．多少値段が高くても，そのとおりに教えたら力がつく，また教え方もちゃんと書いてある，そんな教科書をもし検定教科書として出すことが出来なければ，副教材か何かの形で出てもいいんじゃないかと思いますね．

松下幸夫



石川喜教

井田　それに関連して，私はOral Approach だからといってひとつのきまった pattern をつくるのは間違ってるんじゃないかという考えをもっているのです．Oral Approach の精神をもった自分なりの method をそれぞれ工夫していくべきだと思うし，また今後ともそうしていかなければ Oral Approach の発展はないんじゃないかという感じがします．

下村　そうですね．Oral Approach ということを，もし極端な解釈をした場合に，文型中心の drill ばかり頭にあって，そのいき方で進んだ場合にはこれはおかしなものになりはしないか．場合によっては本文についての Oral Method による introduction なんかもしてみたい．そうするとそこに折衷的な方法もありはしないかというようなことも，発展的なものとして，あるいは反省の上で出て来るのではないかとよく考えるのですが…．

松下　結局 Oral Approach のほんとうのねらいとするところは，oral language の mastery，これは理解面と運用面の両方を含みます

が，そういう all-round な力をつけていくというのが Orai Approach の目標であって，そのための順序というのが先ほどもいろいろ話しがあったけれども，いろいろな方法はあると思います．

それよりも，もう少し巨視的に Oral Approach をとらえて，なおかつ理論的に欠点があるとか，あるいは大きなねらいが間違っているということがあれば，改めるということじゃないかと思うのですが．

石川　私は現在良いものはどんどん取り入れようという姿勢で授業をやっているのですが，結局私がやっていること，あるいはELECがやっていることの将来の方向としては，決して間違ってはいないと確信しています．ただ，生徒に英語を聞かせそして英語をしゃべらせるということ，これがやはり今後やっていかなくてはいけないことだと私は思います．

下村　私は根本的にはとにかく音声を重視した授業でなければいけないと思うし，structure というものに対する考え方も Oral Approach と同じで，とにかくできるだけ練習によって習熟させていきたい．ただ生徒が structure を master したらそのあとに来るものは何かということに対して日常非常に頭を悩ましているところです．一口に言えば言語活動といわれるものでしょうが，日常生活の communication の場までもっていくことにはどうしたら良いかということを絶えず考えています．

松下　井田先生，高等学校では特に大学受験などということもありますし，いかがでしょうか．

井田　Oral Approach については色々批判も耳にしますが，とにかくもっている principle，これは石川先生もおっしゃったようにずっと今後も持ち続けて行くべきではないかと思います．

Pattern practice と communication の問題ですが，pattern practice をやりながら，たとえ不完全な状態であっても communication の場にもっていき，そしてまた pattern practice をやって完全な状態にもっていく．絶えず行ったり来たりするようなやり方で approach をやって行く方法もあるのではないでしょうか．

隈部　私は自分が教育を受けたのが Oral Method だったので，実際の授業も Oral method でやりながらも，やはりこれは Oral Approach の理論に基づいていかなければならないと思うのは，無駄というのを非常に感じるわけです．その意味で先ほどから出てきたような Oral Approach に立脚した，もっといろんな method が展開されてきて，それで工夫されてくることがいいのではないだろうか．

そういう意味で私はいろんな折衷案を考えて教育実験をやっておりますけれども，まだまだ skill の点，drill においても何が一番効果的かわからない面もけっこうあるので，教授法についてはこれからも多角的に研究していくべきだと思います．

松下　本日は「オーラル・アプローチ再評価」にふさわしい，色々な問題をとりあげてお話し願ったわけですが，この他にも制度的な面とか，教材面における制約とか，われわれの考えるべき問題はいくらでもあるわけですが，それらにつきましては，また別の機会に是非お話しいただきたいと思います．長時間どうもありがとうございました．

ENGLISH POEMS

By Tsutomu Fukuda

FALLEN LEAVES

So many books
Read and enjoyed once
Are now fallen leaves
Lying thick in the depths
Of my heart, still colourful,
On which my memory
Treads with tranquil steps.

ALL IS VANITY

Oil is short.
Toil is long.
Prices soar.
People roar.
Short is the glory
Of our long folly.

オーラル・アプローチ論

YASUI MINORU
安 井 稔

変形生成文法理論は，それまでのアメリカ構造主義の言語学で公理のごとく考えられてきたことを多く否認するところから出発している．しかし，このことは，変形文法が，構造主義の言語学が蓄積した遺産をすべて廃棄処分にしたことを意味するものではない．使える遺産は，一度解体し，再編成の上，すべて使っているのである．そう思ってみれば，構造言語学の直接構成素分析は，変形文法の句構造標識の中に，それが妥当であると考えられるかぎり，生かされているといってよく．また，Chomsky and Halle, *The Sound Pattern of English* (1968) に見られる強勢型の記述，特に，複合語の強勢の記述は，資料面に関するかぎり，Trager and Smith, *An Outline of English Structure* (1951) から，一歩も出ていないと言っても，言い過ぎではない．

こういうことをわざわざ述べるのは，変形文法の側で，構造主義の遺産に，いわば，あいさつをすることが少なすぎるからである．もちろん，利用できるものはすべて利用するという態度に非難されるべき点は一つもない．むしろ，そうしなければ，学問の進歩ということなど，望みえないことになるであろう．あいさつというのも，して悪いことは，もちろん，ないであろうが，しないことを悪いときめつける必要も，特にはないのかもしれない．一度学界で発表されたものは，いわば，学界の共通財産であるという見方も可能であるからである．ただ，学界の遺産に対するこれら二つの態度，すなわち，あいさつ型と共有財産型とを，混用されると，不都合を生ずるおそれがあることになる．

すでにかなり有名なことであると思われるが，M.I.T. を中心とするグループの人たちは，あいさつ型の態度を仲間内に対して用い，共有財産型の態度を外部に対して用いるという，かなり顕著な気風をもっている．その結果，昔なら英語学や言語学の常識とされていたようなことが，M.I.T. の人々によって，こと新しく「発見される」ことが少なくないし，他方，アメリカ構造言語学の成果は，みんな廃棄処分になったかのごとき印象を与えかねないことになるのである．もしも，変形文法理論に，こういった，いわば，あまり好ましくない体質だけがあって，新天地の開発というような真に実質的な貢献がなにもないのであるなら，かえって話は簡単である．

そういう理論は，いつとはなしに，けっきょくは消えてゆくと考えられるからである．実際は，これもすでによく知られているように，変形文法理論というのは，これに心から賛成するのでない人々の間にあっても，無視したり，意識しないで研究を進めるということがほとんど不可能であるといってよいほど大きな影響を，世界的な規模で及ぼすに至っている．以上，要するに，変形文法理論は，いちいち断わることをするしないは別として利用できるものはなんでも利用しながら，アメリカ構造言語学の公理ともいうべき理念を否認し，その行きづまりを打開し，真に見るべき新天地の開発にかなりの成功を収めているということになる．

これは，明らかに，抽象的な，また，荒っぽい概括である．が，わたくしには，あまりまちがっていない概括であるように思われる．もしそうであるなら，ここで考えようとしているオーラル・アプローチという概念も，かなり明確な再検討を必要とするものであるように思われる．オーラル・アプローチという考え方は，疑いなく，アメリカ構造言語学を基盤として生まれたものであり，その基盤自体が変形文法理論によって否認されたのであるなら，その限りで，オーラル・アプローチ自体も再検討を迫られるのは当然のことであるからである．換言すれば，

構造言語学：オーラル・アプローチ
＝変形文法理論：x

という比例式における x の値を，自分なりに求めるという課題をわれわれは背負っていることになるであろう．しかし，細かな技術的なことにまで立ち入るとなると，問題が多岐にわたりすぎるおそれがあるので，ここではむしろ，理念的とでもいうべき面に重点をおいてみてゆくことにしたいと思う．

オーラル・アプローチというとき，一般に考えられているのは何であるか，ということも，もちろん問題では

あるが，議論をまともな軌道へ乗せるためには，まず，フリーズの考えていた形から，検討してゆくべきであろう．それによれば，オーラル・アプローチというのは，外国語学習の第一段階において学習されるべき基本的な型が「口頭で」自動的に発せられ，また，聞きとれるようになることを目標としている教授法である．このように考えられたオーラル・アプローチの最も大きな特色はたとい，それがいわゆる教授法の一つであることは認めても，一義的には，方法や手段を規定しているものではなくて，到達されるべき目標を規定しているという点であろう．したがって，オーラル・アプローチを再評価するためには，この目標自体の再検討から始めてゆかなければならないと思われる．

われわれは，外国語学習の第一段階，つまり，入門期において到達されるべきものとしてかかげられたこの目標に対して異議を唱えることができるであろうか．わたくしは，できないと思う．もちろん，異議を唱えることができないと思う，というのは，ほかの目標を設定することができないということを意味するものではない．ほかの目標というのは，おそらく，いくらでも，設定することができると思われる．たとえば，基本語いを850語覚えることとか，発音のドリルだけやるとか，基本文と思われるものを300覚えるとか，あるいは，異なる言語に接する際に生ずるショックを最大限に活用して，異文化的オリエンテーションに目を見開くことを目ざすとか，さらには，アルファベットをさかさに，5秒以内で，暗誦するというようなことだって，理論的には，目標となしうるものである．

これらの，考えうる目標設定を，一つ一つ，オーラル・アプローチと対比させて考えてゆくこともできなくはないであろうが，それは，煩わしいばかりでなく，切りのないほねおり損となるであろう．だいたいの見通しということで述べてゆくことにするなら，設定しうる目標は，好ましいものと，好ましくないものとに分けることができると思われる．両者の境界線に不分明なところがあっても，あまり気にする必要はない．好ましいと思われるかぎりの目標は，捨てさるにはおよばない．ここで2つの問いを発することにしよう．一つは，入門期における目標は，オーラル・アプローチのそれではなく，好ましいとして残した他のどれかの目標で「なければならない」という議論が，成り立つかどうかということである．もう一つの問いは，どのような好ましいと思われる目標を設定するにしても，オーラル・アプローチで掲げている目標をなしですませることができるかどうかということである．両方とも，答えは否であるとわたくしには思われる．

つまり，オーラル・アプローチの目標と，いわば，等位の他の目標で，これに取って代わるべきものというのは，考えられないように思われるし，また，オーラル・アプローチの目標よりも，いわば，上位の目標を掲げる場合には，オーラル・アプローチの目標が，その不可欠な構成要素になるものと思われる．たとえば，やや真剣に考慮すべき対立案として，かりに，読解力の養成ということだけが，入門期においても，そののちの段階においても，到達目標として掲げられるべきものであるとする議論が成立したとしてみよう．この場合，音声形式を介在させることなく，印刷された文字から，直接その意味内容を理解することは，じゅうぶんに可能である．それどころではなく，印刷されたテクストの意味内容をよりよく，より早く理解するには，「目から意味へ」という黙読型，つまり，音声省略型のほうが，「目から耳を通して意味へ」という，いわば，音声換算型よりもすぐれているという証明さえ行なわれている．（レスター編著，安井稔監訳『応用変形文法』p.388参照.）

もしも，黙読のほうが音読よりも，速読には適しているということが正しいとするなら（わたくしには正しいと思われる），そのことは，オーラル・アプローチの目標を無効にするであろうか．そうは思われない．まず第一に，この黙読能力というのは，オーラル・アプローチが掲げている口頭能力と矛盾するものではなく，むしろ，口頭能力という目標よりも上位の目標として考えられるべきものである．被験者となった黙読型のアメリカ人には，すべて，口頭能力が欠けていたという前提は，なにもないのである．さらに，黙読式読解力養成という目標の設定によって，口頭能力達成という目標を否認しようというのであれば，口頭能力という目標は達成されないほうが黙読能力の育成に役立つという証明が必要となるが，これを証明することは，ほとんど不可能に近いと思われる．

本来，言語という抽象的な体系は，書かれた形として具現されることもあれば，音声という形に具現されることもあるのであるから，けっきょくは，その両方を理解することができるように学習のプログラムが組まれているほうが好ましいということも言をまたないであろう．このようなプログラムの作成に，オーラル・アプローチのほうは，なんの障害にもならないが，口頭能力なしの黙読主義は，定義上，障害になるということも明らかである．以上を要するに，オーラル・アプローチは，その達成目標に関するかぎり，ほとんど問題がないという結論を下してよいように思われる．

したがって，もし，オーラル・アプローチに反省を要する点が生じてきたとするなら，それは，みずからが掲げた目標を達成するのにどのような手順を要求しているかという点においてであることになるであろう．オーラル・アプローチにおいて比較的重点的な扱いを受けている実践面の項目をざっと拾ってみると，教材の選択と配列，口頭導入，型の練習（pattern practice）などがあり，型の練習の中には，模倣，反復，型の選択，場面の変化に応ずる能力の養成などが含まれている．これら一つ一つの項目についてコメントを加えてゆくよりも，ここでは，むしろ，いわば，もう少し大局的に，オーラル・アプローチのこうしたプログラムを含む青写真を提示した場合に変形文法理論の側から予想される反論を軸にして論を進めてゆくことにしたいと思う．

教材の選択と配列というのは，別の論考を必要とする大きな問題であるが，ここでは，結論的に，次の2つの点を略述するにとどめたい．一つは，いわゆる対照言語学的調査資料に基づいた教材が，対照言語学に基づいているという理由だけで，特にすぐれているものとされなければならないじゅうぶんな根拠があるわけではない，ということである．換言すれば，対照言語学がわれわれにいだかせる期待，つまり，母国語の干渉が，外国語学習のどの点に，まさに，生ずるかということを正確に予測することは，現状に関するかぎり，じゅうぶんに実現されているとは言えないであろう．また，対照分析に基づくドリルが常に必ず有効であるという保証もないのである．母国語の干渉が生ずるというのは，要するに，訓練不足ということであり，外国語の学習がふじゅうぶんであるということを示しているものであるにすぎないとする説もじゅうぶんに成立するであろう（安井稔監訳『応用変形文法』pp. 281，289，315 を参照されたい）．さらに，対照分析によって，困難点であることが予測される項目に焦点を合わせると，注意が不当にその点に向けられ，なんでもない顔をして教えていればなんでもなかったかもしれない事例においても，かえって生徒をあとあとまで誤まらせる結果を生ずることになるという対照分析有害説さえもある（『応用変形文法』p. 313，脚注 24 参照）．

もう一つは教材の配列に関することで，結論だけ言うなら，現在のところ，ただ一つの正しい配列というものはないということである．この場合，「正しい」というのは，その配列順に従って学習が行なわれるなら，他の配列順に従う場合よりも，必ず，学習効率のよいことが保証されているというほどの意味である．たとえば，be 動詞を含む文，have を含む文，助動詞を含む文のどれから始めるほうがよいかというような問題は，決定不可能なのである．現行の教科書には，多くの場合，各課ごとのいわば目玉商品的構文の指定が与えられているが，実際は，目玉商品的構文に注意を奪われてしまわない注意も必要であるように思われる（『応用変形文法』p. 283 参照）．特に，いわゆるプログラム学習方式というのは，一見，はなやかで高能率を約束するかのように思われるが，これによって学生が英語を有意義に用いることができるようになることはけっしてないだろうと考えられている（同書，p. 283 参照）．プログラム学習は，人間の自由な心の働きを，狭い一本のみぞの中へ押し込み殺すもので，押し殺された精神が，創造的な言語使用能力を獲得できるわけがないというように考えるのである．

オーラル・アプローチに関し，その実践面で問題となってくることをもう一つだけ取り上げるとなれば，それは，疑いなく，パタン・プラクティスを中心とするものであろう．実際，一般にオーラル・アプローチという語が用いられるとき，人々の頭の中で最もよく連想されるのは，パタン・プラクティスという語であるように思われる．そして，パタン・プラクティスという語が与えるのは，模倣と記憶，機械的なドリルというイメージではないであろうか．フリーズは，外国語学習の第一段階における目標を口頭能力の達成においたが，その目標達成のために用いるべき手段に制限をつけているわけではない．制限をつけているわけではないけれども，数ある手段の中で，パタン・プラクティスが最重要視されているということも，否定はできないであろう．それには，それだけのわけがある．ひと言でいうなら，アメリカ構造主義の言語学における根本理念が，そのささえになっているからである．

パタン・プラクティスというのは，一般に，「文型練習」と訳されているが，理念的には，文型の練習ということではなく，学習対象となっている項目が，単に個々の項目としてではなく，構造の中の，互いに対立する現象として，学習されるべきことを強調しているものである．こういうふうに見てくると，オーラル・アプローチという理念に対する変形文法のインパクトは，パタンという概念の妥当性と，プラクティスあるいはドリルというものがもつと考えられる学習上の効果という2つの面に集約されてくるように思われる．

変形文法理論の中で，パタンという語や概念が引き合いに出されることは，きわめて少ないはずである．あれだけ構造主義の言語学では重要視されていたパタンは，どこへ行ってしまったのであろうか．変形文法では，どうしてパタンということを口にしないのであろうか．答

えは簡単である．変形文法が，パタンという概念に対して，一義的な資格を与えるということをしないからである．なぜしないかというと，パタンという概念は，変形文法の基本にある規則の集合から，二次的，派生的，自動的に導き出されるものであるからである．けれども，構造言語学はもちろんのこと，変形文法も，パタンという概念の存在自体を否定しているのではない．

そうすると，問題は，教室における作業としては，どうすればよいかということになってくるであろう．つまり，言語には，パタンとか構造とかいうものがあるということは認められるわけで，そういうパタンをもった言語の習得に，オーラル・アプローチでは，パタン・プラクティスの名で呼ばれるドリルを用いているのであるが，それは正当なものであると言えるのであろうか，ということである．また，同時に，パタン・プラクティスということを変形文法理論が否認するのであるなら，それに代わるべき具体的な対立案をもっているであろうか，ということである．いずれも大きな問題で，すでに解決ずみというようなことにはなっていないと思われるが，ここでは，このような問題に対するチョムスキーの発言を軸にして，考えてゆくことにしたいと思う．

まず，チョムスキーは，パタン・プラクティスに賛成か反対かと問われるなら，反対と答えるであろうと思われる．なぜ反対なのかと問われるなら，言語とは，習慣構造や技能の体系ではなく，ドリルや，刺激・反応の連合を形成させることによって教えられるべきものではないからである，と答えるであろう．さらに重ねて，それなら，どのような言語教育のプログラムがよいのかと問うなら，それに対する直接的な答えはないこと，言語使用の根幹をささえていると考えられる創造的原理がじゅうぶんに発揮できるように言語教育のプログラムは立案されなければならないこと，習慣形成や，技能や，発音能力をあまりに強調する方式は，見当違いのものであること，などの答えが返ってくるであろう．（このような推定をする根拠については，『応用変形文法』pp. 134, 135に見られるチョムスキーの発言を参照されたい．）

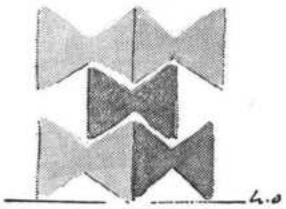
以上のことを心得た上で，それなら，チョムスキーの考え方は，オーラル・アプローチと矛盾するものであろうかと，今度は，われわれ自身に問うとしたら，どういうことになるであろうか．その答えは，イエスでもありうるし，ノーでもありうるように，わたくしには思われる．というのは，考慮に入れられる条件によって答えが変わりうるということである．たとえば，チョムスキーが考えている言語教育は言語能力が身につくに至るまでの全期間，全行程を対象にしているものであると思われるのに対し，オーラル・アプローチにおけるパタン・プラクティスは，入門期の指導に限られているという点を見落としてはならない．

したがって，入門期だけについて考えてゆくことにすると，まず，どのような立場をとるにしても，この時期に絶対不可欠の要素と考えられるものに，よい見本を示すということがある．（見本がいっさいなければ，言語のない狼少年のような結果が生ずる．）この時期にドリルはないほうがよいかといえば，そうではないと思う．ドリルがいけないのではなくて，精神の創造性や活性化を殺してしまうのがいけないのであると思われる．フリーズ自身でさえ「パタン・プラクティスは，単に，反復的な訓練であってはならない．」（フリーズ著，安井稔訳注『アメリカ構造言語学と英語教育』p. 24）と明言しているのである．

けっきょく，現在までのところ，入門期に限ってみても，唯一つの，これにしてこれに限るという処方せんはないのではないかと思われる．これを裏返すと，パタン・プラクティスは誤っているとは言えないということにもなる．オーラル・アプローチにおけるパタン・プラクティスは，おそらく必要かつふじゅうぶんなものであり，そのふじゅうぶんな点は何によって補われるべきであるかというと，精神の活性化を促すための配慮であると言ってよいように思われる．変形理論の，利用しうるものをすべて利用し，生徒の創造性を解発（trigger）させるための手段として，オーラル・アプローチを用いることを心がけるべきではないであろうか．（東北大学教授）

Solution to the Crossword Puzzle on page 56

B	U	I	L	D	I	N	G	■	O	N	E
E	N	D	■	A	N	■	A	S	K	E	D
E	■	L	O	N	G	E	S	T	■	E	G
T	E	E	■	G	■	N	■	R	U	D	E
L	■	■	P	E	D	D	L	E	R	S	■
E	N	T	E	R	■	L	■	A	G	■	S
■	O	■	N	O	N	E	■	M	E	A	L
S	T	A	■	U	■	S	O	■	N	■	I
N	■	B	A	S	E	S	■	S	T	O	P
A	L	O	T	■	G	■	T	O	■	N	P
C	■	U	■	A	G	O	■	F	A	C	E
K	I	T	E	S	■	F	A	T	H	E	R



Oral Approach の再評価

ITO KENZO
伊藤健三

はじめに

Oral Approach に対する評価については，W. Rivers (1964) が——そこでは Audio-lingual method と呼ばれている——その拠って立つ仮設を明確にして理論的かつ詳細に述べているが，本稿では実践的立場から Oral Approach の特徴について，その基本的な考え方に立ち戻って考察してみたい．

すでに周知のことであるが，考察を進めるにあたって，まず Fries が成人の外国語学習のために提唱した 'The Oral Approach' について基本的なことをまとめておく．

(1) Oral Approach とは，まず，「言語学習の最初の段階で達成すべき目標を指す名称であって，その目標を達成するために用いる方法に制約を与えるための名称ではない．」(C. C. Fries 1945 : 8) それゆえ，とかく指導上の手順 (procedures) を特定のものに制約する意味に用いられる 'method' という用語を避けて，'approach' を選んだのである．また，「目標を達成するために必要なあらゆるものを含む道筋 (path) に関心を持っていることを強調したかったために」'approach' という用語を選んだとも言っている．(C. C. Fries 1958 : 16)

(2) Oral Approach のいう外国語学習の第一段階での目標とは，「口頭での発表および話された場合の理解に必要な一群の習慣の形成」である．(C.C. Fries 1945 : 8) この目標が基礎的な言語材料の口頭での運用に習熟させることにあることを強調するために 'oral' という修飾語を 'approach' に冠したのであって，これは指導の手順に文字言語を使うことを必ずしも排除するものではない．そして，この第一段階の目標への到達を目指すことは，たとえ外国語学習の究極の目的が読むことであっても，外国語学習を始めるうえで，また学習の第一段階を通じてもっとも効果的かつ時間的に経済的な方法であると言っている．(C. C. Fries 1945 : 7 ; 1958 : 17)

(3) この学習の第一段階の目標でいう基礎的な言語材料とは，音体系と基礎的な構造型 (pattern) であって，それらの口頭での操作が 'automatic habit' になるまで，ごく限られた範囲の語彙で反覆練習するのが目標達成のためのもっとも能率的な方法であると言っている．(C. C. Fries 1945 : 3)

(4) この第一段階の教材について，「もっとも能率的な教材は，これから学ぶ国語の科学的記述を，学習者の母国語の同様な記述と注意深く比較したものに基づいた教材である」(C. C. Fries 1945 : 9) と言い，教材を編むにあたって言語材料の重要な原則として 'successive small steps of contrast' を強調している．(C. C. Fries & A. C. Fries 1963 : 7—8, 18) また，練習も，いわゆる pattern practice に代表される「型の対立」を利用した練習に重点を置いている．(R. Lado & C. C. Fries 1957 : xiii—xvii)

以上述べた Oral Approach の考え方の拠りどころになっているのは，'a language is a system of contrastive patterns' というアメリカ構造言語学の言語観 (C. C. Fries 1955 : 62) であり，さらには，アメリカ構造言語学が目標としていたといわれる「発見の手順」(discovery procedure) は次元を異にする言語学習にも適用できるという仮設である．(R. L. Politzer 1972 : 7) また，言語習得については行動主義心理学の「習慣形成説」に拠っている．アメリカ構造言語学と行動主義心理学の言語習得理論とは必然的な関係はないが，与えられた観察可能な言語資料のみに基づいてその言語を記述しようとしたアメリカ構造言語学者によってこの言語習得理論が受け入れられたのは決して偶然とは言えないであろう．

(1)

Oral Approach がわが国に紹介されたのはいまから20年以上も前のことであるが，Oral Approach のいう，外国語学習指導の目標はその運用技能に習熟させることであり，学習の順序は原則として Hearing—Speaking—Reading—Writing であるということ，また外国語の学習は反覆練習による習慣形成であるという考え方などは，当時すでに広く一般に認められていたことであって，何ら新しいことではなかった．しかし，1956 年に

ELEC が催した英語教育専門家会議で，Fries が日本の英語の教科書は30年遅れているという結論を述べたということを伝え聞いたとき，当時かなりの数の英語教育関係者が何を根拠にそのような判断を下したのか見当がつかなかったということがあった．しかし，次第に Oral Approach の教材観が明らかにされるにしたがって Fries の批判が理解されるようになった．そのように，Oral Approach の考え方は，教材編成上，とくに音声や文型・文法事項といった「言語材料」の扱い方についてのそれまでになかった新しい視点——もっとも断片的には経験的に知っていたものではあるが——を示唆し，かつその言語学的根拠を明示してくれたのである．

また Oral Approach の考え方によって音声や文型・文法事項の指導のための新しい技術が開発され，とくにそれまではなかなか教室で行なわれにくかった口頭作業が行ないやすくなり，言語材料の導入や練習にさかんに用いられるようになり，とにかく英語を口に発する練習量が多くなった．これはわが国の英語教育におけるひとつの画期的な進歩であるといえよう．

わが国の場合に限らず，学校教育での外国語学習を考えるとき，母国語の習得のさいと同じように無計画にその外国語の中に埋没させておくだけでは，外国語の習得はおぼつかない．その点から，有限数の対立からなる音声や文法構造の面においては，既習事項と新出事項との小さな段階的対立を組織的に積み重ねて学習してゆくことは，音声や文法構造の理解のために重要なことである．あとでも触れることであるが，Oral Approach に対して「認知学習理論」を無視しているという批判があるが，この批判があたらないことは上述の点から明らかになると思う．

また，外国語学習では，母国語習得のさいには必要のなかった特別の練習が必要とされるのである．Oral Approach の提唱する pattern practice, minimal pair practice などは素材としての特定の言語材料の操作に習熟させることをねらった指導技術であって，限られた時間内で，一定の外国語運用能力を習得させるという目標への到達を意図する学習指導には欠くことのできない有効な手段のひとつなのである．

このように，かつての Grammar-Translation Method に対する批判として今世紀初頭に提唱された革新的外国語教授法の多くが外国語の習得過程は本質的には母国語の習得過程と同じであるとしていた考え方に対し，Oral Approach は両者のちがいを明示したものといえよう．そして具体的には教材としての言語材料の選択，配列についての新しい視点を示唆し，かつ言語材料の操作に焦点を置いた口頭作業の有効な技術を明示してくれたのである．この点は高く評価されてしかるべきであろう．そして，たとえ Oral Approach が理論的拠りどころとしていた構造主義記述言語学の言語理論や行動主義心理学の言語習得理論が，それぞれ理論として古くなったといわれる現在でも，Oral Approach に対する上述の評価は変わるものではない．この点は，アメリカでも同じようである．たとえば，E. M. Stack (1964 : 80–1)は次のように述べている．

> 'Today's foreign language teaching is achieving success unknown under the traditional methods. This has been accomplished by the application of structural linguistics to teaching, particularly in the realms of proper sequence, oral drills, inductive grammar, and the use of pattern drills to give intensive practice.

なお，Oral Approach が契機となって，日英語の比較研究が盛んになったことと，言語学者や英語学者の英語教育に対する関心が昂まったこともわが国の英語教育のために喜ぶべきことである．

(2)

Oral Approach の考え方は，周知のように，近年わが国で大いに普及し，とくに中学校においてその特徴である pattern を中心にした学習指導が盛んに行なわれてきている．しかし，とかく新しいものが提唱され，よしとなると，その特徴をなすひとつないし少数の面のみが強調されすぎて，かえってその新しいものの現実的価値が害われることがある．Oral Approach の場合もその特徴の英語教育への寄与を強調しすぎるあまり，その行き方が英語教育のすべてであるかのように考えられる傾向がないとはいえない．とくに，最近，中学校用の教科書は外見 pattern 中心の色彩が濃くなってきているので，各課での究極の指導目標がそこに提示されている pattern の習得であるかのような錯覚を起こさせやすい．ために新出の pattern の導入が演繹的になされ，その pattern がある程度完全に学習されなければ，次に進まないといったように pattern 中心に，かつ厳密にステップを考えるという傾向さえある．もともと Oral Approach でいう pattern の実体は音声面を除いては，文法であって (C. C. Fries 1945 : 34 ; Lado 1964 : 90, 219)，ただその記述のし方がそれまでの文法とちがう点があるということなのである．その意味から，学習指導が上述のような pattern 中心になり過ぎると，Grammar-Illustration Method とでもいうべき指導になり，音声面は別であるが，かつての Grammar-Translation Method

と同じ轍を踏みかねないことになろう．（ここで思い出されるのは，1960年に ELEC が Fries はじめ数名の言語学者の指導のもとではじめて中学校用の教科書を出版したとき，〔外見が〕あまりにも ELEC らしくないという批判がかなりあったことである）．新出の pattern をその時間の指導過程の中でどの程度まで深く扱うかはことによりけりであるが，文法の面では，一般的には，既習事項の繰り返しを意図的に織りまぜた言語運用〔の練習〕をしてゆくうちに，生徒自身が pattern の意識をもつ——つまり法則を発見して内在的知識を形成する——ようにし向けてゆくのが中学校では望ましい行き方であろう．R. Titone (1968 : 109) は口頭作業を重視する Audio-Lingual Method について次のように述べているが，これはそのまま Oral Approach の特徴とされる点についてもあてはまることであろう．

> No one will deny the tremendous impact of the audio-lingual trend upon the whole methodology of foreign language teaching. But its real value can be understood only when the audio-lingual segment is placed in its right position within the total frame of the language-learning process.

なお，教材としての言語材料をアメリカ構造言語学の理論によって分析・記述することにより，また母国語との比較対照によって，その学習が従来より容易になることはあるが，すべての言語材料が，そのように客観的に分析・記述されたままで役立つとはかぎらず，学習心理の面や現場の実情に応じた扱いがなされなければならないことは言うまでもない．この点についても R. Titone (1968 : 108) を引用しておこう．

> It (i. e. the linguistic dimension) concerns only objective aspect of language study, that is the linguistic material to be analyzed, selected, graded, and presented to the student, while langudge teaching must take into account a number of other subjective and objective dimensions. There is, furthermore, no doubt that the linguistic method used in the analysis will affect the ease with which the student will assimilate the patterns of the language; .... But this only remotely refers to the teaching process. In the actual process of teaching the objective material has to be adapted to the particular student and to his objectives.

まさに言語理論が言語教育に関わる面は，重要な一面ではあるが，間接的なものに過ぎないのである．ここで問題になることは，あとで述べる運用練習のし方の場合にも言われることであるが，教材は situation(context)-centered であるべきか，structure-centered であるべきかということである．Oral Approach の特徴のひとつは，教材としての pattern の選択・配列のし方にあるが，だからと言ってその教材は structure-centered のものという短絡的な判断は下せない．教材は，その言語材料の面では必然的に structure-centered の考えが基盤になり，言語内容の面では situation なり context が中心になるわけで，対象の学習者，学習目的，学習環境などによってどちらに比重がかかるかちがってくるのである．その点は中学校用の教科書の編集でももっとも苦心するところであろう．Fries 自身も，日本の中学校での英語教育を考えた場合，situation や context のある教材の中で構造型の学習が行なわれるのがよいと考えていたことは，上述の ELEC で出した教科書や C. C. Fries & A. C. Fries (1961) を見れば明らかである．

（3）

Oral Approach のもうひとつの大きな特徴は pattern practice という指導技術である．その効用についてはすでに述べたように，だれしも認めるところであろう．

ところで，この練習をしていると表面的には活発な口頭作業が行なわれているようにみえるが，口に発する文の意味内容に対する意識が伴わないで，単なる文の発音練習に終わってしまうという危険がときにあるということが指摘される．しかし，これは実施のし方に注意すれば防げることで，pattern practice の本質に関わることではない．

また，pattern practice には「認知学習理論」の面が無視されているという指摘があるが，これは pattern practice の本質を解しない言といえよう．Pattern practice ではある特定の構造型を集中的に練習するのであって，基本文の導入にはじまって，その構造型をふくんだ文を次々と言わせてゆくうちに，個々の文よりはむしろそれら一群の文に共通する構造型そのものが「自動的な言語習慣」になることを目指すもので，構造型は類推によって習得されてゆくという考えに基づいているのであって，類推がじゅうぶん働くためには，部分的であっても論理の一貫した練習でなければならない．この練習は，音声面での習熟もさることながら，構造型の論理が——その抽象度は学習段階で異なるが——学習者によって認知されなければ目的を達したことにならない．この点に関し，J. Ross(1973) も次のように言っている．

> Good pattern practice does develop a feel for how the syntactic relationships are expressed and for what semi-universal features or distinctions

of meaning are marked in a language. Well-devised practice develops this understanding at the functional level, not just at a level of verbalization or parroting without comprehension.

なお，pattern practice は，つとに H. E. Palmer の 'Composition by analogy' に示されていて決して新しいものではないとも言われるが，たしかに基本的な考え方はまったく同じである．しかし，Palmer の場合は，構造型の対立が重視されていない点と，英語の基本的な構造型の全般にわたっていない点がちがう．

次に，pattern practice では，比較的容易に次々と文を言わせることができるからと言って，それは真の意味における英語の運用——英語による言語活動——とは言えない，という批判がある．この点については，pattern practice 自体は英語の運用練習ではなく，ましてや英語の実際的運用でないことは，認めなければならないであろう．というのは，ふつう pattern practice では伝達の目的・意図とは関係なく，英語の文を口にしているからである．C. C. Fries & A. C. Fries (1961 : 342) は，

Even the simplest pattern practices should provide the context of a communication situation.

と言っているが，少なくとも置換や転換などによる pattern practice に果して 'the context of a communication situation' をもたせることが可能であろうか．教師の与える cue や指示だけではまず無理であろう．また，たとえ教師が場面や文脈をくふうして設定しても，学習者がそれをどのように受け止めて英文を口にしているかは別問題である．むしろ機械的な pattern practice を 'the context of a communication' における言語運用と考えるのは幻想と言うべきであろう．Pattern practice はあくまでも「構造型の練習」であって，言語運用能力を習得させるための予備手段としては有効であるが，それなりの限界のあることを認めなくてはならない．この点に関して，N. Brooks (1964[2] : 154) は次のように言っているが，じゅうぶんうなづける言である．

Pattern practices are to language in action what practice exercises in any skill are to meaningful performance of that skill. The pattern practices of languages become meaningful when they take place in the normal exchanges of communication.

また，特殊な学習者は別であるが，わが国の普通教育の英語教育で，授業が「型」の学習に偏りすぎると，単調になり生徒は英語学習に対する興味や意欲を失ってしまうことは必至である．そこで，使える構造型の範囲はごく限られていても，既習事項の応用という意味で，言語の実際的使用の場面を想定させて，その場面に応じて英語による言語活動を——創造的活動をふくめて——させるようにしむけるくふうが必要であろう．その意味で，最近，構造型の操作練習にのみ偏する学習指導に対する反省ないし批判がいろいろ発表されるようになったことは当然である*．また，わが国でも1972年からの改訂学習指導要領が指導内容の大きな柱として「言語活動」をあげていることは，過去20数年間の英語教育がともすると「言語学的側面」に偏し，「言語材料」（主として構造型）の学習に重点が置かれすぎた傾向に対する反省を促している点で大いに意義があると思う．

以上，Oral Approach の基本的な考え方とその特徴を高く評価するいっぽう，その偏重はかえって Oral Approach の現実的価値を害うであろうということと，わが国の普通教育での英語教育を考えた場合，Oral Approach の特徴だけでは律しきれないものがあることを指摘してみた．

（立教大学教授）

Brooks, N. 1964[2]. *Language and Language Learning*, Harcourt, Brace and World.

Fries, C. C. 1945. *Teaching and Learning English as a Foreign Language*, University of Michigan.〔太田朗訳注（研究社）〕

——1955. "American Linguistics and the Teaching of English", *Language Learning*, Vol. I, Nos. 1 & 2.〔安井稔訳注（大修館）〕

——1958. *On the Oral Approach*, ELEC.〔*Applied Linguistics and the Teaching of English*, 山家保編, ELEC, 1970. 所載〕

Fries, C. C. & Fries, A. C. 1961. *Foundations of English Teaching*, Kenkyusha〔山家保訳（研究社）〕

Lado, R. 1964. *Language Teaching : A Scientific Approach*, McGraw-Hill.

Lado, R. & Fries, C. C. 1957. *English Sentence Patterns, Understanding and Producing English Grammatical Structures*, University of Michigan.〔伊藤健三訳注（大修館）〕

Politzer, R. L. 1972. *Linguistics and Applied Linguistics : Aims and Methods*, The Center for Curriculum Development.

Rivers, W. 1964. *The Psychologist and the Foreign-Language Teacher*, University of Chicago Press.

Ross, J. 1973. "Transformationalists and ESL Teachers Today", *English Teaching Forum*, Vol. XI, No. 4.

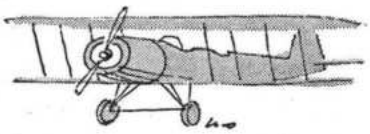
Stack, E. M. 1964. "Advances in Language Teaching in the United States", *Advances in the Teaching of Modern Languages*, ed. by R. Libbish, Pergamon.

Titone, R. 1968. *Teaching Foreign Languages, an Historical Sketch*, Georgetown University.

* L. Newmark, and D. A. Reibel, "Necessity and Sufficiency in Language Learning"(*IRAL* Vol. VI, No.2, 1968); Leo R. Cole, "The Structured Dialogue : An Attempt to Integrate Structural and Situational Approaches to Language Teaching" (*IRAL* Vol. VII, No. 2, 1969) など．

オーラル・アプローチ

——その過去・現在・未来——



YAMBE TAMOTSU
山　家　　保

はじめに

Noam Chomsky の *Syntactic Structures* (1957) の出現以来，大揺れに揺れ，暗黒時代の到来ではないかと心配された英語教育界の大混乱も漸く終息しかけて来た今日，あらためて oral approach をその原点に立ち戻って再検討することは大いに意義のあることと思う．

冒頭から英語教育界の混乱に言及したが，これが決して誇張ではないことは John B. Carroll の論文 'Current Issues in Psycholinguistics and Second Language Teaching'(1971)を見ても明らかであると思う．たとえば変形文法は応用言語学に重要な洞察力を与えるものであるという話を聞いたかと思うと，それが実際の言語指導では全くの失敗であったという報告があり，また pattern practice には全く何の科学的な根拠もないという話があったかと思うと，反対に pattern practice は重要不可欠なものであり，それと変形文法とは対立するものではないという話を聞く，更にまた一部では教授法こそがすべてであるという話を聞くかと思えば，指導法などはどうでもよく，いずれも余り変わりがないというような話も聞く．Carroll はこのような混乱の中で現場の教師は自分の指導法に対してどうすれば確信が持てるようになるのであろうかという問題を提起してその論を進めている．これはアメリカでの状況であるが，日本の英語教育界はこんな風ではなかったと誰が言い得るであろうか．

以下 oral approach がこのような混乱にどのように対処して来たかを述べてみたいと思う．

Oral Approach

物事の混乱は実体をよく見極めず，認識不足または誤解に基づく議論によって引き起こされる場合が多く，oral approach もその例外ではない．最も滑稽なのは，oral approach のわが国における最初の実践報告でもあった拙著『Pattern Practice と Contrast』(昭和31年，開隆堂）が世に出る前の昭和28年に既に，Fries の方法は時間数を多くかけねばならず，また外人教師の援助を受けなければならないが，そのようなことの出来る学校はわが国にはほとんどないというような説を流し，ora approach を葬り去らんとしていた人々があったことである．

Fries は oral approach の Bible ともいうべき名論文 'On the Oral Approach'(1958)の中でこのような誤解に対してつぎのように述べている．第一に oral approach はいくつかの共通点はあるが，direct method や conversational method とは同一のものではない，第二に oral approachは時間数を別に規制しておらず，どんな状況においても用い得る，もちろん時間数が少なければ，多い場合と比べると進歩は遅い，第三に oral approach はそもそもの初めから reading や writing を除外するものではない，第四に oral approach は英語の native speakers である教師を必要とはしない，native speaker でなくても立派な授業は出来るし，native speaker だからといっていい授業になるとは限らないというのである．

それでは oral approach とは何か．Fries は上述の論文で oral は生徒による基礎教材の oral production という目標を示し，approach はその目標に到達するために必要なあらゆるものを含む道筋を意味するものであり，method と異なって教師の指導手順を規制するものでもないとつぎのように述べている．

> The word "approach" rather than "method" has been chosen deliberately. It has been chosen in order to stress the fact that we are concerned with a path to a goal—a path or a road that includes everything necessary to reach that goal. ... The word "oral" in the name "oral approach" expresses what we want the pupil to be able to do. It does not state a limitation upon what the teacher should do. The "oral" here is not a restriction of the teacher's procedures, but stresses the particular goal for the pupil's mastery of the language materials of the first stage.

つまり英語を oral で教えるから oral approach というのではないということである．ここで特に重要な点は

oral production を目標としていることである．Production と対立する recognition にあっては，hearing の場合も reading の場合も言語記号が正しく配列されたものを与えられてそれを理解・識別するのであるが，production にあっては，speaking の場合も，writing の場合も自から言語記号を選択し，正しく配列する能力がなければならないわけで，このような能力があってはじめて完全学習が達成出来たと言い得るのである．Oral production が完全学習の基礎であり，この目標達成のためにはあらゆる有効な手段を尽せという指導の原則が oral approach であると解すべきであろう．

Oral approach は指導の原則であって，指導法ではない．従って，この原則に沿って指導するためにはそれぞれの必要に応じて方法化しなければならない．中学校における指導法と高校の readers の指導法とは異なるのが当然であり，文法・作文の指導もまた異なってしかるべきである．又同じく中学校や高校といっても生徒の能力によって指導法が異なってくるのも当然である．

Oral approach は主として構造言語学者が編み出したものではあるが，それ以前の指導法，たとえば Palmer の指導理論が大きく投影していることは否定出来ない．Oral approach が後で述べる audiolingual habit theory と equal なものではないと同様，oral approach と structural linguistics とは equal ではなく，構造言語学一辺倒でもない．Randolph Quirk などの *A Grammar of Contemporary English* (1972) が指摘するように，伝統文法も構造言語学の文法も変形生成文法もそれぞれ長所と欠点をもち，いずれもそれだけではあらゆる言語現象を説明することは出来ない．

Oral approach の立場からすれば，その目標達成に役立つならば，伝統文法でも構造言語学でも変形生成文法でも積極的に用いるということなのである．例えば英語の語法 (usage) については usage の宝庫といってよい伝統文法を無視することは出来ないし，音調・強勢・連接などの言語記号としての役割は構造言語学の助けを求めなければならないし，この2つで解決出来ず，変形生成文法理論で解決出来るものがあれば，変形生成文法理論を応用するまでのことである．

日本語の使用についても同様である．元来英語の学習指導は理解・暗誦・応用練習という3本柱から成り立っていると考えられるが，英語を理解させ，またはその理解を点検するために日本語が必要であるならば遠慮せずに使うべきである．抽象的な意味の語句や重要な構造上の相違，たとえば I found the cage empty. と I found the empty cage. という nexus と junction の差異などは英語だけで説明しようとしてもきわめて困難である．初期の direct method のように生徒の母国語を用いることを避けて生徒の理解をあいまいにして置くよりは日本語で明確に説明してやるべきである．Wallace E. Lambert もその論文 'Psychological Approaches to the Study of Language'(1963) の中で生徒の母国語を介入させた場合と介入させない場合とでは介入させた方が指導効果が高いということを発見・報告している．もちろん日本語は理解の分野で必要な場合にのみ用いるべきであって，他の暗誦や応用練習の分野で用いれば用いるほど能率がさがることはいうまでもない．

Oral approach の方法化に際してのこのような柔軟な対策の実際については 拙著『実践英語教育』(1972) を参照されれば幸甚である．

Pattern Practice

Pattern practice は oral approach でよく用いられる指導技術のひとつであるが，これに対する非難は昔からよく聞かれる．たとえば，パタン・パタンとおおむ返しで，先生には力がつくかも知れないが，生徒にはつかないとか，ある学校へ行ったら生徒が chorus で I have no head. といっていた，これが pattern practice というものだと言った類である．

このことではアメリカでも同じで，pattern practice はすぐ pattern drills, substitution drills と置きかえられ，repetitive pattern drills でまとめられている．たとえば Karl C. Diller の *Generative Grammar, Structural Linguistics and Language Teaching* (1971) では pattern drills の代表的と称する6つの例が出ているが，いずれも教師の出す cue をそのまま代入するか，または教師の示す例にならって単に主語と述語とを逆にして疑問文をつくるものだけである．これでは単なる言葉の入れ換えの遊戯に過ぎず，生徒は教師の出す cue の意味を知らなくてもやれるものである．Pattern practice が単なる繰り返しに過ぎないとする誤解は根強いものがある．James W. Ney はその論文 'The Oral Approach: A Re-appraisal' (1968) の中でこのような誤解については John B. Carroll も例外ではないかも知れないとして彼の論文の一部を引用して，つぎのように述べている．

> ...in the next sentence he states: "Thus, the learning of items in 'pattern practice' drills would be improved if instead of simple repetition there is a constant alternation among varied patterns."
> At this point, it might be possible to raise an objection to Carroll's criticism. A pattern practice

is not "a simple repetition" as he seems to think, but it is as he recommends "a constant alternation among varied patterns."

つまり pattern practice は単なる繰り返しではない，Carroll が批判しているように いろいろな文型の中で絶えず場面が変わってゆくのが pattern practice だというのである．

Pattern practice に関する論争の中でいつも見逃されているように思われる重要なものに cue がある．Cue は教師がひとつひとつの場面を示唆するために用い，生徒はそれを手がかりとして，指示されている場面を知り，それに合致した英語を言うものである．たとえば基本文が He bought a book at the store yesterday afternoon. であったとすると，教師が cue としてノートを1冊示しただけで He bought a notebook at the store yesterday afternoon. という14の音節からなる文を生徒に言わせることが出来，更に "Question" という cue を与えただけで Did he buy a notebook at the store yesterday afternoon? という15の音節から成る疑問文を，更に "What" という cue を与えて What did he buy at the store yesterday afternoon? という13の音節からなる Wh-question を言わせることが出来る．つまり cue は生徒からひとつひとつの場面に合った英語を引き出すために用いられるものである．よく pattern practice は生徒に考えさせる練習ではないという非難が聞かれるが，とんでもない．Cue は問題を提起するものであり，pattern practice は常にその問題を解決させる問題解決学習であることを忘れてはならないと思う．

Pattern practice に関する論争で見逃されがちな第二の問題は，pattern practice は単なる代入だけの問題ではないということである．Pattern practice は，与えられた文型の一部分を変える variation の部面だけをとってみても代入のほかに conversion (又は transformation) の練習も expansion の練習もあることは周知の通りである．この3種類の練習の中で最も重要なのは conversion の練習である．

筆者はかつて仙台市の仙台高等学校で一クラスを実験的に指導したことがある．その時の教材に (1) She kept the bird warm in her hands. というような文が出て来た．これを先ず chorus で repeat させて確認させてから "Question" という cue を出した．するとある生徒が直ちに (2) Did she keep the bird warm in her hands? と反応して来た．そこでこれを再び chorus で確認させたあとで "What" という cue を与えた．すると別の生徒がすぐ (3) What did she keep warm in her hands? と答えた．私はびっくりした．というのは，この生徒は不完全他動詞の keep のあとに目的語が来ずに，すぐ目的補語が来る keep warm というような collocation を見ても聞いても いなかった筈だからである．生徒にそのことをたずねて見ると全くその通りで，今度は生徒が何故見たことも聞いたこともない文がつくれたのか自分でも不思議そうな顔をしていたので，私は2度びっくりしたのである．このような conversion によって何故生徒が習わなかったような文でも正しく言えるようになるのか不思議だったが，あとで1960年に再渡米して Chomsky の *Syntactic Structures* を見て，初めて理論的に説明することが出来るようになった．つまりこの生徒は conversion の練習を重ねているうちにいつの間にか Chomsky のいう kernel sentense からの transformation の rules を体得していたのである．

Conversion の練習は変形のルールを体得するためだけに重要なのではない．問いと答えとの間には常に2段階，あるいはそれ以上の構造上の gap がある．たとえば上の (3) What did she keep warm in her hands? という問いと (1) She kept the bird warm in her hands. という答えの間には，上の (2) の Did she keep the bird warm in her hands? という文が介在しているのである．つまり両者の間には(1)→(2)と(2)→(3)という2つの段階の構造上の gap があるのである．

最近実際の communication につながる言語活動が重視されて来たことは当然ながら喜ばしいことである．しかしだからといって文の一部を代入や転換で変える学習活動は百回やっても千回やっても言語活動にはつながらないからやめろと言わぬばかりの言動が行なわれていることは大きな誤りと言わねばならない．問いと答えとの構造上の gap を埋めることなしに問答をやろうとしても決して成功はしない．これは過去の questions and answers が証明する通りである．それではこの gap を埋めるものに何があるのか．それは conversion 以外にはないのである．

Pattern practice に関する論争で見逃されている第三の問題は pattern practice は variation ばかりではないということである．ある意味，または場面を言い表わすために，正しく語彙を選択し，それを正しく配列する selection もまた pattern practice の舞台になる．

たとえば Helen goes to school by bus. という場面について，つぎのような問いを出して生徒に答えさせたとすれば，問いはすべて基本文に対して組織的・系統的な変形を加えてつくったもので，すべて同一の文型であるばかりではない，答えも当然同じ文型である．そうで

あるならば，これは文型練習以外の何であろうか.

(1) Does Helen go to school by train?

(2) How does Helen go to school?

(3) Where does Helen go by bus?

(4) Who goes to school by bus?

Pattern practice で重要なことは，cues を用いる variation の場合も，questions を用いる selection の場合でも徹頭徹尾生徒に問題を提起して，それを生徒に解かせるという問題解決学習の原則に貫かれていることである．意味を無視したような pattern practice は無意味である．Fries は意味を重視し，pattern practice も常に明確な場面の枠内で実施さるべきであり，生徒の言う英語も用いられている場面から直ちにそれが正確であるかどうかが明らかになるような指導の仕方をすべきで，pattern practice でも意味を教えなければならないと，つぎのように述べている．

> ...the pattern practice exercises must enforce the teaching of meaning. At all times the situation frame itself, in which the sentences are practiced, should be so evident and clear to all the pupils that it would provide an immediate test annd measure of the accuracy of the linguistic forms produced.
>
> —Fries, *Foundations for English Teaching*, 1961.

言語心理学論争

1965年に John B. Carroll が 'The Contributions of Psychological Theory and Educational Research to the Teaching of Foreign Languages' という論文を発表して以来，外国語の学習指導の心理学的な背景をなす指導理論の論争がにわかに活発となった．この Carroll の論文については *ELEC Bulletin* No. 25 の拙稿「Cognitive Code-learning Theory と Oral Approach」の中で充分論議しているのでくわしくはそれを参照されたいが，ここにその概略を示すと，外国語の学習理論には Audiolingual habit theory（口頭練習による習慣形成理論）と Cognitive code-learning theory（言語構造の知的学習理論）という2つの対立する理論があり，この理論のどちらがより効果的か Scherer・Wertheimer の両氏が Colorado 大学の1年生300名に対するドイツ語の指導で実験してみたところ，熱心な習慣形成理論の支持者達が予想していたような習慣形成派の劇的な勝利にはならず，彼らは大いに失望したが，結局この実験は2年間継続されたが両派とも甲乙がつけ難かったというのである．

この論文の中で Carroll は両派の用いた指導法は共に充分研究し開発されたものではなく，不完全なものであり，このような結果になったのは当然であるとしているのである．

それにもかかわらず，この論文の主旨は一般に非常に誤解された．先ず第一に習慣形成派の指導では大学生にドイツ語を指導するのに12週間も全く文字を見せなかったという極端な指導をしているのにもかかわらず，習慣形成理論即 oral approach という誤解から，だから oral approach は効果がない という説である．第二の誤解は第一と関係があり，oral approach では知的学習をさせないので学習効果が挙らないとするのである．これも根拠がない．Ney は先に挙げた彼の論文の中で Fries がその著 *Teaching and Learning English as a Foreign Language* (1945) の中で文法構造を帰納的に理解させることは oral approach に常に見られる特徴であるが，それらは常に口頭練習に密接に関連づけて指導される (Generalizations concerning structure, or grammar, are a regular feature of the 'oral approach' although they are always intimately related to the oral practice of the language.) と述べていることに注意を喚起し，oral approach の教師は生徒には正確で有用な法則だけを与え，大人を指導する場合は子供を指導する場合よりも説明を多くすべきことを助言されていると述べている．元来 oral approach では，言語の意味は contrast によって示されるものであるから，練習も重要な contrast を識別・理解出来るだけではなく，その contrast を守って発表出来るように指向されていることは，Fries の 'On the Oral Approach' にも明らかなところで，form がどのように変われば meaning はどのように変わるか絶えず重要な形態上の対立に生徒の注意を向けることは今更説くまでもない．知的学習を排するものではないのである．

1965年の Carroll の論文が非常に誤解されたので彼は 'Current Issues in Psycholinguistics and Second Language Teaching' (1971) という論文を発表し，その中で1965年の論文では自分は習慣形成理論も知的学習理論も極端な見解であり，それらを極端に押し進めればどうなるかということに興味を持っていたのであって，その当時も両者のなんらかの統合がなされなければならないと説いたつもりであるとつぎのように述べている．

> When I summarized (Carroll, 1965) two extreme points of view in language teaching as being, first, the "audiolingual habit theory" and second, "the cognitive code-learning theory," I had no

real intention of pitting one against the other. I was only interested in pursuing what each theory would imply if pushed to the limit. Indeed, even at that time I meant to suggest that each theory had a modicum of truth and that some synthesis needed to be worked out.

彼は更に言葉を続けて純粋な習慣形成理論も，純粋な知的学習理論も正しく，また包括的なものではなく，どちらもある程度誤りであり，不完全なものである．従って意味のある統合が行なわれなければならないが，それを cognitive habit-formation theory と呼んではどうかと提案している．これは正に oral approach の線である．

Carroll の1965年の論文の翌年 Chomskyは 'Linguistic Theory' と題する論文を明らかにして言語行動が習慣的なものであり，練習によって patterns が蓄えられ，それが類推の基礎として用いられるなどということはいずれも神話に過ぎないとつぎのように述べた．

Linguists have had their share in perpetuating the myth that linguistic behavior is "habitual" and that a fixed stock of "patterns" is acquired through practice and used as the basis for "analogy."

これは一大爆弾宣言であり，当然のことながら現場の教師は大混乱に陥った．それは伝統文法でも構造言語学でも言語は a set of habits であり，学習とは条件反射の問題であるとする behaviorism の心理学理論で教育されて来たからである．Chomsky は 1959年の Skinner の *Verbal Behavior* の書評の中で behaviorism（行動主義）の心理学を批判していたので，これは当然予想されたことではあったが，この爆弾宣言で cognitive psychology（認知心理学）の立場をとる変形生成文法派の学者と behaviorism の立場をとる構造言語学派の学者との大論争が展開された．

これに対して Ney, 1968 は英語の native speaker である2人の少年の一方が I'm smart, aren't I? と言い，他方が I'm smart, am I not? と言ったとすると，もし言語の習慣的な基礎を否定するのならば，この相違をどのように説明するのか．それはそれぞれ異なった言語習慣を持つ2つの異なった言語環境または言語社会に育ったところから来る習慣による条件づけ（conditioning）ではないのか．このような言語の習慣的基礎と条件反射の法則を考えずには世界中にこれほど違った言語や方言が行なわれていることを説明することが出来ないであろうとするのが Archibald A. Hill の 'Teaching of English as a Foreign Language: A Defence of the Audio-Lingual Method in TESOL' (1972) である．

ところが皮肉なことには，このような論争にもかかわらず Chomsky が Skinner 批判の中で子供達が大人や他の子供達の行動を観察し，模倣することによって言語および非言語行動の多くを習得することは疑問の余地がないようだと認めていることを Ney の論文 'Aspects of the Theory of Chomsky'(1972) が指摘しているのだから何ということはない．

そこでこの論争は結局どうなったのか．変形文法派の Leon A. Jakobovits は *Foreign Language Learning* (1970)の中でつぎのように述べている．Behaviorism 派の心理学はその理論的な欠陥を指摘されながらも1920年代以来アメリカでは圧倒的な地位を占めて来ている．それは何故かというのに，behaviorism の心理学は実際に応用して見ると効果があるということによる．その中でも特に有名なもの，重要なものだけを挙げてみてもプログラム学習，スキナー箱（条件反射応用の動物実験装置），更に条件反射の原理に基づく行動・態度の修正・変化といった面で成功し，これが教育者，動物調教師，精神療法医，広告業者，宣伝家に力を与えているからである．

Jakobovits は更に続けて，ここでわれわれは一大矛盾・逆説に直面する．すなわち理論的に余りに素朴で単純で不適当と思われるものがどうして人間の行動の分野でこれほど強力・効果的な業績をおさめることが出来るのかということである．つまり実際の場面で最も効果があるように思われるものが理論的に見るとそうであってはならないように思われる．他方もっと高度な，そして「強力」な理論からは実際的・効果的な方法を発展させ得ないでいるということである．ここに近代社会科学の破局が見られるのではないかとつぎのように述べている．

We are faced here with a tremendous paradox wherein might lie the bankruptcy of modern social scientific enterprise: what seems to work best on practical grounds, should not, it seems, on theoretical grounds, while the more sophisticated and "powerful" theories do not enable us to develop effective practical approaches.

これは変形生成文法学派の認知心理学理論の敗北の弁でなくてなんであろう．

変形生成文法

変形生成文法の出現によってアメリカの英語教育界がどのような混乱に巻き込まれていったかは，この論文の

冒頭に述べた Carroll の論文に明らかであるが，その中で Carroll は現在アメリカを代表する言語学者の一人であり，University of Michigan の English Language Institute の Director でもある Ronald Wardhaugh [wɔ́rdhɑːf] が Center for Applied Linguistics の要請によってまとめた報告書ともいうべき論文 *Teaching English to Speakers of Other Languages: The state of the art* (1969) の中で外国語の指導理論は一言にして言えば不安定 (uncertainty) という言葉で特徴づけることが出来ると述べていると書いている．

この論文では変形生成文法学者であることを自から認めている Wardhaugh に焦点を合わせて，彼が外国語の指導理論ならびに指導技術をその後どのように見，その考えもどのように変化して来ているのかを見たいと思う．

Wardhaugh は1969年の6月 ELEC で講演をしている．その講演 'Some Reflections on Teaching English to Speakers of Other Languages' は *ELEC Bulletin* の No. 27 に載っているのでご記憶の方も多いであろう．ここでその主旨の概略を述べるとつぎのようなものであった．

変形生成文法の出現により，構造言語学はひっくり返ってしまった．そこで構造言語学と behaviorism との結び付きに代わって，変形生成文法とcognitive psychology（認知心理学）とのなんらかの形の結合が行なわれるであろうが，それが正確にどのような形のものになるかはまだたしかではない，しかしそれは将来多年にわたって外国語教育に対して影響を与えることになろう．上述のことから明らかなように外国語をどのように指導すべきかということについては不安定な要素が多く (there is much uncertainty about how a second language should be taught)，教室での実験の結果も又決定的ではなく，また応用も限られる傾向にあるというのである．

これは結局英語教育の暗黒時代といってもいい状態である．だから Wardhaugh は言葉を続けて，結局のところ最も安全な道は個々の教師が自分の見つけた最良であると思う方法を用い，狭いドグマにとらわれないという折衷主義をとることであるとする．外国語教育の指導者としてはなんとも歯切れの悪いことである．やがて新しい方法が生まれて，丁度 Audiolingual Method が受けたように一般の賛成を得るようになるだろうが，目下のところはそれがどんなものになるのかについては全く concensus はなく，又誰かが近く言語教師を指導するような一連の指導原理を明らかにするだろうという見込みもないと結んでいる．

Wardhaugh は1971年9月再び日本を訪れ，'Some Remarks on Foreign Language Instruction' という講演を行ない，それが *ELEC PUBLICATIONS*, Vol. IX, 1972に載っている．その要点をひろって見るとつぎのようなものである．

変形生成文法の言語学上の発見は極めて人為的であり，理論に偏しており，直接生徒に指導すべきものではない，しかもそれらの発見は学習すべきものの僅かに一部分を cover するに過ぎない．しかもそれらはその一部分をどのように学習又は指導すべきかについてはほとんど全く何もわれわれには示していない．従って生徒がもし外国語を話そうというのならば，理論言語学がどのような状態にあろうと，英語で受け入れられる sentence patterns がどんなものであるかを学習しなければならない．たとえそのような sentence patterns が表層構造と呼ばれるものであり，理論言語学者にとっては深層構造と呼ばれるものより興味がないものであろうとかまわない．つまり生徒は依然として言語にはその構成要素 (building blocks) があり，新しい言語で意思の疎通をしようというのならば，それらを正しく組み合わせなければならないことを知らねばならず，また話すことについて考えただけでは到底話せるようにはならないので，話すように求められて，話すことを学んでゆくのである．従って彼らはドリルも練習も必要である (Therefore, they need drill and they need practice.)．最近明らかに反対の意見もあるけれども，生徒にある種の抽象的な基礎構造—深層構造を注入して彼らがやがて英語が話せるようになると期待することは出来ない (We cannot hope to inject them with some kind of abstract underlying structure in the hope that they will come out speaking English...) と述べている．

これは1969年当時よりは大幅に後退した考え方で，変形生成文法学者が熱中して研究している深層構造をいくら教えても生徒に実力はつかない，従って behaviorism の条件反射の法則に立ち返ってドリルも練習も必要だというのである．

Wardhaugh は更に1972年の12月号の *TESOL Quarterly* に 'Our Common Cause' という論文を載せているが，それには現在の変形生成文法に言語指導になんらか直接に関係するものを多く発見することは困難であることを率直に認めなければならないとつぎのように述べている．

> We must frankly acknowledge that it is difficult to find much in current theoretical linguistics that has any direct bearing on language teach-

ing as opposed to teaching about language.

これは1969年に彼が書いたものと比較したらどれ程後退したものであるかは明らかであろう．これは言語教育における変形生成文法理論の敗北の弁でなくてなんであろう．

しかしここで注意しなければならないのは変形生成文法は言語教育に貢献しないものばかりではないということである．それではどんな部分が役に立ち，どんな部分が役に立たないかを明らかにする必要があろう．

Wilga M. Rivers は 'Rules, Patterns and Creativity' (1972) の中で，Chomsky が *Topics in the Theory of Generative Grammar* (1966) の中でやったように linguistic grammar（理論言語学的文法）と pedagogic grammar（教育用の文法）とを区別する必要がある，前者は *native speaker* が任意の文が理解出来る仕組みを発見し説明することを目的とし，後者は生徒に文を理解し発表出来る能力を与えることを目的とする，言い換えれば前者は *native speaker* が獲得した言語組織についての知識である言語能力 (competence) を，抽象的なモデルで説明するものであり，それは言語使用の心理的な過程を示そうとするものでもなく，従って生徒がどのようにすれば外国語で意思疎通が出来るようになるかを示すものでもないと述べている．

Rivers は更に Chomsky が同じ著書で，変形文法学者のいう rule-governed behavior とは rules を意識的に応用した結果の行動をいうのではない，*native speaker* は普通そのような rules を意識してはいないし，意識させ得ると考える理由もないと述べていることに注意を喚起している．

以上のことは，最近の変形生成文法学者は Chomsky の *Syntactic Structures* 時代の kernel sentences の変形という考え方を捨て，主として native speakers の言語能力を deep structure の変形生成という形で説明しようとしている．例えば1968年の Jacobs & Rosenbaum の *English Transformational Grammar* では kernel sentence（もちろん surface structure である）という概念を全く捨てて，They shot themselves. という表層構造の深層構造は，*they shot they であるというような抽象的なモデルで示しているのである．

このような deep structure は Hill(1972) のいうように生徒にも，言語教師にもなんら役に立つものではない．この方面で有名な Mark Lester が native speakers である学生の作文能力を高める手段として変形文法を指導したけれども，成功しなかったことを認めていると Janet Ross は 'The Transformationalists and ESL Teachers, 1972' という論文の中で書いている．

それでは変形生成文法理論はどんなところに役立つだろうか．深層構造をどれだけ探求しても直接指導効果はないとすれば矢張り表層構造の部面である．

一昨年東京外国語大学で講義をしていたとき，ある学生が講義のあとでやって来て，Do you know *what* this is? と *What* do you think this is? では what の位置が異なるのは何故かと質問して来た．前者については伝統文法も構造言語学の文法も What is this? が名詞節となって know の目的語になったと説明するだろうし，変形生成文法では What is this? が名詞化(nominalize)されたと説明するであろう．これは変形生成文法の助けを借りなくとも説明は出来る．しかし後者は伝統文法でも構造言語学の文法でも納得のゆく説明は出来ない．変形生成文法ではこれを変形の立場から誠に明瞭に説明出来る．例えば I think this is a dog. → *You* think this is a dog. → *Do you* think this is a dog? → *What* do you think this is? と説明するのである．

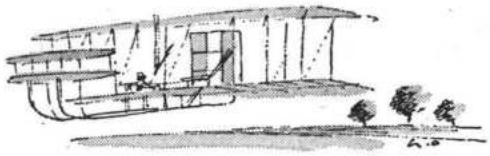
変形生成文法理論が必要であるとすれば，それは伝統文法や構造言語学の文法の持っていないものを持ち，これらが説明出来ないものを説明出来る理論を持っているからである．はしなくも上の2つの questions に変形生成文法が現場の教師に，そして英語教育に貢献出来る2つの面が示唆されていることを知ったわけである．ひとつは名詞化 (nominalization) であり，他のひとつは基本文型からの変型 (transformation) である．前者は応用面が非常に広い．たとえば The boy is walking along the street. から the *boy* walking along the street や the *street* the boy is walking along などが類推を通してどんどん生徒に作らせることが出来る．後者については既に pattern practice のところで説いたように，これは variation の中の conversion (transformation) に過ぎない．

桜井役著『日本英語教育史稿』によれば，大正14年（1925年）の第2回英語教授研究大会につぎのような答申が出された．(1)発音に注意すること，(2)同一語句を反覆練習し，自づと口を衝いて出づるに至らしむること，(3)語の音と意味とを融合せしむること，(4)第二の方法によって修得せる語句の型によりて，新に言語材料を構成せしむること．これらの原則は oral approach の原則と異なっているだろうか．

(ELEC 研究開発部長)

*

前　提 (Presupposition)



OTA　AKIRA
太　田　　朗

本誌前号 (No. 44) で焦点 (Focus) と前提のことを述べた．すなわち，The cat killed the rát. The cát killed the rat. It was the rát that the cat killed. It was the cát that killed the rat. What the cat did was kill the rát. などの文は，殺したものが猫であり，殺されたものが鼠であり，殺した時が過去であるという点において真理価値を同じくし，その限りにおいて同意表現であるが，どの部分が話者，聴者の共有する旧情報（前提）であり，どの部分が話者がそれにつけ加える新情報（焦点）であるかという点については，意味合いを異にするということであった．そして，ある文を特定の文脈で適当に使うためには，後者の機能を果す言語手段を理解することが大切なことを述べ，何が動作主であり，何が動作をうける対象になるかというような情報（知的意味）は深層構造で与えられ，前提と焦点との区別の如きは表層構造で与えられるということも述べた．

本号では，焦点と対立した意味での前提とは多少異なっているが，しかしそれと無縁でもないと思われる前提の問題をとりあげることにする．

次の(1)—(4)の文は，それぞれ(1)′—(4)′のような文を前提とするといわれる．

(1)　John has stopped beatihg his wife.
(2)　John's five children are all clever.
(3)　Mary has lost the watch John gave her.
(4)　It was John who attended the meeting.

(1)′ John beat his wife.
(2)′ John has five children.
(3)′ John gave Mary a watch.
(4)′ Someone attended the meeting.

(1)の文は，John が前にその妻をなぐったということ，すなわち(1)′，を前提にしなければノンセンスである．同様に(2)の文は John に5人の子供がいるということ，すなわち(2)′を前提としなければノンセンスである．(3)，(4)についても同様である．この場合「ノンセンスである」というのは，その文の前提が満たされなければ，その文は真であるとも偽であるとも判断できないということ，すなわち真理価値を持ち得ないということである．John がその妻をなぐったこともないのに，John has stopped beating his wife. といっても，この文は真であるとも偽であるともいえない．この場合の「前提」とは，その文が真理価値を持ち得るための条件といった意味である．

平叙文 (statement) の場合，ある文の前提は，その文全体が否定になっても必らず真になる．次の(5)—(8)の文は，それぞれ(1)′—(4)′の文を前提とするといわれるが，その意味は(5)—(8)の文が真理価値をもつためには，(1)′—(4)′の文が真でなければならないということである．

(5)　John has not stopped beating his wife.
(6)　John's five children are not all clever.
(7)　Mary has not lost the watch John gave her.
(8)　It was not John who attended the meeting.

John がその妻をなぐったことがないのに，(5)の文をいっても，それは(1)の文をいったのと同様，真であるとも偽であるともいえない．(6)—(8)についても同様である．いいかえると(1)の文が真であるなら，(1)′は必らず真であり，(5)の文が真であっても(1)′は必らず真であるということである．今，任意の2つの文を p, q で示し，「p ならば q」ということを 'p⊃q' (p implies q) とあらわすことにする．たとえば 'He is a bachelor'⊃'He is a man' のように．今(1)の文を S で示し，(5)の文はその否定であるから not S で示し，(1)′を S′ で示すと，上に述べたことは次のような形で示せる．

(9)　S⊃S′ and not S⊃S′

(9)は，(1)，(5)，(1)′のみでなく，(2)，(6)，(2)′など上にあげた例すべてにあてはまる．すなわち，一般的にいって，ある文 S′ がある文 S の前提であるという時には，(9)のような関係がその間に成立する．こ

れだけで片のつかない場合もあるが，文の前提を考える場合に，このことは少なくとも大切な手掛りとなる[1]．

Only を含んだ(11)の文の前提は(11)′であり，そしてその文が断定していること(assertion)は(11)″である．

(11) I have read only poetry.

(11)′ I have read poetry.

(11)″ I haven't read any other stuff than poetry.

(11)の文の否定(12)は，その前提である(11)′を否定するのではなく，断定である(11)″を否定する．前提の真理価値は，その文全体が否定になってもかわらないからである．すなわち(12)の意味は，(13)のパラフレーズのようなことになる．

(12) I haven't read only poetry.
I have read not only poetry, (but...).

(13) It's not the case that I haven't read any other stuff than poetry; I have read some other stuff, too.

Still を含んだ(14)の文は，(14)′のような前提をもち(14)″のようなことを断定する．t は(14)の文の示す状態の存在する時を示し，t′ は t より前の時 (t′>t) を示す．つまり(14)の文の前提は，この文の示す時より前に John は既に Mary を愛していたということである．

(14) John still loved Mary.

(14)′ John loved Mary at t′. (t′>t)

(14)″ John loved Mary at t.

問題は (14) の文の否定はどうなるかということである．(14)′の前提をかえずに，断定である (14)″ を否定する方法は， no longer, not ... any longer, no more, not ... any more を使って，(15), (16) のようにいうことである．すなわち (15), (16) の文の前提は (14)′であり，断定は (14)″を否定にした (14)‴である．つまり，still と no longer, no more とは，前提を同じくし，断定が逆になる．

(15) John no longer loved Mary.

(16) John didn't love her any more.

(14)′ John loved her at t′. (t′>t)

(14)‴ John didn't love her at t.

Still を含んだ文の否定が存在しないわけではない．しかしその場合，平叙文で not が still の前に来るような文は許されない．not が起るとすれば，それは still の後に来る ((17)—(19))．

*(17) John didn't still love Mary. (*は非文の記号)

*(18) John didn't love Mary still.

(19) Still John didn't love Mary.

ごく大ざっぱにいえば，助動詞の位置に来た not の作用域 (scope)，つまりそれが否定できる勢力範囲は，普通文全体か，not より右にある部分である．(17)，(18) が非文で，(19) がよいということは，still は not の作用域の中に入れず，逆に not は still の作用域の中に入れるということを示す．not が still の作用域の中に入れるということは，否定が前提の中に含まれるということである．つまり(19)の文の前提と断定とは，それぞれ(19)′, (19)″のようになる．

(19) Still John didn't love Mary.

(19)′ John didn't love Mary at t′. (t′>t)

(19)″ John didn't love Mary at t.

平叙文では not が still の前に来るような文は許されないが，疑問文では not が still の前に来る(20)のような文が可能である．

(20) Don't you still see him?

この文の意味は，information を求める純粋の疑問でなく，You still see him, don't you? と似て，話者は You still see him. ということを信じ，聴者にその confirmation(確認) を求めるということで，従って still が用いられても不思議ではない．

以上は平叙文の場合につき，その前提がどんなものかを，いくつかの例について述べたのであるが，疑問文の場合の前提とはどんなものであろうか．大ざっぱにいえば，疑問文の前提とは，その疑問にまともに答えることを可能にするための条件である．たとえば，次の(21)—(25)の文の前提は，それぞれ(21)′—(25)′のようなことである．

(21) Who did you see yesterday?

(22) What did you eat for breakfast?

(23) When are you going to visit him?

(24) Where did you buy that book?

(25) Why were you absent yesterday?

---

1) たとえば (10) は (1)′を含意 (imply) する．すなわち (10)⊃(1)′ である．
(10) He succeeded in beating his wife.
(1)′ He beat his wife.
しかし (10) の否定文 (10)′は (1)′を含意しない．むしろそれは(1)″を含意する．つまり not (10) ⊃ not (1)″ である．従って (1)′は (10) の前提とはいえない．
(10)′ He did not succeed in beating his wife.
(1)″ He did not beat his wife.
つまり succeed を含む文全体 S と，その中にはめ込まれた補文 S′ との間には，S⊃S′ and not S⊃not S′ という関係が成立するので，S′は S の前提とはいえないということである．

(21)′ You saw someone yesterday.

(22)′ You ate something for breakfast.

(23)′ You are going to see him some time.

(24)′ You bought that book somewhere.

(25)′ You were absent yesterday for some reason.

(21)のような問いは(21)′のような条件が満足されて，はじめてまともに答えることができる．つまり(21)のような問いは (21)′が真であるという前提の上にたっているわけである．もし相手が昨日誰にも会っていなければ(21)の問いはまともに答えようがない．それでもなおかつ(21)の問いを発すれば，Why, I didn't see anybody yesterday といった答えが返って来るであろう．この場合の why は問いがその前提条件を満していない時に発せられる表現である．そしてまともな答えとは，問いと共通の前提をもち，問いの中でいわばブランクになっていた someone, something などにある特定の値いを与えることである．以上(21)について述べたことは，(22)以下の文についてもあてはまる[2]．

先に，ある平叙文 S の前提 S′ は，S が否定されてもその真理価値はかわらない，つまり(9)のような式であらわされる関係 (S⊃S′ and not S⊃S′) が成立するといったが，同じようなことは，疑問文についてもいえる．たとえば(26)，(27)，(28)，(29) の文の前提は，それぞれ(1)，(2)，(11)，(14)と同じように，それぞれ(1)′，(2)′，(11)′，(14)′ である．

(26) Has John stopped beating his wife?

(27) Are John's five children all clever?

(28) Have you read only poetry?

(29) Did John still love Mary?

(1)′ John beat his wife.

(2)′ John has five children.

(11)′ You have read poetry.

(14)′ John loved Mary at t′. (t′>t)

ただし平叙文の場合と違って，(26)が真なら(1)′も真になるということはいえない．疑問文は真理価値をもたないからである．この場合の前提とは，(26)のような問いにまともに答えられるためには，(1)′が真であることが必要であるといった意味である．

それでは(30)のような選択疑問文の前提は何であろうか．それは (30)′のようなことであると思われる[3]．

(30) Did you see John or Mary?

(30)′ You saw either John or Mary.

つまり(30)のような問いにまともに答えられるためには，John か Mary かどちらか一方に会っているということが前提に必要で，そのどちらにも会っていないとか両方ともに会っているとかいう場合には，まともに答えられない．

選択疑問文の中には，(31)のような形のものがある．そしてその前提は (31)′である．

(31) a. Did you see John or didn't you?

b. Did you see John or not?

(31)′ Either you saw John or you didn't.

(31)′は論理上必らず真になる．今 you saw John を S とすると，you didn't see John は not S であらわせる．そうすると(31)′は 'S or not S' とあらわせる．'S or not S' という形の発言は，S が前提条件を満していて，従って真偽どちらかの判断が可能な限り，S の内容いかんにかかわらず，必らず真となる．論理的に必らず真になる発言というのは，経験的事実に関する情報量はゼロである．そして 'S' か 'not S' かどちらか一方が真であれば，他方は自動的に偽であると予測できるからその部分は余分である．従って(31)のような問いは，or で結ばれた2つの選択肢のどちらか一方を問えば論理的には事足りるということになる．

(32)のような yes-no question は(31)のような問いの or 以下が脱落したものと考えられているが，これは上述のことから理解できよう[4]．

(32) Did you see John?

(p. 62へつづく)

2) 序ながら wh- ではじまる疑問詞 who, what などと，それを含む疑問文の前提にあらわれる someone, something などとの間には，統語論的にもパラレルな点がある．たとえば else は，疑問詞の who, what などのあとにも，someone, something などのあとにも同じくつけられ，またたとえノックしている人間が2人以上いることが分っていても Who is knocking at the door? と単数を用いるのも Someone is knocking at the door. とパラレルである．また *It is someone who came here yesterday/*As for someone, ... が非文であるのも，*It is who who came here yesterday/*As for who, ... が非文であるのとパラレルである．変形文法では，wh- のつく疑問詞を，wh+someone, wh+something のごとく，wh- に不定の代名詞をつけた基底から出す．

3) (30) の文の音調に注意．(30) の文を (i) のような音調でいうと，それは yes-no question になってしまう．

(i) Did you see John or Mary?

4) 日本語の助詞「か」が，英語の or に相当する意味 (John か Mary がその会に出席した) と疑問の意味 (John はその会に出席したか) とをもっていることは，この点から考えると面白いことである．

Mass Media and Youth: Audio Visual Media

Masao Kunihiro

Professor of Cultural Anthropology
International College of Commerce and Economics

As I deal with the subject of the Utilization of Mass Media for Population Education, let it be made clear at the outset that I shall limit my remarks to electronic media, that is, television and radio, although towards the end of this paper I shall refer to printed media very casually in as far as they relate to electronic media. I should also preface my paper by an admission that by no stretch of semantic generosity am I an expert in the population problem, especially in regard to its medical aspects. Also, I shall use the term education in a highly limited sense in that it will not touch on classroom use of electronic media for population education purposes. Rather, I will discuss the subject from a broader, overall, mass or continuing education standpoint.

Although I am a layman, I am nevertheless enormously interested in the population problem, particularly its socio-economic and socio-political impact on the destiny of mankind. This bias possibly comes from my being a college teacher of anthropology. Furthermore, my remarks necessarily will concern Japan and as such will reflect the educational needs in a materially affluent nation where population pressures are not immediately felt.

In dealing with the subject in the above-defined context, let me first of all introduce to you the findings of a recent "poll", though very cursory, that I ran with 221 people ranging in age from 16 to 27. People polled were both high school or college students as well as gainfully employed, and were from urban and semi-urban parts of the country, though the rural areas were very scantily represented. I have to freely admit that this poll was very hastily conducted, the questionnaire very casually constructed, and the sampling method somewhat shaky—all for reasons of time. Nevertheless, there are reasons to believe that the poll at least gives some hints of the overall trend of the consciousness of the younger generation in this country.

The poll consisted of three questions with no pre-answers provided, so that everyone had a completely free range of problems to choose from. The first question was "What is the social problem that you personally feel most concerned about?" 21 percent of the respondents listed the problem of environmental disruption and pollution, while 13 percent and 10 percent, respectively, came forward with inflation and international relations. Eight percent came up with the changing values and human alienation, while the problem of the aged and social welfare was listed by 5 percent. Here, it is noteworthy that only two respondents of a total of 221 mentioned population. To use the age-old cliche, the population problem was conspicuous by its absence.

The second question was, "What in your view is the most serious problem the human race is faced with?". For this question, environmental disruption and pollution garnered a high 30 percent, while 20 percent came up with the possibility of scarcity of food and of depletion of natural resources, which was followed by 17 percent who listed the possibility of the degradation of human nature and human alienation. Noteworthy here is that 15 percent did come up with the population problem, with the North-South problem running a close fifth, with 8 percent.

The 3rd question was "What in your view will be the most serious danger that might befall the human race in the future?". In answer to this, possible depletion of natural resources and scarcity of food showed a high 36 percent, with the population increase running a good second at 22 percent. Here, concern over environmental disruption has shown a remarkable decline from the two previous questions, to 15 percent. Changing values and human alienation showed 12 percent.

From this survey, it seems reasonably clear that as a current imminent problem, population arouses only a modicum of interest or concern among the young in Japan. On the other hand, there seems to be a substantial concern over the problem at least latently or as a remote problem. Then, why this high degree of concern over the environment, accompanied by a low level of concern over the population in terms of current problems? Although the answer is fairly obvious, let met express some fugitive thoughts on it.

The high level of concern over the environment no doubt comes from the fact that Japan is by any yardstick the most polluted country in the world. Take for instance the ratio between the land size and GNP in Japan and compare it with the United States. While our total land area represents only 4 percent of that of the United States, Japan's GNP is roughly one third of that of the United States. If we take into account the further fact that only about 20 percent of Japan is flat and therefore is suitable for human habitation and any form of economic activity and that the Japanese economy is very heavily natural resource-intensive with a strong accent on manufacturing with environmental spoliation as its concomitant, the gravity of pollution here is more than obvious. Although a great deal of talk has been underway in regard to the need for the transformation of our economic structure to a more knowledge-intensive one, there are numerous factors inhibiting this transformation which, I fear, will continue to operate for quite some time to come.

Besides, despite the Eastern metaphysical tradition which held the harmonization of human beings with Nature in high esteem and to which we are deeply indebted, since the Meiji Restoration we have been busy catching up with the industrialized West, giving a high priority to the ideal of making Japan more industrialized and therefore stronger. This trend was further strengthened after the war when our national target was almost exclusively geared to economic and industrial rehabilitation. After this target was met, a new wave of economism and industrialism set in under the general banner of a high-level economic growth, with the result that the business of Japan is now business (to borrow a famous statement once made by an American President in reference to the U.S.), and what is good for a blue-chip Japanese corporation is good for Japan (to borrow an infamous statement attributed to an American business executive turned top Government official).

Nevertheless, the aggravation of environmental degradation has reached a point where many a case of abuse of corporate power and its resultant miseries and agony in human terms has increasingly come to the fore. Mass media have launched active, though belated, campaigns to attract public attention to the environmental problem, and the courts have begun to interpret and apply laws much more strictly than in the past, the recent ruling over the Minamata-disease case being a most dramatic illustration. The Government, which has been criticised for its "incestuous" relationship with the business community, notably big business, has also begun to mend its ways in legal enforcement, and the Environmental Agency inaugurated two years ago has become quite active under the leadership of Deputy Premier Miki who is in charge of the Agency and is noted for his moral and political integrity.

Such being the case, it is more than natural that the young respondents to the questionnaire exhibited a high degree of concern over the environmental issues. In addition, the recent skyrocketing of both consumer and wholesale prices, coupled with the disclosure of excessive hoarding

and speculative moves on the part of some big business have discredited business circles in the public eye, even to the extent that a wave of anti-business sentiments is clearly observable, marking quite a departure from the post-war period of economism and industrialism in Japan. In effect, the cult of growth has been at least partially deflated, as is evidenced by the controversy generated by the Club of Rome report, to cite only one example. To me it seems that, short of an economic recession of major proportions, the general public will see little value in the kind of expansive route that the Japanese economy has followed over the last two decades or so, and the fact that even the Liberal Democratic Party feels now compelled to attach must importance to the expansion of the social welfare program in its political platforms demonstrates at least indirectly the changing Zeitgeist here.

Let me now move on to the dearth of concern about the population problem, at least as an immediate issue. For one thing, Japan has been a success story perhaps unprecedented in having curtailed her population growth rate in such a short span of time. Japan now has an economy with full employment and a shortage of young labor. Thus, it is extremely rare for young Japanese of the age bracket of our respondents to feel any degree of pressure from overpopulation. Here, I detect a substantial difference in consciousness between Japanese of my generation and above and that of today's youth. Speaking from personal experience as the eldest of 8 siblings, I have constantly felt the pressures of overpopulation! I also felt these pressures in broader society as well. They were particularly acute during the heyday of food and commodity shortages during the war and of runaway inflation and severe un- and under-employment right after the war. Now, it is only rarely that I run into a student having more than three siblings, and demographic data wholly corroborate this personal feeling and experience of mine. So, while we older Japanese still keep this carryover from the prewar, midwar and postwar days, younger Japanese are lacking in firsthand experience of overpopulation and its debilitating and demoralizing consequences.

It is for this reason, amongst other reasons, that I feel that population education with primary stress on the medical and/or biological aspects will carry only a limited mileage with Japanese young people. Although I am not a neo-Malthusian here, I would submit that at least initially emphasis might perhaps be placed on the population problem and how it relates to environmental and ecological aspects in this country.

Contributing to the lack of awareness among the Japanese young may also be Japan's insularity which tends to isolate her from the rest of the world, particularly from the rest of Asia where the problem of overpopulation is the most acute. On account of the body of waters separating us from the rest of Asia, we are tragically if not deliberately ignorant of the severity of the problem our Asian neighbors are facing.

Of course, ignorance is hardly the monopoly of the young. In some ways, today's young people are more vividly cognizant of the rest of the world and more "internationalized" to use the cliche currently in vogue in this country. However, the lack of firsthand experience with overpopulation at home cannot be overlooked. This makes it all the more difficult for Japanese youth to have a concrete frame of reference for the population problem, while many members of the older generation may still suffer from the scars of overpopulation which they experienced in more or less personal terms. This makes a world of difference.

It seems to me, however, that a common factor is operative both in the relative lack of concern over the population problem and the keen awareness of environmental issues. And I think it is related to the psychological makeup and socio-cultural idiosyncrasies of the Japanese people. I have a feeling that one might call us a highly realistic people if we define the term "realistic" as being actively interested in what is observable or tangible. We have a very sharp sensitivity to what there is, but this sensitivity is not matched, in my view, by the same kind of sensitivity to

what might happen. That we are very adept at dealing with things at the last minute or at short-range planning may well be the direct outcome of this national trait, as demonstrated in the dexterous handling of the Olympics which were a success as a result of last-minute crash programs. On the other side of the coin, however, is the inability of the Japanese to "look into the seeds of time" as Shakespeare put it, and work out long-range plans or prepare ourselves for the remote consequences of forces presently in operation. This anthropological observation would be difficult to quantify with hard data, but I am convinced of its validity and I should like very much to invite your comments or refutations. But to continue, I feel that we have deeply imbedded in our consciousness and aesthetics a feeling of what may be termed "the sense of evanescence". Tomorrow may well be different from today, and that is the law of change. If so, why should we worry about tomorrow today? Tomorrow will take care of itself, so we should face change calmly and as it is. Why hussle now? This sense of evanescence is often politicized and no Establishment in its right mind fails to take advantage of this sort of psychic and psychological inclinations, because it is only a step way from a total resignation to whatever there is or whatever may emerge in the future. A similar attitudinal characteristic of this nation may be this feeling of "Amae" on which Dr. Doi of Tokyo University recently wrote an admirable analysis. Amae may be roughly translated as a sense of passive, trusting dependency towards another person. "Tomorrow will take care of itself" is an expression, at least covertly, of the Japanese sense of Amae towards time. Time will be kind to us, or we can fall back upon the passage of time. If this kind of orientation is prevalent, as I believe it is, there is very little incentive or motivation to prepare ourselves for a remote future.

In case you wonder why I discourse in this vein, let it be stated once again that whatever is not immediately observable can be convincingly conveyed only through the medium of what there is. This approach is particularly applicable to our culture for reasons I have attempted to clarify. In more concrete terms, population education in Japan can only be meaningful and effective when it is related to whatever is uppermost in the minds of the young to their existing frame of reference, or more precisely, introducing the population problem as it directly relates to the environmental problem. In this respect, I am convinced that the happy marriage consummated between the population control movement and the environmentalists in the United States—as in the case of Professor Paul Ehrlich's *The Population Bomb* which was jointedly published by the Sierra Club and Balantine Book Company—offers an example of connubial bliss that we in Japan might profitably follow in our movement to increase awareness of the population problem.

As with marriage between 2 people, however, by no means do I wish to imply that I feel this union of the population and environmental movements is a panacea. For one thing, there is a need for continued research into better, safer methods of birth control. Also, there is the delicate problem of not going overboard in pushing population control to the extent that there is a negative reaction to what some people may consider "media coercion".

Returning to the Japanese problem, what do I feel about the future of population education? Despite my otherwise pessimistic chemistry, I am not totally pessimistic about its future prospects. For one thing, there is a great deal of concern already very explicitly expressed about the depletion of natural resources and the scarcity of food. Although the term population is not used, respondents seem to have a deep-seated understanding of the close correlation between population increase and its expediting the outcomes they are dreading, they seem to know it is becoming a problem of "not enough to go around". In a way, sensitivity to the population problem is there latently. If so, our task is to work out an effective circuit which will link their explicit apprehension with their deep, inarticulated feeling. To put it

differently, what exists covertly should be "overtalized", and undertaking well within the realm of feasibility if an appropriate frame of reference is used to introduce the population problem.

It is my belief that we can use their concern over the environment as such a frame of reference for the population problem. Already, thanks to the reasons I have stated, there is a great deal of sophistication in regard to environmental and ecological issues. For example, the average Japanese young person is now beginning to become aware of the fact that oxygen balance has been seriously disrupted due to the contamination of the sea. He may also know as a fact that a jumbo jet on a single flight across the Pacific uses up as much as 50 tons of oxygen. If there is this level of awareness, it takes only a small step forward to learn that one individual consumes 450 grams of oxygen a day, and that if the world's population reaches 7.2 billion at the turn of the 21st century, our consumption of oxygen will be doubled, while the world's generation of oxygen will further decrease what with jumbo jets and oxygen-burning furnaces in Basic Oxygen Furnace for steel-making, let alone the further pollution of sea water with all sorts of inhibiting agents working against the photo-synthetic mechanism of plankton.

Similarly, with the garbage collection problem becoming more and more serious in Tokyo and other urban centers, he will readily understand that at least at the American standard of living one individual produces 1.5 tons of solid waste a year, while 2.5 smokestacks and over 200 miles of roadways will have to be built with an addition of each individual. And he will realize that this will strain the already polluted environment and finite natural resources of our little Spaceship Earth. In other words, he will see with no difficulty that the environmental issues over which he is enormously concerned are very closely related to the population problem and that these issues are an eminently global problem. It will be very natural for him to realize the necessity of international cooperation in our shrinking world, if the common habitat for human beings is to survive.

I would like to return briefly the questionnaire we distributed. When the young people polled listed social problems of personal concern, quite a wide variety of problems were itemized. But I feel that is quite significant that when asked to list the most critical problems facing the human race, 91% of the respondents consistently came up with the 5 problems I mentioned: environmental disruption, shortage of food and resources, decline in human values and human alienation, the population problem and the North-South problem. I think all of us can see quite easy that four of these 5 problems are intricately intertwined: pollution, food and resource shortage, population, and the North-South problem. I feel that the problem of human alienation can also be related, in that competition among an exploding population for rapidly dwindling resources can hardly bring out the best in human beings. At the same time, this concern expressed for the state of human values deserves to be looked at a little more closely. Perhaps we are beginning to see some of the tendencies among Japanese youth that Charles Reich noted in his widely read book, *The Greening of America*. In the last few decades, particularly in the post-war era, economic priorities have been stressed to such an extreme in Japan, that many young people here, like their American counterparts reared in a similar atmosphere, are beginning to question the present materialism, commercialism, and even the basic structure of society. I offer this as at least is one possible interpretation of the concern for the decline in human values and human alienation expressed by many of the respondents to our survey.

Having said this, I feel there is ample room for electronic media to assume a useful role in helping youth to wake up and smell the coffee as regards the seriousness of the population explosion and its grave consequences. As a matter of fact, I am very happy to report to you that after two half-hour programs dealing with the population problem in which I interviewed Dr. Hashim of Pakistan and Dr. Muramatsu of Japan, two

noted population experts, I was flooded with a barrage of letters from viewers around the country. Despite the handicap of the programs in that the interview was conducted entirely in English, and that it went on the air on the national educational network (Channel 3 Tokyo), the reception was far greater and more enthusiastic than I had originally expected. And the viewers, judging from the contents of their communications to me, were impressed by the direct bearing of the population problem upon the human environment, the direction in which our discussion transpired. As an illustration, I have asked the Secretariat to make available to each of you a copy of an English composition written by a 16-year-old high school student from Maebashi City, known for the cadmium poisoning from a mine nearby. In this essay, Mr. Todokoro expresses very clearly the surprise with which he learned of the rapid pace of population increase and its conceivable impact on the world in which he had to live the greater part of his life.

This, I submit to you, offers us a challenge. Young people are by definition highly receptive to new ideas and perspectives which they feel have relevancy to their own life. If this is the case as I believe it is, it behooves us to transmit ideas in a way that is relevant to them, using a medium they like. In Japan, television and radio fill the proverbial bill. From the vantage point of having spent over 7 years connected with electronic media as an instructor, moderator, interviewer and at one time as a simultaneous interpreter, I can see many exciting possibilities in using such media. The real-time characteristic of television and radio are particularly appealing to the young who in this country as well as elsewhere have a strong predilection for realistic and on-the-spot reportings.

However, I should like to add one footnote by pointing out a hidden pitfall that might catch us if we allow ourselves to become too pedagogical and sermonizing in contents or tone. Young people seem to have an almost innate abhorance to pedagogy and sermonizing. Perhaps, they are so crushed under the heavy burdens of school work and the hell of entrance examinations (for which the Japanese educational system is so notorious) that they immediately turn the other way the moment a program reeks of too much of pedagogy or preaching. This means, in my view, that we had best not introduce population materials in an excessively scientific or medical way: we should instead work out a proper mix of interesting and pertinent materials related to the overall environment, including perhaps fauna and flora in which there is rising interest, and place the population problem in this wholistic context.

Electronic media ran play one other significant role in helping to solve Japan's population problem. That is by encouraging a new image of the role of women in society. Although role options open to Japanese women have increased significantly in the last few decades, most jobs for women are still extremely boring. Moreover, although an increasing number of women are continuing to work for a year or two after marriage, most women still see themselves primarily in the role of wife, mother and housekeeper. Both our regrettably outdated education system as well as our modern electronic media network, which today reaches into even the most isolated mountain village of Japan, tend to encourage this role. Perhaps if media took it upon itself to help change this image, it could go a long way in involving women more directly in social problems and, perhaps, in providing an alternative "career" to those women who would actually prefer working to rearing a family but who feel social pressure to become a wife and mother. At present, career women are still a bit of a rarity in Japan, and I suspect we are losing the benefit of a lot of talent because of this.

Let's briefly sum up the effectiveness of electronic media. My thesis is that they are useful tools for arousing or triggering interest in a certain subject or item. They have a definite shock value in showing the seriousness of problems we may not notice in our daily lives. A scientific experiment conducted by a couple of American scientists

some years back illustrates this sometimes dangerous degree of human adaptibility in a most dramatic fashion. A frog was placed in a pot of lukewarm water, which was then placed on a burner. The water was then heated up very very gradually. As there was no lid on the pot, the frog could have jumped out at any moment, but he did not. And he died. In a similar way, we adjust to the slow, day-by-day changes in our environment. Visual mass media can serve a special function in contrasting changes that have occurred over a period of several years—or even decades—within a few seconds of time.

Electronic media have limitations, however. The recipient is essentially passive, as Marshall McCluhan has so clearly shown and as has been scientifically substantiated recently through a fascinating series of comparative studies of brain-wave patterns of electronic and printed media viewers. Once interest has been triggered, the print media are a useful and indispensable means of sustaining and deepening that interest. In this sense, they are not mutually exclusive but complimentary. In fact, quite a few of my television viewers asked me to recommend some books dealing with the subject to further their studies. This certainly is a welcome pattern and we should perhaps keep this in mind, as we work out a strategy for using mass media for educational purposes. In this respect, we in Japan should take comfort in the fact that our literacy rate is very high and that we have a thriving publishing industry, to feed the voracious appetite for knowledge of our people, who are, indeed, avid readers. Coupled with the existence of national networks of radio and television plus the nationally circulated newspapers, this makes me feel unusually optimistic regarding the possibility of a growing number of younger Japanese getting involved in the population movement. This will also be helped by the cultural homogeneity as well as of the peculiar other-oriented and consensus-achieving characteristic of the Japanese people. The recent rise in public consciousness about environmental issues even to the point of abruptness is testimony to this, although I have a sneaking suspicion that much of our awareness stems from vicarious experience and also from the band-wagon effect.

(Following is the transcribed text of a speech given by the author at an Asian Seminar of the International Planned Parenthood Federation hold in Tokyo on June 7, 1973.)

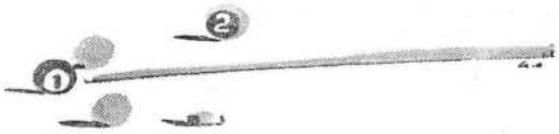
(Continued from p. 55)

So I have exhausted, not the subject of conversation which is boundless, but at least what I want to say about it here. Let me take my own advice, then, and sign off, but not before saying that I hope this article will be read rather as a guide to the spirit of conversation, than as yet another of the articles which produce reams of rules. Rules have their place, but they need learning. *The spirit of conversation,* like that of alcohol, *is one which can easily be felt.* I hope that these pages will help you know a few more common and polite phrases which you will soon be able to use habitually, and to get the feel of that marvellous thing, articulate communication between people, even if it is in a foreign language!

Remember silence is rarely sufficient communication, and that you will make mistakes. A rare charm can characterise the latter, and new dimensions be found for the language. I shall never forget the story of the Professor of Science from Ceylon, who not being a native speaker of English, but conscious of its prestige and sensitive of his social position, gave birth to the following utterance in rage to the driver when his car was damaged by a bullock cart:

> "You don't know who are we, but we know we are who!"

(Concluded)



「平均的アメリカ人」に対するイリノイ大学生の見解

HASEGAWA KIYOSHI
長谷川　潔

『英語展望』(No. 43, Autumn, 1973) 特集，**アメリカの夢**を大変面白く読ませてもらった．たまたま，フルブライト客員教授として，アメリカ人学生に日本語および日本文化を教えているので，この特集の中から，猿谷要氏の「平均的アメリカ人」を，"Social Science Reading in Japanese" のクラスで，テキストのひとつとして使ってみた．これを特にテキストとして選んだ理由は，

1) アメリカ史の研究家としてよく知られている猿谷先生のアメリカ人像を，日本人によるアメリカ人観の一つのサンプルとして，アメリカ人学生に読んでもらう．

2) ギャラップの世論調査をベースにして，Race, Region, Education, Religion, Politics など10項目にわたって，アメリカ人の姿を全般的にとらえている．

3) この論文が，ELEC 月例研究会における講演の速記であるため，口語体で書かれている．

4) これをテキストとしてとりあげるまで，このクラスでは，笠信太郎氏の『日本人なくてななくせ』，『天声人語』など，日本人に関するものばかり読んできたので，授業内容に変化をもたせたかった．

受講生は全員，大学院，および4年生で，日本語を3年間勉強した学生で（男子3，女子3），成績は全員B平均以上のものばかりである．週2回の50分授業で，6週間かけて全文を読み，期末試験として，「『平均的アメリカ人』に対する私の見解」というリポート（英文2,500語以上）を書かせてみた．本稿では，猿谷先生のとりあげられた項目のうち主なものをとりあげ，学生の書いた英文を引用しながら，論旨をすすめてゆきたいと思う．

1. Race

複雑なアメリカ人の人種問題に対する，猿谷氏の一般的な見解に対しては，大半の学生が賛意 (As for the racism he describes, it is all too true) を示していたが，具体例としてとりあげられたユダヤ人のアパートの件に関して，白人の中でユダヤ人は比較的偏見を持たないと読者に解釈されるおそれがあると日系3世の学生が次のような自分の家族が経験したことを述べている．

"Maybe I have interpreted this wrong, but it seems as if he were saying that the Jewish people did not have the prejudices he found in other whites. I do not think this is so. When my parents were first trying to move into the north-side Albany Park district of Chicago which is largely Jewish, the neighborhood people got up a petition to try to keep them from moving in. And even after they got used to us, when we sold our four-apartment complex to a Greek family with 8 children, they were not too happy again. So unfortunatelly I think no one can be considered free of prejudice or racial bias to some degree."

アメリカにおける黒人に対する偏見については，あまりにもよく知られ，日本でも数多くとりあげられているので，いまさらこの問題を特にとりあげる必要を猿谷先生はお感じにならなかったのかもしれない．しかし，平均的アメリカ人について論じているのに，全般的な現象である黒人問題についてなぜふれていないのか (Racism against black America is so total and so complete in this country, yet Mr. Saruya doesn't even mention it.) という学生が多かった．とはいうものの，今やアメリカの恥部ともいえる人種偏見問題については，何もふれられず，そのままにしておいてもらいたいという気持も，一方にはあるらしく，日本にだって人種偏見はあるじゃないかと開き直ったアジア研究専攻の学生もいた．

"Prejudice in America is, I suppose, like prejudice in Japan. Americans, like Japanese, practicing prejudice against Burakumin and Koreans, are very embarassed about the subject in front of foreigners, and feel that an outsider couldn't really understand."

2. Region

「日本人のアメリカ人に対するイメージが北東部に片寄りすぎている」という猿谷氏の指摘については，ほとんどの学生が全面的に賛意を示すと同時に，アメリカ人の片寄った日本観も東京を中心に形成されるおそれがあると自らをいましめている．

"The discussion about the reason Japanese think of New York or Washington when they think of the United States was very good. I did not realize how much effect the location of reporters has to do with the impression that foreigness receive of the U. S. And I can see that American misconceptions about Japan are to some extent the result of American re-

porters going only to Tokyo to report the news."

また，大半の日本人旅行者のように，2，3週間で，アメリカの主な都市を飛行機でまわってみても，広大なアメリカ大陸のイメージはわいてこないという見解については，次のような意見をのべている．

"I think that it is a most perceptive comment he makes that 'the great plains—this emptiness—this is truly America.' Just recently some friends of ours who had just moved from Japan wanted to make the drive all the way from Kansas across the whole Midwest to see just how far these plains stretched. Their comment, 'All the open space America has! It is unbelievable.'"

たしかに，アメリカの広大さは飛行機でとび回って旅行していたのでは，わからない．バスや汽車に乗って旅行すれば，ニューヨーク，シカゴやデトロイトのような商工業都市ばかりでなく，ロッキー山脈からアパラチア山脈まで広々とひろがったアメリカの大平原を目のあたりに見ることができるであろう．ただし，多くの点で，北部と南部とではきわめて対象的なイリノイ州を，人口分布の点からのみで，アメリカの平均的な地域とすることについては，ほとんど全員の学生が反対している．

"Illinois is actually two states in one. The North and South parts of Illinois are almost completely divided ethnically, religiously, politically, and economically."

イリノイ州の中央部には黒土豊かな農地がはてしなく広がっていて，とうもろこしと大豆の産出では米国全州の首位をしめ，シカゴを中心とする北部の工業地帯があるため，アメリカ各州の中ではどちらかといえば富裕な州といえよう．また，地理的にアメリカ中西部にあるため，カリフォルニア，オレゴン，ワシントン州などの西部海岸や，ニューヨーク，ペンシルバニア，マサチューセッツ州などの東部海岸に住む人たちよりも，外国に対する関心がうすく，保守的で地方的なアメリカ人が多いとされている．いずれにせよ，地域的な見地から平均的アメリカ人像をえがきだすのは無理ではなかろうか．

3. Pragmatism

アメリカの国を示す特徴として，猿谷先生は 1. democracy, 2. Pragmatism, 3. anti-communism, 4. Christianity, 5. capitalism (imperialism), 6. racism の6つの条件をあげている．そして，原爆の写真を何年か前に日本に売りに来たアメリカ人の例をあげて，「これも pragmatic なアメリカの考え方によればあたりまえのことであって，特別のアメリカ人ではない．平均的なアメリカ人の考え方です」と述べておられる．

プラグマティズムのこの解釈に対して，学生たちは強い反発を示して，授業の時にも論議のまととなった．日本人とちがって，自分の考えていることを歯に衣(きぬ)を着せずにいうのが，いわゆる「平均的なアメリカ人」の特色のひとつであろう．したがって，次に引用する英文は，アメリカ人学生のいつわらざる気持ちをそのままストレートに伝えるものとしてお読みいただきたい．

"Mr. Saruya's paragraph explaining American 'pragmatism' gave a negative impression to me, and to all the students who read it. It is not considered normal or acceptable behaviour for an American to sell pictures of Hiroshima in Japan. Mr. Saruya's purpose is not to explain 'pragmatism', but to take the opportunity to throw a little slander our way, and most Americans would feel insulted by it."

要するに，原爆写真のうりつけは，アメリカ人的な物の考え方からみてもいやしむべき行為であって，平均的なアメリカ人のするあたりまえの行為ではないと強く主張しているのである．英語の pragmatism は日本語では「実用主義」または，「実際的なものの見方」と解釈されているが，アメリカ人にとって，pragmatism はただ単なる実利主義以上のものがあるのであろう．

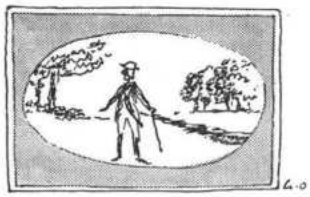
American Pragmatism を示すよい例としては，今年の1月6日から実施された，年間を通しての Daylight Saving Time をあげることができる．エネルギー危機とはいっても，石油をはじめあらゆる資源が日本よりもはるかに豊かなアメリカにおいて，このようなことを全国的に直ちに実施するところに，よい意味での American Pragmatism が示されているのではなかろうか．

石油エネルギーばかりでなく，すべての資源を節約しようという考え方も徹底していて，つい最近も，学校の事務局から次のようなお達しが，使用ずみの紙の裏にタイプ印書されて回覧されてきた．

"In order to conserve paper and avoid waste, the Center will, in the future, be sending out notices, memoranda, announcements, etc. which have been mimiographed on paper already used on one side. We will try as often as possible to line out the side to be disregarded, but if you have any doubt, the noitce will be on the side with the latest date. Thanks for your cooperation."

日本における紙不足は深刻な状態であると伝え聞いているが，日本のお役所や大学の事務局では，果してここまで徹底して紙資源の節約に努力しているのであろうか．

（イリノイ大学フルブライト客員教授）



和文英訳二題

KUNIHIRO MASAO
國弘正雄

はじめに

ちかごろとんと英文が書けなくなった．なぜだろうと考えてみるに，昔ほど英文，それも直接しごとや専門の勉強に関係のない英文を読まなくなったからであろう．いま一つは，むかし読んだ英文がやや古風な，スタイル的に安定したものだったのに，昨今ではジャーナリストの手になる安手の文章か，学者の物したこちたき理くつを並べたてた悪文が多いからである．私はむかしはイギリスのマコーレーとか，アメリカならホーソンとかの文章が好きだった．これらの作家のものは鶴翼魚麗の法とでもいうのか，視覚的にシメトリーをもった文体で，右に十歩はり出していれば，左にも十歩はり出している，という趣きがあった．対照の妙のようなものがである．ところが昨今の英文ときたら，そういう雅趣は消え失せ不協和音がたえずきしみを立てている．どうも文体感覚がすっかり不安定になってしまったらしい．

いま一つは，私自身，英語を話したりちょっとしたメモ程度のものを書きなぐる機会が増えたことに起因しよう．つまり妙に英語に狎れたことが，かえってじっくりと腰を据えて英文を書く上の妨げになっているらしいのである．英語に接する機会が多いことを私が無条件に好ましいと思わぬのも，これが理由である．つまり外国語に対するときに必要な精神の緊張とでもいうべきものをとかく失ないがちだからで，この弊害はとくに読書の際に顕著にあらわれるが，書くときも例外ではない．ことばの習練には，何といっても一徹な生真面目さが求められると私は信じているのだが，接触が深まると Familiarity breeds contempt．とでもいうのか，ややもすると気のゆるみが生じ，精神の弛緩が生まれる．英語への接触はこんご増大することはあっても減少することはなかろうから，このあたりの矛盾をどう乗りこえるかは，日本の英語教育界にとって，大きな問題であろう．

ところで和文英訳となると話は一段と面倒になる．実は私はどうもこれが苦手で，はじめから英文をしたためる方がまだ楽だと思えてならない．だから日本文の英訳はつい億くうで，いままでも日本語の本を英語にするようにとのお誘いを何度か受けながら，ついついご免を蒙ってきた．さいきんになってやっと古いものを1冊手がけた．貝原益軒の『養生訓』がこれで，なぜあんなものをとのお訊ねには，因縁があったのでしょう，と申し上げるよりしかたがない．同様に，和文英訳のテキストや参考書を書くようにというお申し出も一再ならずあったが，お断わりしてきた．要は自信がもてないのである．

したがって以下に掲げる和文英訳二題も，よんどころない事情で人さまにご依頼を受け，ようやく手を染めたにすぎず，和文英訳の専門家からみれば，随分と程度の悪いものであろうことを怖れる．ただ原文はすばらしいと思うし，時事的な和文英訳をのせたいという編集部のご要望もあって，あえて手持ちのものをご披露申し上げるまでのこと．幸いご海容をえたい．

さいしょは，朝日新聞の昨年12月29日の社説「アラブへの橋をかけ渡して」である．まず原文を転載する．

アラブへの橋をかけ渡して

荒れ地にクワを入れる，という言葉がある．未墾の大地を切りひらく先駆者の困難と，そのさきに待つゆたかな結実の成果の可能性を，いい現す言葉であろう．

師走の日本をたって約20日間，暑い中近東諸国を歴訪し，日本とアラブ諸国との間に友好の橋をかけ渡した三木武夫氏の旅は，まさしくその言葉にふさわしい．

のしかかる石油危機の重圧と緊張，そして国民の切実な期待を負っての旅であった．何はともあれ，老身をひっさげて激務，重任を果たした三木氏に対し，心から「ご苦労さま」という言葉を送りたい．

だれがみても，それは損な役回りであった．アラブ産油国の生産制限は偶発的な出来事ではなく，中東問題についての“アラブの正義”を実現すると共に，先進工業国の浪費から民族資源を守ることに，その目的があった．それに対して日本は，外交政策上の用意もハラ構えも十分でなく，国同士の友好的なきずなも，か細かった．そうした空白の上に，アラブ諸国との友

好関係を築き，しかも対日生産制限について先方の理解を求めようというのである．

政治家がその自己顕示欲をみたすにしては，余りにも困難かつ危険の大きい仕事だった．あえてそれを引き受け，荒れ地にクワを入れる任務を果たした三木氏の中にわれわれは，近ごろとみに乏しい政治家のステーツマンシップを見る思いがする．

アラブ歴訪に当たって三木氏が携えたのは中近東新政策と呼ばれるアラブ支持の外交方針と，スエズ運河改修工事への協力案など，いくばくかの経済援助に過ぎなかった．その三木特使の外交努力にこたえる形でアラブ産油国が日本を友好国に認定し，対日生産制限の緩和を決定したのは何故であろうか．

外遊をふり返って三木氏はいう．「1967 年の国連総会で外相だった自分が，イスラエル撤兵を求めた安保理決議 242 号の支持演説をしたことを，各国首脳はよく覚えていてくれた．それが対話を成功させる一つの基盤になった」と．また「日本が石油の話ではなく，正しい中東問題解決の道をさぐるために，副総理を派遣してきたことを心から評価してくれた」と．

かいつまんで言えば，アラブ諸国首脳が三木氏を厚くもてなし，胸襟（きょうきん）を開いて話しあい，ひいては日本とアラブとの友好と対話の素地を築くことができたのは，三木氏個人の政治経歴や個性，そして中東問題の基本にふれようとする姿勢によるところが大きい，といえるだろう．

同時に忘れてはならないことは，アラブ諸国が三木氏の背後にある日本の国際的政治能力，いいかえると一片の外交文書を越えた具体的な行動力の発揮を期待していることである．

「言葉は雲，行動は雨」というアラブの箴言（しんげん）がある．行動こそ大地をうるおす慈雨だ，というのである．アラブ諸国が三木氏に問いかけたのは，「日本は雲なのか，雨なのか」ということだった，といえるだろう．

アラブ諸国が一致して日本に期待したのは，その国力に見合う政治力を国際世論の喚起，とりわけ米国に再考を促す方向で発揮してほしい，ということである．

アラブ諸国は，日本の果たす役割について細かな注文はつけなかったといわれる．しかしその期待するものは明らかである．三木氏自身も，それに答えるために新年早々，再び米国，欧州への旅にたとうとしている．その各国歴訪が中東問題解決に役立つかどうかはかかって政府が中東新政策で示した方針を実現させる決意の有無にある．それを怠ることは，単なる三木武夫個人の不名誉ではすむまい．

（訳　例）

A Bridge between Japan and the Arab World

There is an expression in Japanese: "setting a hoe to wasteland." It aptly conveys both the difficulties which discourage and the possibilities for rich recompense which give hope to pioneers opening up virgin land. It also describes very well the recently completed 20 day trip by Deputy Prime Minister Takeo Miki to several Arab capitals for the purpose of building a bridge of friendship between Japan and the Arab world.

On Miki's trip weighed the pressure and tension of the oil crisis and the earnest hopes of the people of Japan. Considering his age and the arduousness and heavy responsibility of his mission, we think he deserves a pat on the back and a sincere word of thanks for a job well done, for it was a thankless task in anyone's eyes.

The production restrictions imposed by the oil-producing Arab countries were no accident. They were meant to achieve the "just cause" of the Arabs in the Middle East imbroglio and protect the natural resources of Arab countries from the prodigality of the advanced industrial countries. Japan, for its part, was caught off balance with a sorely inadequate foreign policy stance toward the Arabs and, at best, feeble ties of friendship with them.

Miki's task was to try to fill this gap by seeking a foundation for friendly relations with the Arab nations as well as Arab understanding of Japan's plight in the face of oil production cutbacks. Fraught with difficulties and even dangers as it was, this task had to be unattractive even given the natural craving of a politician for publicity. We see in Miki's willingness to take this task upon himself to set his hoe to the wasteland of Japanese-Arab relations, the kind of statesmanship that one sees far too little of nowadays.

All Miki took with him on his journey was Japan's new Middle East policy of support for the Arabs and offers of a certain amount of economic

aid, which included a proposal for Japanese cooperation in reopening and improving the Suez Canal. Why. then, did the Arabs reward Miki's efforts on the diplomatic front with designation of Japan as a "friendly country" and a decision to ease cutbacks in oil shipments to Japan?

After returning to Japan, Miki commented on his trip: "The leaders of the countries I visited were kind enough to remember that back in 1967 as Foreign Minister I made a speech before the U. N. General Assembly which expressed Japan's support for Security Council resolution No. 242, a measure calling for Israeli withdrawal from occupied Arab territories. This provided a basis for the success of our dialogue. The Arabs also sincerely appreciated the fact that I had been sent in search of a just solution to the Middle East problem and not to just to talk about oil."

Thus, it was Miki's political background and personality as well as his readiness to get to the core of the Middle East problem that were largely responsible for the warm reception he received at the hands of the Arab leaders, their willingness to talk with him in an atmosphere of cordiality and frankness, and the success achieved in laying the groundwork for friendship and dialogue between Japan and the Arab nations.

At the same time, however, it is important to realize that Miki's hosts had high expectations of Japan's international political influence. The concrete action that Japan could take in the political arena would mean far more for the Arab cause than mere words on some diplomatic document.

There is an Arab proverb which says that "words are clouds, action is rain." We might rephrase this as: "Action is the benevolent rain that slakes the good earth's thirst." What the Arabs asked Miki was, in effect: "Is Japan just a cloud, or is it rain?"

All of the countries that Miki visited expressed the wish that Japan use political influence commensurate with its national strength to sway international opinion in their favor and to prod the United States to reconsider its Middle East policy.

The Arabs, purportedly, did not make any detailed demands concerning Japan's role. It is nevertheless obvious what they hope for. That is why Miki will be off again early in the new year, this time to the United States and Europe. Whether this new trip will be helpful in resolving the Middle East problem depends on whether the Japanese government is really resolved to carry through the course of action implicit in its Middle East policy. If it is not, the price will be far more than Mr. Miki's reputation.

原文は社説には珍しく(?)瑞々しさをすら湛えた名文といえよう.三木氏の成果を単に皮相な次元で捉えずに,同氏の国際政治家としての資質や志操の高さに求めている点も支持政党やイデオロギーの差を超えて納得がいく.同氏が国際的に通用する数少ない政治家の一人であることには,ほぼコンセンサスが存在するからである.

原文の調べの高さを果して私の訳文は半分でも伝えているであろうか.もとより私にはそれを判断する資格はない.文学に昏く英文学の作品から遠ざかって久しい私には,しょせんこの手の原文の英訳は手に余る作業なのであろう.実務的な英語ばかりを手がけている身の至らなさを思わされるのみである.

次は沖縄海洋博の基本理念の試訳である.題して「海—その望ましい未来」.原文は同海洋博協会の大浜会長(元早大総長)の手になるもので,私が準備委の依頼を受け,英語になおしたのである.とくに苦労したのはタイトルで,書名や映画の題名を訳すときにも似た熟慮の末に,5つほどの私案を提出,委員会での討議を経て最終決定をみたものである.

ではまず原文を掲げる.

海—その望ましい未来

基本理念

はてしなくひろがる宇宙空間の一角に,白雲をまとって青く輝く地球は,全人類の共同の運命をのせて飛びつづける宇宙船にもたとうべきものである.その地球は,"水惑星"の異名が示唆するように,その三分の二は海でおおわれている.そして海は,すべての生物の発生のふるさとであり,そこで母になぞらえられる.

海の幸,山の幸という古い表現がある.このことは,わたくしたちの祖先が海を資源の宝庫とし,それにたよってきたことを教える.また人類社会は,遠い地域との往来,民族の移動,文化の伝達,物質の交流

によって，めざましい発展をとげてきたが，それは，海洋に航行の道がひらかれたからにほかならない．このように，海をはなれて人類の歴史を語ることはできないが，人口の膨張と，人間の欲望の多様化は，海洋への依存度をますます高め，その開発と活用を促進する動因となるであろう．そして，海には，なお多くの可能性と，魅力が内蔵されているのである．

海洋科学は，最近百年の間に，海の驚異の実態を明らかにし，その構造と変化の跡を教えてくれたが，海中にはなお多くの未知の謎が秘められている．とくにその大部分をしめる広大な深海は，冷たい常暗と重圧にさえぎられて，ある意味では月よりも遠い存在になっている．しかし，人類は海底に眠る資源にあこがれ，その開発と海中空間の利用をめざして，飛躍的に進歩発達した科学技術を動員して，これらの障害の克服にとり組んでいるのである．

ところで，海は陸地に比べれば，はるかに広大ではあるが，その海とて有限の空間であり，かつて無尽蔵と考えられていた海中資源にも，自ら限度のあることを忘れてはならない．自然に育ったものを捕獲するだけでなく，自ら育ててこれを採る栽培漁業，または養殖漁業への転換の必至が提唱されているのも，この間の消息を物語るものである．なお，青い衣をまとい，光る太陽のもと，あのように輝きと美しさを誇ってきた母なる海も，自然環境の破壊を意に介しないでひたむきに量産をめざしてきた工業開発の進展に伴って漸次に汚染され，その固有の浄化作用をうしなって，病める海に変わろうとしている．

全人類は，いまやこの危機にめざめ，深く反省するとともに，新たなる観点から英知を結集して，清らかにして豊かな海を再現する必要に迫られている．それには，平和的な国際協力のもとに，海洋の望ましい未来を求めて，環境の保全と，改善にふさわしい開発の方途を求めることが必要である．

ともあれ，海と人間との対話をとおして，自然との協調をはかり，能うかぎり海洋のめぐみを享受することによって，人間の真の幸福をもたらす，新しい海洋文化の樹立を指向して，この沖縄国際海洋博覧会をひらくことにした．海の望ましい未来像，そのあらまほしき姿の探求は，人類の当面する共通の課題であり，それが，この博覧会のめざす目標でもある．

沖縄は，黒潮の流れにうかび，古代から，海洋民族の文化交流の中継地としての役割を演じてきたが，さんさんたる亜熱帯圏の陽光のもと，いまなお汚れを知らないさんごの海にかこまれている．この海を舞台に，世界のひとびとが相集い，この祭典をとおして，理解と愛を深め，感激とよろこびをともにすることが，わたしたちの心からの願いである．

では訳文を．環境問題，資源問題などグローバルな諸問題については年来強い関心を寄せ，かなり広く物も読み，訳書—ただし英→日—も二，三世に問い，教育テレビでも何回かこの分野についての対談番組を主宰してきただけに，内容の把握や必要な語いの面ではほとんど問題がなかった．しかし，美文調の原文を英語にうつすのは，私の文学的素養の貧寒さから意余って力の足りない結果におわったのではないかと怖れる．

（訳　例）

The Sea We Would Like to See

Basic Concept

In a corner of the endless stretches of the universe the emerald-like Spaceship Earth, speckled with white clouds, continues its journey through space carrying the common destiny of all mankind. This Earth of ours is sometimes called the "water planet," for two-thirds of its surface area is covered by the sea. The sea, from whence sprang all life, is the earth mother upon whom even now human beings must depend for subsistence.

In Japan, there is an old saying, "*Umi no sachi yama no sachi*," which literally means "happy gifts from seas and mountains." This tells us that our ancestors have looked on the seas and mountains as treasure houses of natural resources upon which they could depend and for which they have been thankful. Moreover, through travelling between distant places, migrating from one region to another, spreading different cultures, and exchanging products, human society has achieved amazing progress. This has been made possible by the fact that the ocean opened to mankind navigational routes across the seven seas. The history of mankind cannot be discussed without referring to the sea. But now man is becoming even more dependent on it as population swells and man's desires become more diverse, and it becomes increasingly necessary to develop and make further use of the oceans. Fortunately, the sea, in turn, offers many possibilities and attractions.

While it is true that in the past hundred years oceanography has revealed to us much of the wonders of the sea and has taught us about its structure and the changes that it has undergone, the sea still holds many puzzles, many secrets. This is particularly true of the deep-sea regions, which account for most of the world sea area. Penetration here by man is blocked by cold, perpetual darkness and prohibitively high pressures, making these depths in a sense more remote to man than the moon. But this has not stopped man. Hungering for the riches of the ocean beds and for more spatial utilization of the sea, he is working on overcoming such obstacles by mobilizing recent new achievements in science and technology.

Although the sea covers a far greater area of the Earth's surface than does land, it should not be forgotten that the sea, too, is a limited space and that there is a natural limit to the oceanic resources that have previously been considered inexhaustible. For this reason, voices are calling for a shift from a fishing industry based on hunting nature's resources to one using nurseries and cultivation.

Another matter that demands our attetion is the fact that the mother sea that used to be so beautiful, so brilliant in its green garb under the radiant sun, is becoming a sick sea suffering from pollution caused by indiscriminate industrial development and dumping of industrial wastes beyond the ocean's capacity for natural purification.

Man must awaken to this crisis. He must reflect profoundly on past errors, summon all of his wisdom and tackle with imagination the task of restoring the purity and richness of the sea. It will require international cooperation to establish appropriate environmental goals that will ensure a bright future for the ocean world.

In holding this Okinawa International Ocean Exposition, it is our hope to establish a new order of oceanic culture that will make it possible for man to enjoy to the utmost the blessings that the sea can bestow upon him. Realization of the "sea we would like to see" is a common task facing mankind and is the very objective of this Exposition.

Okinawa, floating in the midst of the Kuroshio, has since ancient times been a relay station for cultural exchanges among the peoples of East Asia, and under a brilliant subtropical sun, it is set in a coral sea that is stil unspoiled by the wastes of modern civilization. We hope from the bottom of our hearts that the people of the world who gather here on this ocean stage will gain deeper understanding and love as well as inspiration and joy through this Exposition.

お わ り に

以上，私が手がけた和文英訳を２つご披露した．一つの感想はまたしても，英文を頭から書く方がやさしいのではないか，ということである．翻訳だとどうしても原文にこだわってしまい，手足を縛られての作業という思いを拭いえない．とくに英米人の場合には，日本人とはちがって翻訳臭の強い訳文に対する寛容度が低いので，その困難は倍加される．バタ臭い日本語はわれわれにとっては魅力ですらありうるが，タクアン臭い英文は一般の英米人――詩人などの場合には例外もあり，『英語の話しかた』でその具体例をあげたこともある――にはみむきもされない，という事情も介在している．英語による日本の実情の紹介は急務だが，われわれの一層の自己研鑽が望まれるところであろう．

いま一つの感想は，長文の日本文を英語にすることにもっと馴れていかねばならぬ，という点である．どうもわれわれは短文の英訳には比較的長じているが，長文となると不得手のようである．しかしパラグラフ単位で発想するのが英文の基本的な性格であることを思うと，少くとも二，三パラグラフから成る英文の作法に通じる必要はまことに大きい．一つのパラグラフと次のパラグラフとを語法面のみならず内容や思想の展開の面でどうつないでいくかを会得することは，英文修業の上で必須の準備であると思われるからである．いや，短文を移しかえることばかりやっていると，それに狎れて内容や思想の一貫性もしくは関連の重要性に目がふさがれ，必要な語法上の訓練もできぬままに，却ってマイナスになる．英語の論理展開に不可欠な接続詞や語法・発想両面での「係り結び」を真に身につけるためにも，長文英訳の稽古は欠かせないのではないか．

これは決してお節介でもお説教でもない．いまだにまともな英文をよう物せずにいる一書生の，自戒のことばであり反省の思いなのである．　**(国際商科大学教授)**

英語になった日本語(2)

——ウエブスター第3改訂版の日本語——

HASEGAWA KIYOSHI
長谷川　潔

戦後における日本語の特徴のひとつとして，外来語の氾濫がよくあげられる．確かに周囲を見まわしても，「マイ・ホーム」，「インスタント食品」，「建売マンション」など…，最近10年以内に日本語にくみいれられた外来語が頭にうかんでくる．

しかし，これはなにも日本語だけの特殊現象ではなくて，英語を母国語とするイギリスやアメリカをはじめ，ドイツ，フランスなどのヨーロッパ諸国にも多くの外来語がはいりこんでいる．

外来語は別に「借用語」ともいわれ，外国語がその国の国語として同化され，用いられるようになったものをさす．英語ではこれを naturalized foreign words（帰化語）とよんでいる．

当然のことながら，外来語は外国文化の受け入れと密接な関係がある．たとえば，日本語に外来語が多いということは，それだけ日本が外国との交渉接触が多かったことを示している．これを歴史的にみると，中国文化との接触によって，中国語の積極的な摂取が行なわれ，それがいつのまにか日本語として完全に同化してしまった．徳川幕府の江戸時代には，カステラ，ジャガイモなどのポルトガル語，スコップ，スポイトなどのオランダ語が日本語の中にとり入れられた．さらに，明治の文明開化が始まると，英米文化とこれによって招来された英米語をはじめ，ヨーロッパ諸国の文化とその言語の影響が日本語にみられるようになった．また，第二次世界大戦以後は，アメリカ文化の強力な影響が，日本語にもあらわれ，米語系の英語が外来語としてさかんに用いられるようになったことは言うまでもない．

このように考えてみると，*Webster* に 200 語以上の日本語が外来語として記載されているのは，戦後30年近くにわたる日本との密接な接触によって，日本文化，日本語の影響がアメリカにもおよんでいることを示している．この事実は，英語としてとりいれられた日本語にもよく示されていて，前回にひき続き，今回もとりあつかうBの項でも，biwa（琵琶），bonsai（盆栽），bonseki（盆石），bugaku（舞楽）など，日本独特の文化，芸術などからの言語で，英訳してもとても一語では表わせないことばが多く記載されている．

B の項（続き）

B-5 *biwa*

A 4-stringed Japanese lute.

（4弦の日本のリュート）

リュートというのは14—17世紀に用いられたギターのような弦楽器であるから，この定義でほぼまとをえていると思われる．アメリカ人学生でも次のように大体正確に琵琶という楽器を想像することができる．

〔例1〕 A Japanese musical instrument similar to a modern guitar. By saying "lute" one probably would expect it's origin is very old and that it is probably no longer used extensively.

ただし琵琶はかならずしも4弦とは限らず5弦のものもあるらしい．日本人の若い人たちの間で琵琶がもはや見なれない楽器になったのと同じようにアメリカ人の学生の間でも，lute という楽器はなじみの少ない楽器らしく，正確にはどんな楽器であるか具象化することはできないらしい．また，現代の日本ではほとんど聞かれなくなってしまった琵琶を，三味線と混同したのか，一般的な邦楽器と解釈した学生がかなり多かった．

〔例2〕 The *biwa* is a Japanese lute. As was most of Japanese instruments, this biwa originated in China, and was later introduced in Japan.

Today it is a 4-stringed wooden-backed instrument *which is fairly common.*

〔例3〕 This type of instrument *is heard quite often in Japanese songs.*

物語の伴奏としての琵琶は，『平家物語』と結びつけて考えられ，Lafcadio Hearn の『耳なし芳一』の物語に出てくる琵琶法師のイメージがうかんでくる．これを英語で解説すると次のようになる．

〔例4〕 The *biwa* is like a lute or mandolin and

was used by Japanese musicians as early as the heian period to accompany the telling of tales from the past as are found in *The Stoy of Heike.*

B-6 *bonsai*

A potted plant (as a tree) dwarfed by special methods of culture (as by limiting the space for and pruning of roots and by training of shoots by pruning and esp. by coiling wire around the branches): also, the art of constructing such a landscape.

(特殊な栽培方法による矯性の鉢ち植木〔それは場所を限定し，根を切り詰め，また余分の若葉を刈り，とくに枝のまわりに針金をまきつけて仕上げる〕また，そのような造園技術.)

盆栽の説明としては，最初の部分は正しいと思う．鉢植の木の種類として，松，杉，梅などが多く用いられるという説明があれば，盆栽を知らない英米人にもっと具体的なイメージを与えるのではなかろうか.

"the art of constructing such a landscape" のところは盆栽というよりもむしろ，造園技術のことをさしているようにとられるので，問題があるように思われる．日本の盆栽をよく知っている学生の一人は次のような感想を述べている.

〔例1〕 I've seen many *bonsai* trees in pots but never a bonsai landscape. They are very beautiful and fascinating to see. The definition portrays bonsai from the horticulture and the esthetic point of view very well.

技術としての盆栽の定義は，"the art of dwarfing and shaping trees by pruning and controlled fertilization" とでもすればよいだろう.

B-7 *bonseki*

a landscape constructed of sand and stones on a tray; also the art of constructing such a landscape.

(盆の上に砂と石で造る風景：そのような風景を造る技術)

盆栽はともかくとして「盆石」などが ***bonseki*** として米語の中にとりいれられているのに驚かされた．ただ，残念なことに，この定義だと「盆景」と誤解されるおそれがある．したがって，盆石の定義としては，

"the creation of a miniature landscape on a black tray by using white sand and stones in patterns."

また，盆景の定義としては，

"the construction of a miniature garden(landscape) on a tray" のようにすれば「盆石」と「盆景」の相違がはっきりするのではなかろうか.

B-8 *bonze*

A Buddhist monk of the Far East.

(極東の仏教の僧侶)

「坊主」の一般的な意味としては正しいのかもしれないがやや説明不足の感じがする．もう少しくわしい説明がほしいという感想が多かった.

〔例1〕 From what sect of Buddhism or how bonze live is not mentioned. I would have liked a more specific definition since I know nothing of bonze before.

Webster の定義では，"Far East" と限定されているが，一般的に東洋の僧侶，特に東南アジアの僧を意味するのではないかといった東洋史専攻の学生がふたりいた.

〔例2〕 I received the impression that this could be a Buddhist monk from any Asian country and any Buddhist sect in Asia.

〔例3〕 This seems more commonly applied in English to Southeast Asian monks.

仏教研究はすでに戦前からアメリカでおこなわれていたこともあって，bonze ということばは，*Webster* 3 版以前にすでに外来語としてアメリカで用いられていたようである．そして bonze が一般に仏教の僧侶をさしていることは，遠藤周作の『沈黙』の英訳本 *Silence* においても，bonze ということばを a monk of Buddhism と解釈して英訳していることからもうかがいしることができる.

B-9 *bugaku*

A stately classical Japanese dance originally introduced from China.

(中国から伝えられた壮重な日本の古典舞踊)

舞楽は日本の民族芸能のひとつで，6，7世紀ごろ中国大陸から伝来したものである．『日本を知る事典』によれば，今日，宮中で演奏される舞楽は，京都・奈良・大阪四天王寺の三方楽所のものがもとになっているそうだ．この3か所の舞楽が地方に流布し，神社や寺院の祭礼にとりいれられたものが各地に残っている.

辞書の定義としては，上記のもので充分であるが，日本独特の文化・伝統から生まれたものを，単にことばのみによって解説することには限界がある．舞楽を実際に見てみたいという感想をのべた学生が多かった.

〔例1〕 Like the *biwa*, I would like to see *bugaku* performed since words can nowhere approach a portrayal of costume, movements and art-

fulness. I now only know that bugaku is a classical dance, and I have no deeper understanding than that.

B-10 *bushido*

A traditional specif. feudal-military Japanese code of behavior emphasizing loyalty, benevolence, bravery, self-control, and the valuing of honor above life.

（忠誠，寛容，勇気，自制を強調し，生命よりも名誉を重んじる伝統的，特に封建軍事的な行動規範）

「武士道」ということばの定義はむずかしい．*Webster* のこの定義から，武士道は軍国主義的，忠君愛国的な大和魂の実践面での規範をさすのだというふうに曲解されやすい．

〔例1〕 I relate bushido to the *baka* suicide pilots since the *baka* would need to have this valuing of honor above life *Bushido* strikes me as being very traditional and characteristic in the Japanese behavior code.

新渡戸博士の有名な『武士道』(英文原著は1899年刊)には，武士道とは書かれざる道徳律であるとして，次のように述べている．

「武士道は上述の如く道徳的原理の掟であって，武士が守るべきことを要求されたるもの，もしくは教えられたるものである．それは成文法ではない．精々，口伝により，もしくは数人の有名な武士，もしくは学者の筆によって伝えられる僅かの格言であるに過ぎない．寧ろそれは語られず書かれざる掟，心の肉碑に録されたる律法たることが多い．不言不文であるだけ，実行によって一層力強き効力を認められて居るのである．それは，如何に有能なりといえどもひとりの頭脳の創造ではなく，また如何に著名なりといへどもひとりの人物の生涯に基礎するものではなく，数十年数百年にわたる武士の生活の有機的発達である．道徳史上における武士道の地位は，恐らく政治上における英国憲法の地位と同じであろう．しかも武士道には，マグナ・カルタ（大憲章）もしくは，ハベアス・コルプス・アクト（人身逮捕令）に比較すべきものさへないのである．」

武士道をこのような考えで定義するとすれば，code of behavior というより封建時代に武士の間で発達した moral principle or phylosophy という方が正しいと思われる．

(Bushi-do, the way of warriors, is the moral principle or philosophy developed among the warriors during the feudal period in Japan.)

D の項

大名，富士，ふぐ，ふすま，下駄，芸者など，日本独特のものを表わすことばが，この項においてもとりあげられている．

D-1 *daimyo*

One of the former feudal barons of Japan who were vassals of the mikado but had extensive powers in their own baronies.

（日本の封建時代の貴族．天皇の家臣だったが，領地に対して広汎な権力を持っていた．）

天皇の家臣というのは明らかな誤り．将軍または幕府直属の家臣とすべきであろう．アジア研究専攻の学生で，日本史を勉強している大学院生から，次のような感想がよせられた．

〔例1〕 Under shogun not the Emperor. After establishment of the Tokugawa shogunate, this freedom, even within their *han* was severely restricted.

F の項

F-1 *fugu*

Any of various globefishes that contain a heat-stable toxic principle resembling curare and are sometimes eaten in Japan with suicidal intent.

（クラレ〔マチン属の植物の汁から作った毒〕に似た不変熱的な有毒素をもつ種類のふぐ．日本では時々自殺するために食べられる）

有毒素をもった魚という定義は良いが「自殺の意図で食用にされる」というのは，昔のことで，現在では調理法がすすんでいるから，中毒の危険はほとんどない．とにかく，この定義から，アメリカ人学生が受けるふぐのイメージは次のようなものである．

〔例1〕 This appears to imply that all those Japanese who eat fugu intend to kill themselves.

〔例2〕 The definition does not say anything about where fugu is found. I gather that its only use is for its poison, since suicidal purpose is mentioned only in reference to Japan. I also assume that the act has traditional and cultural background.

したがって，and are sometimes eaten in Japan with suicidal intent のところは，but with careful preparation they are eaten and enjoyed as a special delicacy in Japan とすべきであろう．

F-2 *Fuji*

Sacred mountain in south central Honshu.

（日本の本州中央南部に位置する神聖な山）

富士は日本で一番高い山で，今でもやはり日本を代表するもののひとつであろう．この山の美しさは，多くの文学にかかれ，絵に描かれ，その賛美はいつまでも日本人の心にあると思う．しかし，現在ではどの程度信仰の対象になっているかを考える，sacred という形容詞をこの山の定義に用いるのは疑問に思われる．この定義から受けるアメリカ人学生の富士山に対するイメージは次のとおりである．

〔例1〕 A natural shrine which is worshipped and believed to extend to those who pray to it certain blessings—perhaps a good crop, a successful business year.

〔例2〕 I get the impression that Mt. Fuji is some kind of religious(Buddhist or Shinto)mountain, and is held by all to be sacred.

〔例3〕 Mt. Fuji is the tallest mountain in the Japanese islands. Pilgrims climb the 10 mile route through the night to welcome the dawn. A clap to gain the attention of Amaterasu-O-Mikami. And a bow to this greatest of shinto deities is part of the ritual of climbing Fuji-san. Kawabata in *Yawa no Oto* mentions fuji-san as one of the three great sights of Japan.

以上，いずれも sacred ということばから受ける印象が強いことを示している．

F-3 *fusuma*

A framed and papers sliding door used to partition off rooms in a Japanese house.

（日本の家で部屋をしきるのに使われているわく組のある紙のはってある引き戸）

だいたい妥当な説明であると思うが，この定義では障子との区別がつかない．

〔例1〕 I know these as shoji, the paper room dividers and walls in the Japanese homes.

〔例2〕 Fusuma is quite common in Japanese style homes. I think that they are very beautiful in their simplicity and fit well into the peaceful air of the surrounding design.

〔例3〕 Important to the flexibility and illusion of space and essential to traditional Japanese architecture.

〔例4〕 A door used to divide rooms, being made of a wooden frame covered with paper.

〔例5〕 The doors in Japanese houses which are used to make a room larger or smaller, because a Japanese house has no definite areas such as living room, kitchen, bedrooms etc.

「障子」と「ふすま」の区別をはっきりさせるためには，Fusuma is similar to shoji but solid from top to bottom. It is often used for closet doors. のような説明をつけくわえなければならないだろう．

G の項

G-1 *geisha*

1) A Japanese girl who is trained to provide (as by playing on the samisen, dancing, serving food or drinks or by sympathetic, witty, or amusing talk) entertaining and lighthearted company (as for a man or a group of men).

2) courtesan

1)（三味線をひいたり，踊ったり，食物や酒を給仕したり，または思いやりある話や機知にとんだ話，おもしろい話などによって）（個人やグループの男性のために）気楽な会合をつくり出すよう訓練された日本の娘．

2) 高級売春婦，遊女

富士山とならんで，もっともよく外人に知られている日本語であろう．辞書の定義にしてはかなりのスペースをさいている．1)の説明はほぼ正確でわかりやすいと思う．2)の定義については，芸者は「温泉芸者」のような使い方もあるので，英語の courtesan よりも意味範囲が広いように思われる．geisha ということばはほとんど全員の学生が知っていて，いろいろなコメントが集まった．アメリカ人学生が日本の芸者に対して持っているイメージを知る資料になると思われるので，いくつか選んでみた．

〔例1〕 A professional entertainer reared from an early age.

〔例2〕 Confusing construction of definition, but seems pretty accurate. It might be better to mention that they are dwindling but still used for businessmen's dinners.

〔例3〕 The Japanese who believed that women could amuse themselves while men couldn't, started this program long ago of training girls to please men. It was set up to be an art and a respectable one with no sex involved.

〔例4〕 The geisha must also be noted as a

civilized institution of prostitution as seen in the Kawabata novel *Snow Country*.

〔例5〕 I have the impression that geisha are professional people who entertain an audience. Traditionally, they were quite renouned being the "epitome of femininity"; very much serving the men. But today, the Japanese society has probably changed and views geisha in a professional realm.

G-2 *geta*

Japanese wooden clogs for outdoor wear.

（戸外ではく日本の木靴）

この定義だと「日本人は外出するときに木靴をはく」という意味にとられはしないだろうか．とにかく説明が簡単すぎて，下駄のイメージは浮かびにくいと思われる．

〔例1〕 This definition seems to imply that all Japanese wear geta when out of doors.

〔例2〕 Aren't these only worn with kimono's?

〔例3〕 Are not all shoes to worn only out of doors in Japan?

英米人は室内でも靴をはくので，for outdoor wear とつけくわえたのであろうが，日本人は室内では別の靴をはいて，外出には木靴をはく習慣があるという誤解を招くおそれがある．和英辞書にも clog としてあるが，下駄＝clog という考え方にも少しひっかかる．clog はフランス語では sabot で起源は紀元前2世紀ごろ．現在でも，オランダ，フランスなどで農民が用い，類似のものは朝鮮・中国にもあるらしい．「木靴」といわれて，日本人がすぐに思いうかべるのは，オランダの民族衣装を身につけた少女のはいている木靴であろう． clog は英語で a heavy shoe, sandal or overshoe having a thick wooden sole と定義されている．たいらな木の板に小さなあなをくりぬいて布のはなおをつけて足にはく下駄とはかなりことなったものである．下駄のように日本独特のものは，文字で定義するよりも，さし絵で示すほうがわかりやすい．

G-3 *go*

A Japanese game that is played with black and white stones on a board marked by nineteen intersecting lines into 361 crosses and that has as its object the possession of the larger part of the board and the capturing of the opponent's stones.

（日本のゲーム．361の交点をつくる19の縦横の線が印された盤の上に黒と白の石を置いて行なう．盤のより広い部分を占有し，相手の石を獲得することを目的とする．）

将棋よりもむしろ碁のほうが国際的によく知られているせいか，かなりくわしく説明している．盤の上のスペースを占有することを明示しているので，西洋のチェスとは異なることがわかる．この定義を読んで，碁のやり方，起源などに興味を示した学生が多かった．

〔例1〕 This definition, although somewhat complicated, does not give adequate information on how the game is played, that is, moves, mechanics, etc.

〔例2〕 Well I certainly couldn't sit down and play the game after this definition. When was the game originated, and what was the stimulus for its inception?

囲碁の起源は中国で，吉備真備（きびのまきび）が日本へ伝えたという説があるが定かではない．紀元8世紀ごろには，日本に伝来していて宮廷貴族の間で楽しまれていた．囲碁の石の動かし方やその rule の説明については，かなりのスペースを要するので，辞書でとりあつかうのは無理であろう．

G-4 *gobo*

1) a burdock (Arctium Lappa) cultivated in Japan as a vegetable.

2) gobbo okra.

(1)ごぼう．野菜として日本で栽培されている．2)ごぼうおくら）

「ごぼう」は欧米では雑草扱いであって，薬草として用いられることがあっても，食用でないところから *Webster* にとりあげられたものと思われる．上記の定義に，根が食用になるということをつけ加えるほうがよいだろう．

一般のアメリカ人にとっては，burdock ということばになじみがないらしく，"I don't know what a burdock is." と言った学生もいる．一方，日本に在住したことのある学生は，「ごぼう」を食べたことがあるらしく，次のように述べている．

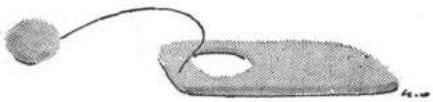
〔例1〕 Burdock root used in making certain fillings for *sushi*. Many new year's foods and picnic delicacies use burdock root or gobo.

〔例2〕 This is a vegetable that looks like a root. It is gray in color. Gobo is usually eaten in a sugar and soy sauce mixture.

（次号に続く）

（イリノイ大学フルブライト客員教授）

SILENCE IS NOT ALWAYS GOLDEN (6)



David Hale

Lecturer
Harrow College of Technology and Art

VI. The Game-II
'Signals' and The End Game

In conversation there are various ways of saying some things. Sometimes outright expression of something might be too blunt, or impolite, and a more devious way of saying it is usually used. This means that listeners have to be prepared to notice the 'signal' hinting at something which cannot be said outright. Speakers have also to be able to use them instead of the blunt statement.

One such 'signal' or hint is to change the subject when it is conversationally impolite to continue with the existing one. Let me outline an example:

Two people are discussing the apparent greed and articulate stupidity of international finance. The friend of one of them, who is unknown to the other, approaches, and just happens to be the Director of the International Speculation Club. If the introduction fails to make it clear that the subject should be changed for very politeness, then the speaker who introduces the Director to his friend must hint that it is no good to go on with it. He might lie, with a rather pointed look:

> "Well we were just talking about the migration of birds. . . ."

or "Talking of the weather, do you play golf?"

By this time, the friend should have realised the picture and swung into a new topic which might be agreeable to them all.

Also, if during conversation you happen to know that one of your partners has an intense dislike of something, or has a particular reason not to want to talk about a certain subject, say, cancer, as a friend has just died of it, and the third party to the conversation, not being aware of this, begins to talk about that very thing or subject, it is your duty to hint, somehow or other, that the topic is a bad one and must be changed. Some phrase, coupled with a suggestive look, such as:

> "Oh, yes! But that's rather a gloomy subject, isn't it? Let's talk about the flowers in spring. . . ."

or "Mm! Well, but don't you think that. . . ?"

and completely change the topic.

The sensitive listener will realise what is in the air, and will go along with the change.

Conversation should be a pleasant, stimulating or relaxing thing, not a pain and tribulation. So the recognition of hints will keep the atmosphere right, and knowing when it is time to stop will prevent the pleasant experience from leaving a bad taste in someone's mouth. Another use of hint therefore is to suggest when it is time to finish the occasion. Outright statement would be very blunt and would shock the listener as well as embarrass him. So some more subtle form of suggestion is used. An occasion on which such a suggestion might be used might be in the case of students visiting a lecturer. They have, let us imagine, been talking and eating and drinking for several hours. (One of my private theories is that at least an initial dose of alcohol makes a conversation 'go' in Japan, but it may unfortunately be impracticable for the entire communicating public to tow around with it a supply of liquid stimulus!) Though everyone looks set to wait until breakfast, the exhausted host wants to go to bed as his unsympathetic small children will set the day rolling at the crack of dawn. He can hardly say: "Well, goodnight!", that would be too

impolite, but he might remark:

"Well, *it was* nice to see you all!"

or "Thank you all so much for coming, *I have enjoyed* the discussion."

The clue is in the use of the *past tense*. This kind of statement really means:

"Sorry, it's very late. I have enjoyed your visit, but we must close down the session now. It's time for you all to leave!"

You should train yourself to catch the note and the past tense, and despite the fatigue of long talk in English and the less practical extended effect of alcohol, you should collect your wits and your coats, make your goodbyes, and move on!

This brings us generally to *the End Game*. You should know how to finish off any conversation without being impolite or giving the other person the feeling he has been abandonned, deserted or dropped. Naturally the principle formulated above, that of more formality for more official occasions and less for casual ones, still holds.

If you have just met someone for the first time, and had any length of talk with him, short or otherwise, you might finish off by saying something like:

"Well, I'm afraid I really must go now. It has been a pleasure to meet you Mr. Snodsbody. Goodbye!"

To remember to whom you have been talking is also very polite in such cases, but it is not absolutely necessary, and it is better to omit the name altogether if you are afraid you haven't got it quite right!

In trying to terminate a conversation, you should not make a sudden statement:

"I'm going now."

in the middle of a discussion in full swing. Lead up to it by a few polite remarks:

"Oh, dear, just look at the time!"

or "But I seem to be late already."

and then make your goodbyes. If you seem to have been talking for some time and are worried that your partner might have to be on his way, some 'opening' for him to use to help break off the conversation might be diplomatic:

"I'm sorry to have kept you talking for so long."

or "Am I keeping you?"

which gives him the alternative to stay or go as need be.

Less formally you might say, in the closing stages of the conversation:

"Well, I must be off now."

or "Goodness! It's time I was on my way."

or "Well, so glad I bumped into you." (for a chance meeting)

If there is some reason for you to thank someone, then a repetition of your thanks should also be a part of your farewell:

"Thank you so much for the (ten-ton rock, I'll always treasure it.) Goodbye!"

or "It was so kind of you to (help me across the road, young man, even though I was actually going the other way!) Goodbye my dear!" (a very 'English' situation)

or "I'm looking forward to the (all-night Victorian long-poem recital;) it was so kind of you to (give me tickets.) Goodbye for now! See you at the (recital!)"

Very informally you often hear single words, after the first leaving-phrases have been made:

A: "Well, I must be off now."

B: "Me too. *Cheers*."

or A: "Well, see you later."

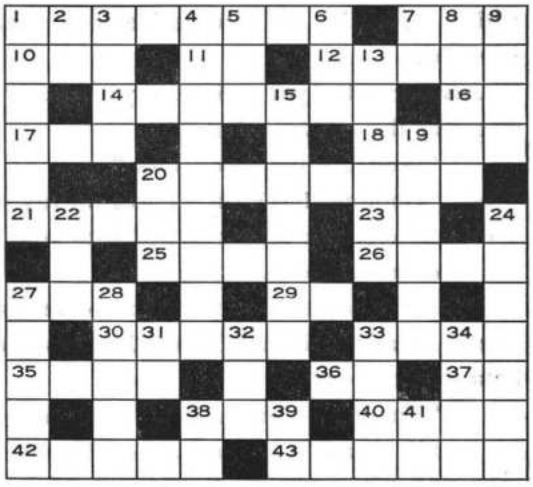
B: "O.K. *'Bye*."

When someone has made his first leaving-phrases it is naturally impolite to go on chattering away if it's clear that they have to go. Play the game, and help them sign off. The End Game should nicely round off a pleasant or stimulating experience, and send all the conversing partners off on their respective roads with as gratifying a feeling as possible. Even when the boss has dismissed you in ignominy for incompetence and bad manners he likes to finish off, at least, nicely:

"But we needn't refer to that again, Smidge. No hard feelings I hope? And I wish you well in your new career as a redundant road-sweeper! Goodbye!"

(Continued to p. 41)

CROSSWORD PUZZLE



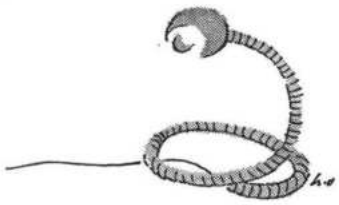
ACROSS

1. Structure with roof
7. Sounds like WON
10. Not the beginning
11. Friend of *a* and *the*
12. Questioned
14. Not the shortest
16. Abbreviation for EGYPT
17. Small pin used in golf
18. Impolite
20. People who travel and sell from place to place
21. Opposite of LEAVE
23. Abbr. for AUGUST
25. Not even one
26. You eat one in the morning, one at noon and one at night.
27. Abbr. for STATION
29. Do not walk ___ fast.
30. Four are used in baseball.
33. Sign at corner
35. Many (2 words)
36. Not FROM
37. Abbr. for NOTARY PUBLIC
38. Long, long ___.
40. Front surface of your head
42. Boys fly them in the wind
43. Male parent

DOWN

1. Flying insect with hard cover
2. Abbreviation for UNITED NATIONS
3. Not busy
4. Not safe
5. Suffix forming present participle of verbs
6. It's used in cars.
7. All right
8. Requires
9. Border
13. Small river
15. Without end
19. Requiring immediate action or attention
20. Used for writing
22. I will ___ go.
24. Cinderella lost one.
27. Light meal
28. Nearly; approximately
31. He left ___ 5 o'clock.
32. A hen lays one each day.
33. Not hard
34. Not twice
38. Pay ___ you enter.
39. He is one ___ my friends.
41. Exclamation

The solution to this puzzle may be found on page. 20.



C. V. Harrington

新刊書評

Studies in Honor of Albert H. Marckwardt

Edited by James E. Alatis
TESOL, 1972, pp. 166+vi

YAMBE TAMOTSU
山家　保

この本は1972年6月 Princeton 大学を停年退職した Albert Henry Marckwardt [márkwɑrt] 教授の退官記念論文集で，Teachers of English to Speakers of Other Languages（略して TESOL）の Executive Secretary-Treasurer である Georgetown 大学の James E. Alatis 教授が編集を担当している．

寄せられた論文はすべて Marckwardt 教授の指導を受けた世界的に著名な一流の言語学者15名のもので，その中には東京教育大学の太田朗教授の論文も含まれている．

まず TESOL の Executive Committee を代表しての Alatis 教授の Dedication のあとに，Princeton 大学の William G. Moulton 教授が Marckwardt 教授とその著書・論文を招介して概略つぎのように述べている．

1970-1971年版の *Who's Who in America* では 'Marckwardt, Albert Henry (mark'-wart), educator' という書き出しになっているが，簡素な飾り気のない，しかも力強い educator という名辞は Al Marckwardt には誠に打って付けのものである．彼は1903年 Michigan 州 Grand Rapids に生まれ，1925年 University of Michigan で A. B. を得，2年ほど high school teacher を勤め，1928年には同じ大学から A. M.，1933年には Ph. D の学位を得た．1928年から Universiy of Michigan の instructor となり，1934年に assistant professor，1939年に associate professor，1946年に professor となる．1960年には同大学の English Language Institute の Acting Director，1961年には Director となる．1963年には Princeton 大学に移り，それまでほとんど英語学の講座のなかった English Department を充実させ，その Acting Director を二期勤め，1972年6月停年，名誉教授となる．この間米国内のいろいろな教育団体で指導的な役割を果たしたばかりでなく，海外でも幅広く活躍し，日本にも何度か訪れている．

Marckwardt 教授の著書・論文の主なものを挙げればつぎの通りである．

Facts About Current English Usage with Fred G. Wolcott. 1938.
Scribner Handbook of English, 1940.
Introduction to the English Language, 1942.
American English, 1958.
A Common Language with Randolph Quirk, 1964.
Linguistics and the Teaching of English, 1966.

このほか論文の数は極めて多いが，*ELEC PUBLICATIONS* や *ELEC Bulletin* に寄稿したものには 'American and British English' (1663) と 'Linguistics and English Teaching' (1968)がある．

Marckwardt 教授のこのような業績がどうして可能であったかと言えば，まず第一に彼が言語の運用と鑑賞に人並はずれた才能を持っていたからだろうと Moulton 教授は述べている．彼は読書が極めて速く，かなり大部な小説でも3～4時間で読破するというのである．第二には亡くなった Grace 夫人が典型的な良妻賢母で，彼は常に夫人に遅れまいと努力したこと，第三には彼の無限ともいうべきエネルギーを挙げている．彼はつねにスポーツ，特に水泳の効能を説く同僚達に悩まされて来た．Michigan では C. C. Fries だったし，Princeton では W. G. Moulton であったが，Grace 夫人によると彼は運動には向いておらず，それを考えただけでくたびれてしまい，博物館や動物園へ行ったりするといつも足が痛いと言い，それを彼は museum feet，あるいは zoo feet といっていたというのである．

さて本書の論文の寄稿者とその題名はつぎの通りである．

Virginia F. Allen, 'Some TESOL Perspectives on the Teaching of Reading'
Edward M. Anthony, 'Zeugma and a Theory of Lexicon'
Ralph Pat Barrett, 'The Presentation of Low-frequency Patterns to the Advanced TESOL Student'

Russell N. Campbell, 'Teacher Training Programs: Then and Now'

Frederic G. Cassidy, 'Toward More Objective Labeling in Dictionaries'

Eugene Green, 'Adult Knowledge of English as a Second Language: Formal and Practical'

Morgan E. Jones, 'Toward a Generative Model of Bilingual Competence, Part I'

Charles W. Kreidler, 'English Orthography: A Generative Approach'

Robert Lado, 'Creativity in/and Lauguage'

Raja T. Nasr, 'English Teaching in the Middle East and North Africa: A Case for Standardization'

James W. Ney, 'Aspects of the Theory of Chomsky'

Akira Ota, 'Tense Correlations in English and Japanese'

David W. Reed, 'Toward a Diasystem of English Phonology'

Betty Wallace Robinett, 'On the Horns of a Dilemma: Correcting Compositions'

Yao Shen, 'Three Phonostylistic Features of Browning's End-Rhymes'

以上はすべて含蓄に富んだ価値ある論文ばかりであるが，紙面の関係で特に評者の注意をひいた2，3の論文について感じたことを述べる．

Temple University の Allen 教授の論文は TESOL の研究成果は英語の native speaker である子供達に reading を教える場合にも役立つとして，つぎの4つの点に注意して指導すべきであると説いている．

(1)音声言語では inourhouse の如く音声が切れ目なく続いているが，文字言語では in our house のように切れ目があること，(2)文字言語には音調・強勢があらわれていないこと，(3)文字言語では sense group 毎に junc_ture を正しく置かないと意味が通じなくなること，(4)音声言語では強勢のない音節の母音が縮約されて普通 [ə] となること．

Michigan State University の Barrett 教授の論文では，TG (transformational-generative) grammar を用いて英語の構造を指導する場合には phrase structure rules を避けて surface structure の面だけで指導すべきことを提案している．つまり Paul Roberts の *Modern Grammar* (1967) や Owen Thomas の *Transformational Grammar aud the Teacher of English* (1965) の線に戻って，transformations や nominalization もひとつの surface structure から別の surface structure へ，kernel sentences から derived sentences へということになるわけである．わが国の中学校や高等学校の生徒には，deep structures は全く無縁のものであるから transformational grammar の理論を活用出来る場面では surface structures のみに限るべきであるとする評者の主張と全く一致する．彼の方法の一例だけを挙げておく．

S-1 : I don't know *something*.

S-2 : Someone came here. →(*who* came here)

S-2(2) : I don't know *who came here*.

Arizona State University の Ney 教授の論文の題名は勿論 Chomsky の *Aspects of the Theory of Syntax* (1965)をもじったものである．この論文ではまず現在の transformational grammar では deep structure に関する仮説がまちまちであり，それを正確に定義することは出来ないとし，また Chomsky が deep structure は文の意味を決定するものと定義しているが，native speakers は Chomsky のいう意味での deep structure を探ぐることも出来ないし，そんなものがあることすら滅多に意識していないにも拘らず文の意味は理解出来る．Chomsky のいう the shooting of the hunters でさえ Context が分かれば意味のあいまいさはなくなることを指摘し，これは文法家が context に対応する sememe（意味素）を文法理論の中に組み入れることが出来なかったことによるものであろうと述べている．

つぎにこの論文は Chomsky が data や corpus だけに頼る構造言語学の方法に反対し，native speakers の直観を重視し，自分の文法に用いる用例はすべて自分で作った文を用いていることについて，Chomsky 自身があとで native speakers の直観はあまり当てにならないとしている矛盾をついて，もしそうであれば deep structures は native speakers には分からず，surface structures は意味上重要な関係を示し得ないとすれば，native speakers は自分の話している言語が理解出来ないというのに近いではないかと述べている．

つぎに Chomsky は Bloomfield 流の経験主義に反対して合理主義をとり，又 anti-mentalism に対して mentalism の立場をとっていることは当然 behaviorism を拒否することにつながっているが，一方において子供は大人や他の子供達の行動を観察し，模倣することによって学ぶことを認めている．このことは条件反射から習慣形成へという典型的な behaviorism の理論に当てはまることになるのではないか．勿論習慣形成ですべての言

(p. 63へつづく)

新刊書評

Grammar and Meaning

by James D. McCawley

大修館書店, 1973, pp. 400, ¥5,000

HARADA S. I.

原 田 信 一

1. 本書は大修館書店がこのたび企画したTaishukan Studies in Modern Linguistics というシリーズの2巻目である[1]. 内容は, McCawley が1971年暮までに執筆した, 統辞論ないし意味論に関する論文を, 未出版のものも含めて一応主なものをすべて網羅したものである[2]. 以下に本書を構成する全論文のタイトルを挙げておこう[3].

1. +Quantitative and Qualitative Comparison in English (12, g)
2. +Review of Owen Thomas, *Transformational Grammar and the Teacher of English* (19, f)
3. Concerning the Base Component of a Transformational Grammar (24, b)
4. The Role of Semantics in a Grammar (37, x)
5. Meaning and the Description of Languages (20, m)
6. +The Annotated Respective (12, d)
7. Where Do Noun Phrases Come from? (19, q)
8. Lexical Insertion in a Transformational Grammar without Deep Structure (10, j)
9. Review of Sebeok (ed.), *Current Trends in Linguistics*, Vol. 3 (39, f)
10. +A Note on Multiple Negations, or Why You Don't Not Say No Sentences Like This One (5, a)
11. English as a *VSO* Language (14, k)
12. Review of Otto Jespersen, *Analytic Syntax* (8)
13. On the Applicability of *Vice-Versa* (3)
14. Semantic Representation (16, g)
15. Tense and Time Reference in English (16, c)
16. *Similar in that* S (4)
17. On the Deep Structure of Negative Clauses (7, b)
18. A Program for Logic (35, b)
19. William Dwight Whitney as a Syntactician (13, a)
20. Interpretative Semantics Meets Frankenstein (10, b)
21. Prelexical Syntax (13, c)
22. Notes on Japanese Potential Clauses (12, a)

この内, これまで未出版のものは+をつけた4篇で, 残りのものは雑誌・単行本に一度以上収録されたものの再録である. しかし, 再録のものには修正や注釈がつけ加えられている. 修正の多くは用語や文体上の点であり, 論旨を変えるような修正はしていない. 一方, 注釈の方は, [a,b,c]などのように, アルファベットの肩注の形で, かなり詳しくつけられている. その内容は, 議論・引例の誤りの訂正(例えば p. 96: At the time I wrote this, I believed that...; I now see no justification for such a belief....; p. 119: My proliferation of labels here was unjustified....; p. 132: Nonsense. See note...for a quite solid argument for conjunction reduction that was known in 1967. など), 発表後の文献への言及, および著者の現在の考えの紹介などである. 引用文献は巻末に統一して掲げられており, Authors, Subjects, Rules, Words と4通りの Index がつけられている.

2. 本書に収録された論文は, その趣旨によって, 3つに分類することができる.

(A) 生成文法以前(ないしは, 以外)の言語学者の業

---

1) このシリーズは東大の長谷川欣佑氏とハーバード大の久野 暲氏が general editors となっている. 第1巻は Guy Carden, *English Quantifiers*, 第3巻は Bruce Fraser, *The Verb-Particle Combination in English* (未刊).

2) McCawley の統辞論・意味論の論文で, 本書刊行後のものは次の4つである. "External NP's vs. Annotated Deep Structures," *Linguistic Inquiry* Vol. 4 (1973), "Syntactic and Logical Arguments for Semantic Structures," O. Fujimura et al. (eds.), *Three Dimensions of Linguistic Theory* (TEC, 1973), "The Grammar of Bitching" (未刊), "Review of Chomsky, *Studies on Semantics in Generative Grammar*" (未刊).

3) 題名の次に (12, g) とあるのは, 本文が12ページ, 本書収録にあたってつけ加えられた注が a から g まであることを示す.

績を，生成文法の成果をふまえて再評価するもの．(12，19章．および第9章の大部分)

(B) 生成文法の基本的考え方を出発点として，具体的な事例を検討し，言語分析の方法を教えると同時に，問題とする現象の分析の糸口をつかもうとするもの．(1, 10, 17, 22章．第2章もこの範疇に入れてよいだろう．13，16章では具体的に分析を提示していないが，広い意味でやはりここに属する)

(C) いわゆる「生成意味論」の提唱・正当化・発展に関するもの．(3, 4, 5, 6, 7, 8, 11, 14, 15, 18, 20, 21章．および第9章の一部)

われわれは McCawley といえばすぐ(C)の範疇に属する論文を想い浮かべるが，(A)・(B)に属する論文にも，秀れたものが少なくない．例えば第19章では，現在ではサンスクリット文法以外の分野ではほとんど顧られない（ばかりか，逆に言語学の正しい発展を妨げたという批判さえされている）Whitney が，実は抽象的文構造の存在を（したがって，変形操作の存在を）認めていた，という指摘があるが，伝統文法による言語研究の歴史をたどる上で，非常に興味深い発見であると言える．

しかし，過去にだれがどんなことを言っているかということは，何が真理であるかを知るのに参考になる場合にのみ，学問的意義をもつものであり，この意味で(A)に属する論文よりも(B)に属する論文の方がはるかに重要である．その中でも，特に第2章は一読をお勧めしたい．ここで批評の対象となっている Owen Thomas の本は，英語教師のために書かれた生成文法の入門書としては比較的初期のものでありながら，平易でかつ詳しく，日本でも翻訳が出たりしてかなりポピュラーであるが，数多くの誤解が含まれていて，その点で極めて危険な本である．McCawley はそれらの不備な点をほぼ網羅的に挙げて，なぜそれらが妥当でないかを（くどいほど）論じている．Owen Thomas の本を読んで生成変形文法がどんなものかわかったつもりになっている人は，この章を読んで自分の理解の程度を確認してみることが望ましい．

なお，少し脱線するが，生成文法の方法論の中で最も重要なものは

(1) （言語の）科学的研究は，現象を支配する法則がどんなものであるかについて仮説(＝理論)を立て，これを経験的事実に照らして検証することによって行なわれる．

というものであり，具体的な仮説としては

(2) 言語の構造として，抽象的なものを認める必要がある．

(3) 文法（すなわち，言語構造についての具体的な仮説）は，規則の体系として表わすことができる．

という2つの仮説が根本的である．生成変形文法を論ずる際，これらの根本的な仮説と，個々の現象に対して立てられる具体的仮説とを混同すると，例えば「生成文法では文を S→NP VP のように二分するが，これはよくない．だから，生成文法は正しくない」というような，意味をなさない「批判」が生じることになる．この場合，S→NP VP というのはあくまで一つの具体的な仮説にすぎず，それが妥当か否かは，あくまで(1)の方法論の上に立って決められるべきものであって，かりにこの特定の仮説が正しくないとしてもそのことは直ちに生成変形文法理論そのものを否定する根拠とはなりえない．

3. 最後に，生成意味論の発展における McCawley の役割について触れる必要があろう．McCawley の Chomsky 批判は，本書第3章に始まる．この論文の前半は，基底構造を指定する規則を，句構造規則と考えるべきでない，ということを論じているが，この点はそれ以後あまり問題にされていない．後半では，*Aspects* での語彙挿入に対して批判を加えている．*Aspects* では，基底構造に，後に語彙項目によっておきかえられるべき記号（CS や Δ）を導入しておき，語彙項目は，選択制限などの文脈上の制約を守っているとき，それらの記号のところに挿入される，と考えられていた．これに対して McCawley は，選択制限は意味的な制約であり，語彙項目の挿入の際の条件としてよりも，意味解釈上の制限とみなされるべきである，と論じている．この考えを発展させて，第8章では，語彙項目を一つの構成素をなす意味要素の集まりに挿入することを提案している．この語彙挿入についての研究（14，18，21章に，より詳しく論じられている）が，McCawley の生成意味論に対する貢献の中で最大のものである．

生成意味論に対して，よく次のような批判がされる．すなわち，生成意味論の提案者たちは，その枠内で用いられる規則を公式化して明示的に示さないと．確かに McCawley の論文でも，規則を公式の形で示してあることはほとんどない．しかし，本書 pp. 293f でも述べられているように，公式化は「有意義な一般化」を表わすことができる限りにおいてのみ意味があるのであって，この点で現在の公式化の試みは時期尚早である．McCawley はむしろ，意味表記がどのようなものであるか，ということに興味をもっており，この分野において，多大の業績をあげていることは本書の内容からも明らかである．

（東京都立大学人文学部講師）

新刊紹介

『米国における外国語教育』

J. ウェズリー・チルダーズ著
織谷　馨訳

本書の特色は，米国における外国語教育の歴史と現状について，豊富な調査資料に基いて正確簡明に述べていることである．著者チルダーズ教授は，1928年以来，アーカンソー，インディアナ，ニューヨーク，アイオワ，ネブラスカの各州の大学でスペイン語，フランス語を教え，現在外国語学部の教授，学部長を勤め，合衆国教育局の外国語教育全米委員会委員等としても活躍されたこの道の第一人者である．

原著は，1964 年に The Center for Applied Research in Education, Inc., New York から出版された *Foreign Language Teaching* である．植民地時代から現代にいたるまでの米国の外国語教育の歴史の全時代に及んでいるが，特に1900年から1963年までの変遷，発展の状況が詳しく述べられている．

この本が出版された1964年以後，今日までの最近10年間の進歩も目覚しいものがあるが，これらについての論説を理解するうえにも本書の提供してくれる知識は，大いに役立つであろう．

全巻を通じてどの章も読みごたえがあるが中でも第2章の戦争と政策の現代外国語に対する影響，第3章の現代外国語の指導法と教材は，われわれに豊富な情報を与えてくれ，問題提起としても役立っている．前者ではドイツ語，フランス語，スペイン語，イタリア語，ロシア語，その他の外国語の消長について簡明正確な情報を得ることができるし，後者では現代外国語教育の指導法と教材について詳述し，米陸軍語学指導法や聴話指導法(Oral Approach) の成果について論じ，今後の問題のあり方を示唆している．

訳文は，訳者織谷教授によれば完訳につとめられた由であるが，正確ていねいである．原著の注と共に訳者の注もまた懇切で有益である．

(三省堂出版　A 5判　176頁　¥3,000)

(ELEC 企画部長　**松下幸夫**)

『日本人の表現構造』

D. C. バーンランド著
西山　千訳

「外人」と話をしていて，心理的不安を感じた経験は誰にもある．今まで通用していた対人関係のルールがにわかに崩れ，予想もしない反応が返ってくると，ついことばや相手の物わかりの悪さのせいにする．誰も自分の身についている行動規範が意志疎通のさまたげになっている事には気付かない．異文化間の理解を深める対話には，まず自分も相手も各自の文化の虜であることを自覚し，相互の行動の前提となっている文化的規範に目を開き，相違のなかに共通の場をつくりあげていく事が大切である．こう前置して，対照的な文化を背景とする日本人とアメリカ人とのコミュニケーションにどんな問題があり得るか示唆にとむ発言を行なっているのが本書である．

個人間コミュニケーションの専門家である著者はその洗練された目で日本人に特有のコミュニケーション・パタンをとらえ，これをアメリカ人の感覚的スクリーンに映しとったとき，どんなひずみが生じるかえがいてみせる．このひずみを生む要因として，人とかかわる深度に日米間に根本的文化差があるという仮説をたてているのが本書のひとつの特色である．丁度土居健郎氏が日本人の国民的特性を説明づけるのに「甘え」という中心概念をすえたように，著者は日米のコミュニケーションの形態的相違を解明する鍵としてこの仮説を用いている．即ち人との接触で，日本人には他に公開する自己(公的自己)が少なく，心のなかにたたんでおく自己（私的自己）が大きいという特徴があり，これがアメリカ人との間に異る表現法を生むとみる．この仮説にそって，ことばやしぐさの自己表現法，自己防御のしかたなど，日米間に相違が現われやすいコミュニケーション行為を重点的にとりあげ，日米の学生を対象に興味ある調査を行なっている．仮説をたてて現実と照合し，妥当性を周到に吟味するこの過程に於て，日本人のコミュニケーションの特徴が文化との関連で見事にとらえられ，本書を説得力のあるものにしている．

(サイマル出版会　B 6判　182頁　¥750)

(東京女子大学短大助教授　**小林祐子**)

▒『日本文学英訳の優雅な技術』

J. カーカップ
中野道雄 共著

本書の共著者はすでに『日本人と英米人』というユニークな著作を世に問い，いままであまり研究の対象にならなかった分野に対し，多くの光を投げかけた名コンビである．その第二弾を心まちにしていた評者の期待は寸毫も裏切られなかった．のみならず多くのことを教えられた．

ほんの数例をあげよう．go shopping と go to the shops とのニュアンスのちがいは，そういわれてみると気がつくが，はじめからそれが頭に入って使い分けができるのは，よほど練達の士に限られよう．(p.69) 日本人は impressed という語が好きなようだが，文脈によっては moved のようにもっと明せきな語を用いる必要があるというのも，つい昨日かヤマニ石油相との対談で，うっかり impressed という語を一再ならず使ってしまった評者には，人ごととも思われない．(p.83) into it in the のように短い綴の語をつづけることは避けるべきだ，という注意も有益である．(p.144) to today's という同音の重なりをまずいとし，耳から英語を入れる必要を暗示しているのも，これまた正鵠を射たものといえよう．(p.44)

ただこれらの具体的な知識にも増して本書を際立たせているのは，日本人を理解させるための手だてとして日本文学，それも必ずしも世間的に高名とはいえない人人の作品，の英訳にかける共著者の情熱が随所にほとばしり出ている点であり，いま一つは共著者の強烈な個性であろう．おたがいの文化を皮相的にではなく豊かにするための翻訳作品を，根気よく清新な目で探し求めていることは，第4章の「翻訳の実践」の中に収められた多くの無名の作品——そのいくつかは評者のごとき心なき身をも，打つものがあった——からも明らかである．とくに高木恭造の詩は，原作翻訳ともに評者に新しい世界を啓いてくれた．

個性の強烈さは，sophomore とか campus とかいうアメリカ語の使用を悲しんでいる点にも，明らかにみられる．(p.132) これはいささか奇矯ともみられる歎きだが発話とか作文とかが個人的行為であり，広大な英語社会の慣用法をそのまま自己の言語の中に具現している個人はない (p.22) ことを思えば，あるいは理にかなっているのかも知れない．むしろ共著者の個性的な文体感覚，言語感覚をすなおに受けとることが，われわれの英文修業に資する所以である，とも考えられるのである．

ただ率直にいって，評者はこの本を読んで英語を書いたり話したりすることがおそろしくなった．かつてサンソム・ヴァインズという2人の英国人が同じ版元から英文作法の書物を出し，あれを読むと英語がこわくて書けなくなる，と評されたものだが，それに近い感じを抱かせられた．その著者の一人サンソム氏は，のちに日本史の大家になったサンソム卿だが，あの名著の復刊を望むとともに，この近著を通じ少しでも英文の秘儀に参画したいとも願っている．ただしこわいもの見たさの感は拭えないが．

(研究社　四六判　224頁　¥980)

(国際商科大学教授　**國弘正雄**)

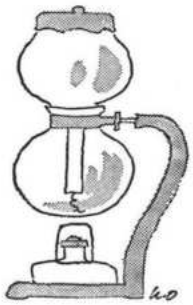
(p. 34よりつづき)

yes-no question が，屢々上昇調になるのも，それが(31)の or 以下が脱落したと考えれば理解できる．

注2で wh- 疑問詞は wh+some という形で基底にあらわれるといったが，間接疑問を導く whether は wh+either という形で基底文に導入される．そして(31)のような独立疑問文では文頭の whether が削除されるという変形が行なわれ，(32)のような文は(31)のような文の or 以下が削除されて出て来る．変形によってこれらの文の知的，論理的意味はかわらない．

しかし(31)と(32)の文は，知的意味は同様でも，感情的ニュアンスは異なる．(31) のような文は「John に会ったのか，会わないのか，はっきりしろ」といったような意味合いで，相手の煮え切らない態度にいらいらしながらいうような時に多く用いられる．(32)には特別そうしたニュアンスはない．自然言語は論理だけでは片づかない．と同時にこうした違いがあるからこそ，論理的には余分な(31)が依然として用いつづけられているのであろう．

(東京教育大学教授)



＝新刊案内＝

『怒りと良心——人種問題を語る』 J.ボールドウィン，M.ミード著，大庭みな子訳　B6判 310頁 980円，平凡社

アメリカに関心を持つ人ならこの黒人作家と女流文化人類学者の対談に興味を引かれずにはいられなく，事実彼らの白熱した討論は読者をも引きずり込まずにおかない．こういう対談を可能にした一つの理由はミードが本書110頁で指摘しているように，教会とは別なクリスチャニティにもとづくモラルを共有している点であり，その意味で本書はアメリカの困難と可能性の両方を適確に示している．

『アメリカ強制収容所』 ミチコ・ウェグリン著，山岡清二監訳　四六判 373頁 980円，政治広報センター（港区赤坂 4-13-8）

日本軍の真珠湾攻撃を契機に，集団ヒステリー状態へと激化した第2次世界大戦下の反日感情のなかから，執拗に完遂されたアメリカ西海岸の日系人強制収容を，自身の体験を原点に，克明な調査によって描いたドキュメント．「もう一つの日本人論」としても多くの問題を含む．

『紳士道と武士道』 トレバー・レゲット著　B6判 244頁 890円，サイマル出版会

達意の日本語で書かれた出色のイギリス人論．イギリス紳士の日本観を含む．

『イギリスのうた』 中村敬著　A5判 204頁 1,000円，研究社

厳選された30曲を糸口に，イギリスを愛する著者が英国人の文化と生活を，その裏面をも含めて紹介し，イギリス人観に新しい地平を提示している．

『日本美は可能か』 日本文化会議編　四六判　420頁 1,000円，研究社

『日本戦後詩の展望』 小海永二著　四六判 322頁 800円，研究社

いわゆる戦後詩の全体像を一つのパースペクティブにまとめ上げ，多くの問題点を読み易く述べている．

スタンレー・ハイマン　批評の方法：『エンプソンの方法』 岡本靖正訳　四六判 94頁 700円，**『心理学的方法』** 木村治美訳　66頁 500円，大修館書店

『D.H.ロレンス——その文学と人生』 北沢滋久著　A5判 442頁 2,300円，墨水書房

『エッダ——古代北欧歌謡集』 谷口幸男訳　B6判 324頁 1,300円，新潮社

ヨーロッパ文化を形成した三大源流としてヘレニズム，ヘブライズム，ゲルマニズムをあげるのは常識になっている．ゲルマン人の世界観を伝える「詩のエッダ」の全部と，スノリの「散文のエッダ」の主要部分を古北欧語の原典から訳したもの．

『私の辞書』 小林英夫編　B6判 366頁 1,800円，丸善

世界の言語から40余りを選び，辞書と入門書についてそれぞれの専門家が執筆した言葉の世界への案内．

『英絵ハンドブック』 國弘正雄編者　A5判　233頁 1,600円，バナジアン（品川区西五反田 7-22-17）

『ハローフレンズ！』 トミー植松著　新書判 262頁 650円 評論社

『常識としての英語の諺 800』 R.ライダウト，C.ウィティング著　中西秀男訳　新書判 212頁 500円，北星堂書店

『英語語法・あ・ら・かると』 山田政美著　B6判 238頁 880円，文建書房

『世界のビジネスマンとつきあう法』 金山宣夫，トレードビア編集部編著　新書判 233頁 450円，ダイヤモンド社

『'74 年版ジャパンタイムズ社説集』 ジャパンタイムズ編　B6判 190頁 600円，ジャパンタイムズ出版部

(p. 58よりつづき)

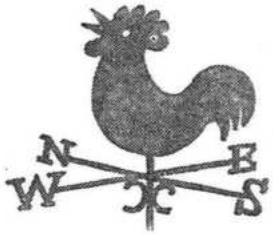
語現象を説明することは無理かも知れないけれども，だからといってこの理論を棄てなければならないという理由にはならないとしている．

Ney 教授の論文はこのように Chomsky の言語理論の矛盾を痛烈に衝いているけれども，教授は Chomsky の言語学に対する貢献を否定するものではなく，Chomsky の言語理論以前の言語学の状態に戻りたいと考えている言語学者はほとんどないであろうと結んでいる．

太田教授の論文は1971年の Comparison of English and Japanese に続くもので前者が独立文における tense と aspect の比較研究であるのに対して，後者は従属節における tense の比較研究である．紙面の関係で招介出来ないのが残念である．

評者が University of Michigan で Marckwardt 教授の指導を受けたのは1951—1952年であったが，いつも学生に与える宿題を印刷したプリント以外には何も持たず，手ぶらで教室にあらわれ，あの名講義を滔々と述べる明晰な頭脳には驚嘆したものであるが，それがあとで名著 *American English* となって世に出たのである．教授がいつまでもお元気でいられることを祈る．

(ELEC 研究開発部長)



展望通信

▶ELEC 月例研究会

ELEC 会館において毎月行なわれている月例研究会の4月以降の予定はつぎの通りである．いずれも入場無料．

第71回　4月27日(土)　2：30—4：30
「最近における英語教授理論の動向」
ELEC 研究開発部長　山家　保氏

第72回　5月25日(土)　2：30—4：30
"Programmed Instruction in Teaching English as a Foreign Language"
東京外国語大学講師
Mr. Stephen N. Williams

第73回　6月29日(土)　2：30—4：30
「身振り言語」
東京女子大学短期大学部助教授　小林祐子氏

▶1974 年 ELEC 夏期英語教育研修会

本年度の ELEC 夏期英語教育研修会は，文部省の後援のもとに，中学校および高等学校の英語科教員を対象としてつぎの通り実施される．

A. ELEC 夏期英語教育研修会（通学制）
会期：昭和49年7月29日から8月10日まで
会場：ELEC 英語研修所（東京都千代田区神田神保町 3-8）
募集人員：150 名
参加費：13,000 円

B. ELEC 夏期英語教育研修会（合宿制）
会期：昭和49年8月18日から8月24日まで
会場：東京都八王子市大学セミナーハウス（東京都八王子市下袖木）
募集人員：60 名
参加費：31,000 円

なお，詳細については25円切手同封のうえ，東京都千代田区神田神保町 3-8　ELEC 英語研修所「夏期英語教育研修会」係あて，募集要項を請求されたい．

▶ELEC 海外英語研修

ELEC では今夏「ミシガン州立大学英語研修旅行」を次の通り実施する．

1. 旅行期間　7月29日(月)から8月27日(火)まで
2. 英語研修　ミシガン州立大学英語研修センターで 7月31日から8月19日まで
3. 旅行経費　480,000 円
4. 募集人員　40 名
5. 申　込　「募集要項」および「申込書」は，ELEC あて請求する．

▶TOEFL 模擬試験

TOEFL 受験者のための模擬試験が5月10日(金)午後1時から ELEC 会館で実施される．受験希望者は「ELEC 海外留学英語試験」係宛，願書を請求されたい．なお，この試験は，ミシガン・テスト，通訳案内業資格試験，ケンブリッジ・サティフィケートなどの受験者のための模擬試験としても利用できる．

▶ELEC 英語研修所「TOEFL」受験科

米国留学英語検定試験 (TOEFL) 受験のための短期集中準備コース Listening, Reading, Writing, Structure, Vocabulary の5つの領域に関して，テスト，解説，練習，討議を行なう．

第1期　4月23日(火)～6月4日(火)
第2期　6月6日(木)～7月18日(木)
第3期　9月17日(火)～11月7日(木)

▶*English Teaching Forum* の配布

ELEC では USIA 発行の英語教育専門誌 *English Teaching Forum* の配布を行なっているので，購読を希望される方は ELEC 出版部宛申し込まれたい．購読料年額1,200円（含送料）．

■本誌の年間予約購読をおすすめします．購読料は年額1,700 円，送料は当出版部で負担いたします．なお，本誌の合本第2巻（第13号～第24号）および第3巻（第25号～第36号）の在庫が若干部あります．ご希望の方は当出版部へお申し込み下さい．定価は各3,000円です．

英語展望 (ELEC Bulletin)　第 45 号
定価 430 円（送料 85 円）
昭和 49 年 4 月 1 日　発行
©編集人　中　島　文　雄
発行人　竹　内　俊　一
印刷所　大日本印刷株式会社
東京都新宿区市谷加賀町1の12
電話 (269) 1111 (大代表)
発行所　ELEC（エレック）(財団法人英語教育協議会)
東京都千代田区神田神保町3の8
電話 (265) 8911～8916
振替・東京 11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC